De nordiska språken

北欧語のはなし

尾　崎　　義著

東京　大学書林　発行

まえがき

最近，北欧諸国の学問や文芸や社会制度などに対する関心が非常に高まってきたことは事実で，いろいろな方面で《北欧ブーム》の声も聞かれるが――これが単なる流行ではないことを，わたくしは希っている――それにつれて，北欧語熱もますますあふられているようで，とにかく北欧語を学習するひとがふえることは，まことに欣快にたえない。

ところで，今度大学書林が，デンマーク語，スウェーデン語，ノールウェイ語の文法入門書を《語学文庫》から出すことになったが，その前に，これから北欧語を学習しようとする方々や，既に学習中の方々のために，これら北欧語全般について，またその背景になるような事柄について，概説を軽い読物風に書いてみてくれないか，とのわたくしへの依頼である。つまり，どの北欧語を学ぶにしても，そのことばの特質のようなものについて荒筋だけでも心得ておくこと，そのことばの文化的意義を知っておくこと，さらに他の二つの兄弟語との《つながり》や，英語，ドイツ語との関係を知っておくことは，その学習上に大いにプラスになるからというのである。まことに，その通りである。いままで，外国語を学んできた多くのひとたちは，自分が現在学びつつあることばの文化的価値や，そのことばの地位などには，多少関心を示しても，そのことばと親近関係にあることばのことは，余りかえり見もしないのではなかったか。あれだけドイツ語を学ぶひとがあるのに，隣国オランダ語と関連させて学ぶひとは，果して幾パーセントあるかしら。何も語学を専門にやるひとでなくとも，そうした勉強はドイツ語の勉強自体にも大きいプラスになる筈である。

そこで，わたくしは，まだ北欧語は全然やったことはないが，英語かドイツ語，あるいは両方をやったという方々を対象に，限られたページ数ではあるが，できるだけ北欧語の全貌について話

してみたいと思い，あえて非才をかえりみず，《露払い》の筆をとった次第である。

書き終ってみると，自分ながらあれこれと註文をつけたくなるぐらいで，説明のへたなことはご勘弁ねがうとして，北欧語をこれから始めたいという意欲をもっておられた方々が，退屈の余り，北欧語そのものにも愛想をつかせてしまうのではないか，と心配でもある。もともと，北欧語の宣伝と，北欧語学習への勧誘が，本書企画の狙いであった筈だから，巧みに読者の心理をつかまえて，一挙に北欧語へひきずり込むだけの，力強い記述が必要であった。しかし，わたくしはそういうことは不得意なので，ただ生真面目に，ことばを中心に，お話をするだけの能しかない。この点を諒承して下すって，ひとりでも多く《そうか，じゃひとつやってみるか》と決心して頂けたら，それでいいのであって，《そんな，やっかいなことばなら，やめだ》と逆の決心をする方が出ないことを，ひたすら念じている。

昭和 33 年 5 月

著　者

略　語

[エ]	英語	単.	単数
[ド]	ドイツ語	複.	複数
[デ]	デンマーク語	主.	主格（第一格）
[ス]	スウェーデン語	生.	生格（第二格）
[ノ]	ノールウェイ語	与.	与格（第三格）
[ア]	アイスランド語	対.	対格（第四格）
[古]	古代語；例えば [古エ] は古代英語	*cf.*	参照

目　　次

1. 北欧語は，隣国のことばである

北欧とは?

近頃わたくしは，口ぐせのように，《北欧の国々も，いまでは，われわれの隣国だ》といっている。ヨーロッパの北の隅に遠くはなれている国々，北極圏の北まで長くのびているさいはての国々，ということだけで，イギリスやフランスやドイツなどにくらべて，よほど遠い国ででもあるかのように，ついこの間まで思われていた北欧諸国——その一つ，例えばデンマークへは，SAS の北極航空路で飛ぶと，羽田空港を出発してひと飛び，途中アラスカのアンカレッジでちょっと一服，東京から三十時間余りで，その首府コペンハーゲン——デンマーク語では København，大体キョベンハウンと読む——につく。そこから，スウェーデンのストックホルム Stockholm，ノールウェイのオスロ Oslo までは，飛行機で一時間半ぐらいの旅でしかない。ということになると，これらの北欧の国々も，まずアメリカなみに，隣国扱いにしても，決して誇張ではないと思うのである。だから，廻りくどい言いかたになったが，その北欧の国々のことばは，われわれの隣国のことばである，というわけなのである。

ところで，わたくしは，いままでに《北欧の国々》という語を，いつも自分が使っていて少しも疑念が生じないつもりで，用いてきたが，やはり最初からはっきりさせておかなければならないことかも知れない。大体，北欧とか南欧とかいっても，ばく然たる概念で，その分けかたもひとによって違うようである。イタリー，スペイン，フランスなどを南欧として，オランダ，ドイツなどを北欧の国というひともある．昔は，バルチック海沿岸のラトヴィヤだの，エストニヤだの，レニングラードあたりのヨーロ

ッパ・ロシアなども，北欧と呼ばれた。しかし，わたくしが《北欧の国々》というのは，

デンマーク，スウェーデン，ノールウェイ，アイスランド，フィンランド

のことである。もっとも，このうちのアイスランドは，交通の点からいうと，ほかの四国からはとび離れていて，《隣国感》がもてないかも知れないし，現在ではまだアイスランドとわが国の交渉も少いので，なおさらなじみが浅いのかもしれない。

それにしても，デンマーク，スウェーデン，ノールウェイ，アイスランドの四国は，人種や言語の上から，また宗教や一般文化の上から，さらに歴史の上からみて，極めて密接なつながりがあって，俗にいう兄弟国，姉妹国の間柄なのである。隣り合っていてもフランスとドイツのような，或いはドイツとチェコスロヴァキアのような関係ではなく，スペインとポルトガルとの関係に似ている。言語だけからいえば，少くともノールウェイとスウェーデンとの関係は，スペインとポルトガルのそれ以上に，濃いつながりがあると思う。

だから，《北欧の国々》といって，それらの四国をひとからげに呼んでも，少しも不自然ではないのである。ただ地理的にヨーロッパの北にかたまっている国々だというので，《北欧の国々》といっているのではない。

しかし，ここに問題になるのは，フィンランドの取扱いについてである。

実は，わたくしが関係している北欧文化協会では，《北欧文化》の範囲を

デンマーク，スウェーデン，ノールウェイ，アイスランド，フィンランドの文化

というふうに決めている。今日では，《北欧五カ国》という呼称は，国際的に通用する呼び方になっているのだから，《北欧文化》

のなかに，フィンランド文化が含まれるのは当然ではないか，といわれるかも知れないが，実はそう簡単な理由からではないのである。少し横道にそれるが，元来フィンランドは，ほかの北欧四国とは異質の国なのである。フィンランドの住民の90% 以上は，ほかのヨーロッパ語と全く言語系統を異にするフィン語を母語とするフィン民族で，フィン民族固有の文化をもっていた——エストニヤ人もフィン語と兄弟語であるエストニヤ語を母語とし，フィン人とともにフィン語派言語の担い手であり，さらに，ハンガリーのマジャル語とこのフィン語派言語とが，ヨーロッパにおけるフィン・ウゴル語族に属する言語を代表している——つまり，フィンランドは言語とか人種とかの点からいうと，ヨーロッパでの《孤児》的存在であった。しかし，1154 年スウェーデン領となり，キリスト教文化への窓が開かれて以来，スウェーデンと同じ西欧文化圏を形成してきた。スウェーデンの治下にあること数百年ののち，1809 年には大公国として帝政ロシヤに併合されたが，文化史的にみれば，依然として西欧文化とのつながりが強く，1917 年 12 月 6 日フィンランドが独立するまでの百余年間，ロシヤからの文化的影響はほとんどなかったといっていいぐらい，西欧的であった。現在ももちろん，そうである。こんなわけで，政治的にどうあろうと，それよりさきに，フィンランドは文化的には《北欧の国々》の仲間にはいっていたのである。

北欧語とは?

ところが，《北欧語》となると，《北欧の国々のことば》と，そう簡単には片付けられない。フィンランドのフィン語は，北欧語ではないからである。また，北欧の国々には，例えばスウェーデンやノールウェイやフィンランドの北部にラップ人という，少数異民族が住んでいて，フィン語派に属するラップ語を母語としているように，北欧語以外のことばも話されているからである。

《北欧語》は，スカンジナヴィヤ語と呼ばれることもあるが，

むしろノルド語又はノース語という方が適切であろう。現在は

デンマーク語 (dansk)
スウェーデン語 (svenska)
ノールウェイ語 (norsk)
アイスランド語 (íslenzka)
フェーレョー語 (færφisk)

が，この《北欧語》の集群をなしている。最後にあげたフェーレョー語は，デンマークの自治領で，スコットランドとアイスランドの中間の北大西洋上にあるフェーレョー群島 (Færφerne) で話されていることばである。前にもいったように，フィンランドのフィン語や，ラップ人の話すラップ語などは，フィン・ウゴル語族の言語であって，北欧語ではない。ただ，フィンランドの住民中には8%以上のスウェーデン系住民があって，スウェーデン語を母語としている関係もあり，フィンランドでは，スウェーデン語も公用語になっている，ということは知っておいて欲しい。

こうして，わたくしが最初にいいたいと思ったことは，要約すると，

デンマーク語，スウェーデン語，ノールウェイ語は，隣国のことばである

ということなのである。アイスランド語やフェーレョー語のことは，あとで少し述べることもあるが，ここでは大体，上に掲げた三つのことばを対象として，話を進めていきたい。

2. 北欧語の勢力

北欧語を学習することは——

英語，ドイツ語ないしはフランス語などを勉強するひとでも，大体，それらのことばを学び出した以上は，何か目的がある筈で——その単位をとっておかないと卒業証書がもらえないから，とかで仕方なしにやってるだけだというひとは，別問題であるが——学問のためにしろ，仕事の上にしろ，その外国語を役立てたい，或いは趣味，教養のためにも外国の本が読みたい，常に外国の新聞や雑誌などが読みたい，といった願いごとがあることと思う。それが，普通学校で誰でも習うという外国語でない場合，つまり特殊外国語——実は特殊でも何でもないのだが，英，独，仏以外の外国語は，よくそう呼ばれるようである——の場合だと，それがもっとはっきりしている。ロシヤ語だとか，中国語だとか，或いはマレー語だとかを専門に習うひとなら——たまには，外国語大学に入学するについて，ただばく然とそういう外国語を選んだひとがいるかも知れないが——ことに夜学とか講習会でそれを勉強しようというひとなら，必らずはっきりした目的があることに違いない。ところが，さらにどこの学校でも教えていない外国語，例えば北欧語となると，もう一層学習の目的がはっきりしたひとでないと，やってみようという気になれない。しかも，そういうひとは大体は，学校を卒業したひと，実社会で働いているひとである。少くとも，それが学問のためであっても，仕事のためであっても，或いは教養のためであっても，とにかく動機のいかんを問わず，はっきりとした何かの目的と，自発的にどうしても《それをやるんだ》という決意とがある筈である。

だから，わたくしはいま，そういう方々に対して，北欧語を学

ぶことの《利得》なんかを，くどくどしくお話しする必要はないのである。しかし，これから《何かの目的》のために，北欧語の学習しようと《決意》をする方々のために，北欧語がどんなことばであるか，北欧語の学習はむつかしいのか，やさしいのか，また北欧語の知識がどれほどの《知的資産》になるか，などについて，いろいろと話してみたいのである。それは同時に，既に北欧語のいずれかを学習しつつある方々にも，多少とも参考になることと思うし，またそのつもりで話を進めていきたいと考えている。

この章の題を，わたくしは《北欧語の勢力》と名付けた。そのわけはこうである。世の中にはたまには面白い議論をするひとがあって，《北欧語なんか勉強してみたって，たかが数百万ぐらいの人間しか喋っていないことばじゃないか。同じ暇と金をかけるなら，もっとたくさんの人間が使っていることばをやるほうが得じゃないかな》という。しかし，このような説は，少くとも北欧語をやっているひと，北欧語に関心のあるひとなら，一笑にふしてしまうに違いない。真面目になって，反駁する気にもなれないことだ。北欧語に対して各人が認めている価値は，全く主観的なものであるから，議論はややこしくなってくる。けれども，《北欧語党》の方々にも，《たかが数百万ぐらいの人間しか喋っていないことば》ということを，はっきり知っておいてもらいたいのである。そのことは，換言すれば，北欧語の勢力と分布を知ることである。《勢力》という表現は，甚だおだやかではないが，その意味は，実はそれを話す人間の大体の数ということに過ぎないのである。

そこで，北欧語の分布と人口は次ぎのとおりである。

デンマーク語の分布

(1) **デンマーク語**

デンマーク本国	445 万 4 千
フェーレョー島	3 万 2 千
グリーンランド	2 万 6 千

このうち，フェーレョー島の 3 万 2 千は，フェーレョー語――それは古くは西ノールウェイ語方言の一つであったが，今日ではアイスランド語に極めて近い言語であって一つの言語として取扱われている――を話す生粋のフェーレョー島住民が主であるが，デンマーク語も同時に用いられており，本国から渡っている官吏や商人も住んでいる。

グリーンランド島の人口のなかには，デンマーク人を主とするヨーロッパ人が約千人ぐらいで，あとはグリーンランド人と呼ばれる，ヨーロッパ人とエスキモーとの混血人で，純粋のエスキモーは 2 千ぐらいしか住んでいないということである。もちろん，エスキモー語であるグリーンランド語が話されており，グリーンランド語の新聞もあるが，デンマーク政府の文教政策ではかれらの言語を残すと同時に，デンマーク語も普及させようとしているので，大部分の教育をうけたグリーンランド人は，デンマーク語をも解し，かつ話している。

他方，デンマーク本国でも，1020 年ドイツから割譲をうけた北部スレースウイ（シュレースヴィッヒ）には，約 3 万ぐらいドイツ語を母語とするドイツ少数民族が住んでいる。

いま述べたように，デンマーク語の分布は，グリーンランドを計算にいれると，途方もない広い面積に分布していることになるが，それを話す人口は，結局 450 万ぐらいである。

スウェーデン語の分布

(2) **スウェーデン語**

スウェーデン本国	715 万
フィンランド西及び南沿岸地域	35 万

スウェーデン語の分布からいうと，まず以上のほかに，現在はソ連に併合されている，元のエストニヤの北西沿岸の小地域，バルチック海とフィンランド湾にあるナルギョー (Nargö) ほか数コの島々やダーギョー (Dagö) なども含まれるのであるが，現在

はたしてどれほどの住民がスウェーデン語を母語としているか，つまびらかでない。

スウェーデン北部のラップランド地方や，中部のイェムトランド地方では，フィン語やラップ語を母語とする住民がいる。

(3) ノールウェイ語

ノールウェイ語の分布

ノールウェイ本国　330万

そのほか，スピッツベルゲン群島（ノールウェイではスヴァルバルト Svalbard といってる）や，ヤーン・マイエン島 (Jan Mayen) などの領土も，ノールウェイ語分布圏にいれていい筈である。

(4) アイスランド語

アイスランド語の分布

アイスランド　14万4千

以上で，北欧語の分布と，それぞれのことばを話す人口がわかったわけで，いま大雑把にいって，1,500万以上の人間が北欧語を母語としているといえる。ところで，ノールウェイ語なり，スウェーデン語なりを一つ知っていると，――アイスランド語は例外として――ほかの北欧語が判るのだから，北欧語の一つを学ぶことは，1,500万人のことばを学ぶことになる，といっても過言ではない。

なお，北欧語の分布について，語るとき忘れてならないのは，アメリカにいる北欧各国の移住民のことである。いま，デンマークとノールウェイからの移住民については，余り確かな資料が手元にないので，残念ながら詳しいことは述べられない。しかし，スウェーデン人一世移住民は，1940年に約45万で，その後一世移住民の死亡による減少がある一方には，二世，三世が殖えており，現在全部でおよそ150万のスウェーデン系アメリカ市民が，主としてニュー・ヨーク，マサチューセッツ，カネチカット，イリノイ，ミシガン，ウィスコンシン，ミネソタ，アイオワ等の各州に住んでいる。町の住民が，三人に一人がスウェーデン系で

あるといった町もあるという。スウェーデン語の日刊新聞が発行されている市もあるし，スウェーデン語を教えるカレッジもある。スウェーデンの片田舎の，英語も碌に知らない青年が，アメリカにいる親戚を頼って，ある市までたどりついたものの，不案内のため途方にくれ，つい通りすがりの人に思わずスウェーデン語で話しかけたら，相手が《おゝ，お前は国からきたのか》と言って，早速案内してくれた，という話を聞いている。そういうわけで，この約150万のスウェーデン系アメリカ市民は，アメリカにあってスウェーデン語分布図を形造っていることになる。

別の統計によると，現在アメリカに，約300万のデンマーク人，ノールウェイ人，スウェーデン人移住民の一世ないし二世，三世がいるとのことであるから，スウェーデン系の150万以外の150万は，デンマーク人とノールウェイ人移住民ということになる。そのうちでは，ノールウェイ系の方がデンマーク系よりも多いと思われる。これら，北欧からの移住民は，それぞれ自己の教会をもっていて，それによる団結が強いということである。また，かれらがアメリカと祖国との文化関係を助長するため，1911年に《アメリカ・スカンジナヴィヤ財団》American-Scandinavian Foundation を設立したことも特筆するに価する。この Foundation からは，多くの北欧古典文学や近代文学の翻訳や評論が出版されている外，北欧語関係の参考書なども出されているからである。

以上，わたくしは，現在の北欧語の分布と勢力について述べてきたが，古い時代にさかのぼると，例えばヴィーキング Viking 時代には，いまのイギリス本土の半分ぐらいと，フランスのノルマンディー地方とが，古代北欧語の勢力圏であったこともあるが，それは後の機会にふれることにする。

3. 北欧文化への招待

北欧語の価値

ことばが通用する地域とか，範囲とかからみると，北欧語は決して世界的なことばではないこと，既に読者も十分納得しておいでのことである。英語が，世界語であることは別としても，フランス語は昔から，国際会議や外交交渉などでは国際語であるし，ドイツ語も近頃では，国際的な学会の会議などで，会議用語になることがある。スペイン語は，本国スペインの国語であるほか，ブラジル——ここはポルトガル語だ——を除いた南米諸国，中米，メキシコなどで通用することばであるし，国際連合では公用語にもなっている。最近のわが国でのスペイン語ブームは理由のないことではない。こうしたヨーロッパのほかのことばに比べると，北欧語は，実用性からいうと，極めて限られたものである。それらは，結局北欧文化への鍵であるということ以外には，余り実用性がないことになる。いま，わたくしは，北欧旅行のためとか貿易のためとか，彼地のペンパルとの文通のためとかに，北欧語をわざわざ学習しようとするひと，既にやっているひと，のことを全然考えないわけではない。しかし，そうしたひとたちは，ごく少数のことと思うので，北欧語の実用性のなかには，ことさらそれを含めないでいるに過ぎない。また，北欧語自体の学問的な研究，これも別問題で，これらのことばを，本来の意味における《語学》研究の対象としたり，北欧語のなにかの言語現象を，言語学的に研究したりすることも，もちろんいままで述べてきた実用性とは関係のないことである。

だから北欧語は，普通にいう意味での国際性とか実用性とかはまずもち合わせないといっていい。前に，甚だぼくぜんたるいい

方だが，北欧文化への鍵といったが，北欧語の魅力はそれだけでも十分である。北欧文学を原語で心ゆくばかり鑑賞したり，人文科学や自然科学の文献を読んだり，法律や社会制度などの原書を読んだりすること，それだけを北欧語学習の目的にしても，十分に pay すると思っている。

もちろん，ここで北欧文化全般にわたって話している余裕はないので，それは読者のみなさんに，何か適当な参考書でみていただくようお願いする。第一，わたくし自身でも，北欧文化全般について語る力などはもっていない。ただ，長い間北欧に関係していたので，いろいろな機会に読んだり，また耳学問などで，北欧三国には，今日でもわれわれの学ぶべきことが極めてたくさんあることは承知している。以前は，わが国では学問，ことに自然科学の方面だと，ドイツ始め，政治的にも大国といわれる国々ばかりの大学や学者ばかりが，いつも話題にのぼり，わたしたちのような専門外のものが，新聞や雑誌などで眼にふれる外国学者の名は，大抵大国の学者のそれであった。ところが，終戦後は急に様子が変ってきて，北欧の学問に対する関心が高まったせいか，よく北欧学者の名前がでてくるようになった。戦前は，北欧三国の科学なんか問題にしていなかったのに，ドイツの混乱で日本人の視野が急に広くなったのか，理由は知らないが，とにかく，急にあちらの学者の仕事が日本でも高く評価されだしたようである。その証拠に，日本の学者——ことに新進の若い学者——が，スウェーデン語で書かれた論文をわたくしのところへもってきて，何かと質問する，といったことがたびたびあった。多くは物理学，化学，生化学，医学のものだった。たまには，英語学に関する論文もあった。もちろん，自然科学の方は門外漢なので，内容だの数式の意味は全然判らないが，そういう論文は文章構造が簡単なので，しかも学術用語は大体共通なので，質問者にそのように説明してさしあげることにしていた。なかには《じゃ早速辞書でも

貰って，ヒロイ読みします》という頼もしい元気のいい学者もあったと，記憶している。《とにかくドイツ語と英語の力を働かせ，辞書をおひきになれば，大体お判りになるでしょう。論文は記述体が多いことだし，用語は英独と同じようだし，第一内容的に理解おできになるんですから，たいしてむつかしいことありませんよ》と，わたくしがいうので，大いに安心された方が多いようである。

北欧の学問と文化

横道へそれそうになったが，そんな有様で今日ではもう，北欧三国の科学のレベルは，十分に知られ，専門家以外のものでも，何かとあちらの学者の名前や業績を読んだりする機会が多くなった。といって，近頃急にこの三国の学問が進んできたというのでもあるまい。専門家は専門家で，昔から北欧の学者のことは百も承知であったろうし，ただわが国では一般に有名ではなかったに過ぎないのかも知れない。それでは，その北欧三国が，どんなえらい学者をもっているか，ということになるが，これもわたくしのようなものには，科学の各分野について，もれなくそれを挙げることはできない。どの分野にどんな大学者がいるかは，恐らくその分野の専門家でないと，よくは判るまい。そこで，わたくしは，素人流で，いままでに北欧三国の学者から，ノベル賞をもらった学者がどれだけいるか，をみて，それによって読者に《北欧の学問水準の高さ加減》を納得してもらおうと思う。ノベル賞のことについては，もうここで書く必要もないぐらい，周知のことであるから省略するとして，一つ附言したいのは，ノベル賞をもらわないでも優秀な学者もあるだろうが，これをもらった学者のなかには，優秀でない学者はない，ということ，それから，受賞候補者が各部門とも押すな押すなで，しかも毎年受賞者は一人か，或いは二，三人で分割受賞ということになっているため《万年候補者》もできようし，長い間待たされているうちに，そのひとの業績の影がうすくなるということもある。原則は，賞金が授与され

る前の年において，人類の福祉に貢献するような功績があった，ということである。だから《万年候補者》というのは，反面では，相当えらい学者ということにもなるし，それだけチャンスも少いともいえるのではなかろうか。そこで，ノベル財団から出されている年鑑によって，1901 年以降の北欧三国の受賞者をひろってみると，次ぎのとおりである。

ノベル賞金受賞の北欧人

(イ) 物理学賞

1912 年：グスタヴ・ダレーン Gustaf Dalén (1869–1937)（スウェーデン）《ガスアキュムレーターとそれを利用した点滅灯台及び浮標の発明》

1922 年：ニルス・ボーア Niels Bohr (1885–　)（デンマーク）《原子構造と原子放射能の研究》。

1924 年：カール・シーグバーン Karl Manne Georg Siegbahn (1886–　)（スウェーデン）《X線分析の研究》

(ロ) 化学賞

1903 年：スヴァンテ・アレーニゥス Svante August Arrhenius (1859–1927)（スウェーデン）《電気解離の理論による化学の発達への寄与》

1926 年：テー・スヴェードベルィ The Svedberg (1884–　)（スウェーデン）《遠心器による高度分散膠質の研究》

1948 年：アーネ・ティセーリゥス Arne W. K. Tiselius (1902–　)（スウェーデン）《蛋白質の研究》

(ハ) 生理学及び医学賞

1903 年：ニルス・フィンスン Niels Ryberg Finsen (1860–1904)（デンマーク）《痘痕の光線療法の研究》

1911 年：アルヴァル・グル ストランド Allvar Gullstrand (1862–1930)（スウェーデン）《眼科の研究，とくに眼の光線屈折についての研究》

1920 年：アウグスト・クローグ August Krogh (1874–1949)

(デンマーク)《毛細管運動調節に関する研究》

1926 年：ヨハネス・フィビガー Johannes Fibiger (1867–1928) (デンマーク)《ガン治療の研究》

1943 年：ヘンリック・ダム Henrik Dam (1895–　) (デンマーク)《K ヴィタミンの発見》

1955 年：アクセル・ヒューゴ・テオレル Axel Hugo Theorell (1903–　)(スウェーデン)《酸化酵素に関する研究》

このように，受賞者の数は必らずしも多くはないけれども，また見かたによっては，ひとりの受賞者が出ることは，その国のその学問分野の水準が極めて高いことを示しているともいえるのではないか——例えば，湯川博士をもつわが国の原子物理学の水準を考えてみたい。

以上は自然科学における北欧三国の学問の水準の高さの尺度のつもりで，物理学，化学，生理学及び医学の三部門のノベル賞受賞者をあげたわけだが，狭い意味の学問でなく，一般的に文化というか，世界人類への貢献という立場からみると，文学賞と平和賞の受賞者を出していることも，何かの尺度になるのではないかと思うので，以下に挙げておきたい。

(ニ) 文学賞

1903 年：ビョンスチェーネ・ビョルンソン Bjørnstjerne Bjørnson (1832–1910) (ノールウェイ)

1909 年：セルマ・ラーゲリョーヴ Selma Lagerlöf (1858–1940) (スウェーデン)

1916 年：ヴェーネル・フォン・ヘィデンスタム Verner von Heidenstam (1859–1940) (スウェーデン)

1917 年：
- カール・ゲレラップ Karl Gjellerup (1857–1919) (デンマーク)
- ヘンリック・ポントピダン Henrik Pontoppidan (1857–1943) (デンマーク)

1920 年：クヌート・ハムスン Knut Hamsun (1859–1952) (ノールウェイ)

1928 年：シーグリッド・ウンセット Sigrid Undset (1882–1949) (ノールウェイ)

1931 年：エーリック・アクセル・カールフェルト Erik Axel Karlfeldt (1864–1931) (スウェーデン)

1944 年：ヨハネス・イエンスン Johannes Jensen (1873–1950) (デンマーク)

1951 年：ペール・ラーゲルクヴィスト Pär Lagerkvist (1891–　) (スウェーデン)

(ホ) 平和賞

1908 年：
- クラース・アーノルドソン Klas Pontus Arnoldson (1844–1916) (スウェーデン) 国会議員
- フレーゼリク・バイアー Frederik Bajer (1837–1922) (デンマーク) 国会議員

1921 年：
- クリスチャン・ランゲ Christian Lange (1869–1938) (ノールウェイ) 万国議員同盟事務総長
- カール・ヤルマル・ブランティング Karl Hjalmar Branting (1860–1925) (スウェーデン) 社会民主党総裁，首相，国際連盟代表

1922 年：フリチョフ・ナンセン Fridtjof Nansen (1861–1930) (ノールウェイ) 教授，探険家，第一次大戦後の難民救済事業，＜ナンセン旅券＞

1930 年：ナータン・ソェーデルブルム Nathan Söderblom (1866–1931) (スウェーデン) 大僧正，宗教史家，世界宗教大会運動

以上，わたくしは北欧三国，即ちデンマーク，スウェーデン，ノールウェイについてノベル賞受賞者をあげてきたが，同じく北欧のフィンランドとアイスランドにも受賞者がいることもあげて

おかねばならない。

1945 年：化学賞
アルットゥリ・イルマリ・ヴィルタネン Artturi Ilmari Virtanen (1895–) (フィンランド) «農芸化学, ことに飼料保存の方法に関する研究»

1939 年：文学賞
フランス・エーミル・シルランペー Frans Eemil Sillanpää (1888–) (フィンランド)

1955 年：文学賞
ハルドウル・キルヤン・ラクスネス Halldór Kiljan Laxness (1902–) (アイスランド)

こうした北欧の学問上の文献や文学作品を，原語で読めることは，北欧語学習者の味いうる楽しみである，ことは既に述べたとおりで，このことのためにいまからでも，北欧語をやるだけの価値は十分にあるわけである。考えようによっては，ノベル賞をもらったような大学者の論文ないし研究発表や，大文豪の作品は，必らず英語かドイツ語あるいはフランス語に翻訳されているから，それを読むためわざわざ北欧語をやらなくても済むわけだ。いま文学作品のことはしばらくおくとして，なるほど学問上の論文とか研究は，主要なものは学者自ら国際性を考えて，始めから英語かドイツ語で発表する場合が多いとしても，自国の大学紀要とか学会々報などに発表されるときは，やはり自国語によるものが多いようである。また世界的学者になるまでに，数々の論文を書いているだろうが，それらが必らずしも外国語で書かれていないことが多い。だから，何々教授の代表的著述として例えば英語で出版されても，なかに引用される論文には北欧語で書かれた以前の文献がよく出てくるそうである。

ある若い学者がわたくしに話したことがある。«大家の論文は誰でも読んでいるが，自分たちに有益なのは，これから教授にな

ろうとする未来の大学者，ノベル賞候補者と思われるような新進学者の仕事を，始めからフォローすることにあるので，それにはやはり北欧語が読めないと，不自由を感じる» と。

そうしてみると，少しばかり努力して北欧語が読めるようにしておくことは，大いに学者の強味になるわけである。

北欧文化の高水準

学問はもちろん，ノベル賞が授与される部門に限られたことではない。素人のわたくしでも，それ以外の分野に，多くの世界的学者が北欧にいることを知っている。学者でなくとも，世界的に有名な仕事をしている北欧人のことなど，よく話題にのぼったりする。スウェーデンの場合だと，よく工学とか林学とかが問題になる。世界に有名なスウェーデンはがね，はがねで作る精密機械 S.K.F. のボールベアリング，森林資源から作られるパルプ，紙，またそのパルプと紙を作る機械...といった産業の背後には，すぐれた学問と技術とがある筈である。ところが，そうした事柄についての文献は，英独語などに翻訳されているのは少いようだし，また日本の専門家が本当に知りたいと思うようなことは，大抵はスウェーデン語で書かれている，といった有様らしい。

では，人文科学といわれる分野ではどうか。これまた，自然科学の場合と同様で，世界的大家の名著などは，外国語でも読めるが，その外にある数多い論文や研究発表は，やはり北欧語によるしか読めない。法学でも経済学でもそうである。自然科学など，国際性のない部門，例えば北欧三国それぞれの国の特殊の問題を扱ったものなど，ことにそうである。だから，日本の学者で，デンマークなりスウェーデンなりの法律とか社会制度に関係のある論文，北欧の歴史に関する研究などを読みたいと思うかたがあったら，どうしても原語の厄介にならねばならない。

学問の立場をはなれてみると，一層事態が違ってくる。最近，北欧の政治，法律，経済の事情，社会制度，とくに社会保障とか

いったことが，日本の専門家の注目をひいている。ところで，憲法ぐらいなら英訳もあるが，その他の国内法，ことに社会立法や地方自治制に関する法律などは，外国人のためを思って親切に英独語などの翻訳は作ってくれてはいない。社会保障とか協同組合組織など，対外宣伝用に相当大部な本が英語などで出版されてはいるが，少しこまかい急所を調べようとすると，もう北欧語の文献しかない。

戦後はことに，日本の学者や各方面の専門家の，北欧三国に留学研究されるかたがたがふえてきた。物理学，化学，医学から，社会保障制度，労働問題などまで，広い範囲にわたっている。また，留学というほどでなくても，比較的長期の滞在で，民芸，工芸，音楽，建築，住宅問題などの見学研究に出かけるかたもある。技術関係の方はもっと多いようである。こうしたかたがたは，必らずいろいろな文献を集めて帰られるが，やはり北欧語で書かれたものが大部分であるから，もしそれらを読み理解するだけのちょっとした《語学力》をもっておられたら，《鬼に金棒》以上であると思う次第である。

北欧語は，幾度もいうようだが，国際性のないことばではあるが，とにかく現在，世界に誇る文化と生活水準をもち，本家のアメリカ人でさえ舌をまくほど，民主主義に徹した北欧三国，お互に隣り合っていて旅券もなしに自由に旅行でき，しかもお互によく似たことばで三国人は何の不自由もなくつき合えるような，まるで一つの国みたいな平和な北欧三国——そこで話され書かれていることばだ，という点でまさにユニークなことばである。今日地球上に，こんな珍らしくもうらやましい，平和な，なごやかで生活の豊かな一角が，ほかにあるだろうか。そんなところには，われわれが学びたいこと，知りたいことが，いくらでもあるように思えるし，またあるのも当然であろう。

しかし，このいわば《平和郷》も，昔からそうだったわけでは

ない。また，昔から生活水準が高く，文化が栄えたわけでもない。ここでは，そうしたことを立ちいって話している余裕はないが，現在をよりよく理解できるためにも，少しばかり古いことを書かせてもらいたい。退屈かも知れないが，ちょっと我慢していただきたい。古い話といっても，石器時代や《異教時代》のことを受売りするつもりはないから御安心ねがいたい。

北欧文化の歩み

大体，ヨーロッパのキリスト教文化が北欧へ浸透してきたのは，かなり遅かった。キリスト教は西紀 800 年の初期から北欧に伝えられたが，一応キリスト教化するまでに 300 年近くもかかったらしい。しかしヨーロッパのキリスト教徒の国々とは，そのまえからも交渉があったので，彼らにとっては，新しい礼拝の形式をもつ新しい宗教の存在は，全然未知ではなかった。

それは，既に西洋史でおなじみの《ヴィーキング》Viking の話につながっている。《ヴァイキング》と英語読みされていて，普通《海賊》と訳されている，かれらヴィーキングたちは，今日の北欧人の祖先で，大体西紀 800 年頃から 250 年間，西ヨーロッパのみならず，地中海沿岸や昔のロシヤの奥地まで，その《掠奪貿易》の遠征で勇名をとどろかせたものである。《残忍で野蛮な異教徒》として，キリスト教徒たちからは極度に恐れられていたこれらヴィーキングは，今日北欧神話などで知られているオーディン Odin，トール Thor，バルドゥル Baldur などの神々を信仰し，死者の霊や，自然事物——例えば巨木——や太陽を礼拝していた。そして，多少の方言差はあったにしても，とにかく古代北欧語という一つのことばを話していた。このヴィーキング時代は，北欧語の歴史からいうと，ちょうど古代北欧語から中世北欧語への過渡期にあたっていて，キリスト教化が終る西紀 1100 年頃から，ようやくデンマーク，スウェーデン，ノールウェイの各語が独自の歴史をもつようになったのである。

Viking 時代の海外雄飛

ヴィーキングのうち，デンマークのヴィーキングは主としてイングランドとフランスに，ノールウェイのヴィーキングはスコットランド，アイルランド，アイスランド方面に，またスウェーデンのヴィーキングはバルチック海沿岸地方から，今日のソ連のレニングラードへ，さらに南下してキェフから黒海にでた上，トルコのイスタンブールまで遠征している。ときには 100 艘以上の小船に，数千のヴィーキングが乗組んで，貿易という名の遠征に出かけていった状景は，さぞ壮観であったろう。

こうして，西紀 866 年から 878 年には，イングランドの大部分を支配し——Dane Law についてはイギリス史を参照されたい——885 年–886 年にはフランスのパリを包囲し，911 年にはノルマンディーが建国された——ノルマンディーは 1066 年イギリスのノーマン・コンクェスト Norman Conquest のウィリヤム一世を生んだ——ほか，今日のボルドー Bordeaux，トゥールーズ Toulouse まで足をのばし，また現在のポルトガル沿岸からスペインを廻り，地中海にでて，イタリーのピザ Pisa に達している。

ノールウェイのヴィーキングは，別に，スコットランドやアイルランドにも国をたてたほか，アイスランドに植民し，そこから長途グリーンランド，北アメリカまでも足跡を印している。1492 年コロンブスのアメリカ大陸発見に先きだつこと約 500 年，西紀 1000 年にヴィーキングはアメリカ大陸にたどりつき，この地をヴィーンランド Vinland と名づけた。

西紀 970 年頃からのデンマークやノールウェイのヴィーキング遠征は，当時この国々を支配していた国王が自ら陣頭指揮にあたったということである。

スウェーデンのヴィーキングは，バルチック沿岸づたいに，今のソ連のレニングラード地帯に渡り，河を見付けては奥地へのぼって南下し，ノヴゴロッド Novgorod やキェフ Kiev を建国し，——ヴィーキングの酋長リューリック Rurik とその兄弟が 862 年に建国したといわれるノヴゴロッドや，同じくヴィーキングが建てた国で，後にリューリックの後継者オレーグ Oleg が支配したキェフは，のちのロシヤ帝国建国の基礎となった——さらに黒海まで下り，そこから船で，当時東ローマ帝国の首都ビザンチウム Byzantium，今のイスタンブールに遠征し，その地をミクラガルド Miklagard と呼んだ。

ヴィーキングは《海賊》といわれているが，元来単なる海賊ではなく，ヨーロッパ人とアラブ人との毛皮やどれいの貿易が盛んになったことに起源するものである。即ち，アラブ人はその発展につれ，ヨーロッパ人，ことにフランス人から毛皮とどれいを買うようになった。フランス人は，その毛皮とどれいを，主に北欧と中欧から集めていた。そこで，北欧とフランス国を含む西ヨーロッパとの間の交渉が密接頻繁になり，この貿易路に現われたのがヴィーキングであった。ヴィーキングは，最初は西ヨーロッパで《掠奪貿易》をやっていた。西ヨーロッパのキリスト教徒たちの産物が，どしどしと北の国々へはいってきた。ヴィーキングは新しい文化にふれはじめた。しかし，ロシヤ方面に発展したヴィーキングは，ついに自らアラブ人と毛皮やどれいの取引を始め，巨利をしめた。

けれども，文化史の上からみると，黒海からビザンチウムに渡ったヴィーキングが，そこでビザンチン文明にふれたことの方が，遙かに大きい出来事であった。ことに，けんらん華麗なキリスト教会における儀式には，北の《野蛮人》も大いに感銘をうけたらしい。

要するに，当時の北欧人は，ヴィーキングの活躍のおかげで，ヨーロッパやアラブ世界の文明を知り，それにふれることができたし，当時の世界中の出来事についてあらゆるニュースをもって

いたものと思われる。

このようなヴィーキングの活動も，西紀 1050 年頃から次第に衰えだした。その主な原因は，第一にはアラブ人との貿易がやんでしまったこと，次ぎに，西欧の諸国が強大になったので，これまでのようにヴィーキングが活動できなくなったこと，さらにキリスト教化の進むにつれて，《海賊》的な行動が阻止せられるようになったことである。こうして，約 250 年間にわたるヴィーキング時代は，西欧，ことにイギリスに言語や制度の上に大きい北欧的影響を残したのち，ついに終りを告げたのである。

十二世紀以後，キリスト教文化の北漸により，北欧も次第に西欧諸国と同じ文化潮流に棹さすことになった。そして宗教改革——スウェーデンでは 1527 年，デンマークと当時までデンマーク領であったノールウェイでは 1536 年——を経て，近代文化国家として華々しい発展をとげてきたのであるが，いまそうした歴史とか文化史については，読者にはもう一度，適当な参考書などで，北欧のチャプターを読み返していただくことにして，以下にはただ北欧三国の歩みの，大筋だけをたどることにしたい。

デンマークの北欧統治とカルマル・ユニオン

十四世紀中葉頃には，すでにデンマーク，スウェーデン，ノールウェイが一応国家としてのまとまった形をとっていた。そして，強大なスウェーデンは 1319 年から 1360 年までノールウェイとユニオンを造っていた。ところが，デンマークのマルガレータ女王 Margareta (1353–1412) がスウェーデンを征服し，1397 年，カルマル・ユニオン——カルマル Kalmar は南スウェーデンの都市の名——によって北欧三国を制覇した。

スウェーデンの独立

このユニオンは，1523 年まで続いたが，その年スウェーデンの独立によって解消し，スウェーデンの勃興により北欧の様相が一変した。

スウェーデンの勃興

1563 年から 1570 年のデンマーク及びノールウェイを相手にしたいわゆる北方七年戦争を経て，スウェーデンは 1629 年頃まで，大いにバルチック沿岸地方に発展した——フィンランドは十三世紀からスウェーデンの領土であった。スウェーデンが，欧州史に大きく浮び出てきたのは，三十年戦争——宗教戦争——に介入したことである。スウェーデン国王グスタヴ・二世アードルフ Gustaf II Adolf (1594–1632) は，新教の擁護者としてドイツ各地に転戦，1632 年遂にリュッツェン Lützen で戦死したが，彼の力によって，ドイツその他の国々における新教の地位が安泰となったし，スウェーデン自体は北ドイツに領土を得て，ここに欧州における強大国としてのスウェーデンの登場となった。デンマークは，次第に自国とノールウェイの領土をスウェーデンに奪われ，1660 年頃には，大体現在の国境の示す範囲の小国になってしまった。

軍国スウェーデンの没落

その後しばらくの間，北欧に平和の日が続き，文化の隆盛はみるべきものがあったが，やがて，軍国スウェーデンの没落の日がきた。それは好戦国王カール十二世 Karl XII (1682–1718) が，1700 年にピョートルの新興ロシヤやポーランドやデンマークを相手に戦争を始めことに起因する。戦争は，初期におけるスウェーデン軍の華々しい戦勝により，スウェーデン国民が挙げてこれを支持し，士気大いにふるったのであるが，次第に長期戦となり——史上いわゆる北方大戦争——スウェーデンはやがてこの消耗に対する補給に困難を感じだし，次いで財政的に破綻を来し，カール十二世自らノールウェイ戦線の指揮中に戦死する悲運もあり，遂に 1721 年バルチック沿岸の領土を失って敗退することとなった。

文化国家スウェーデン

この戦争は，スウェーデンにとって一つの転換の契機となった。そして軍国主義から平和主義に転向したのである。また文化国家と

して進む道を見出したのも，この時からであった。グスタヴ三世 Gustav III (1746-1792) は，フランス文化に心酔し，フランスの思想，文芸，芸術を大いに移入し，学問を奨励した。そしてけんらんたるグスタヴィアン時代 (1772-1809) のきっかけをつくった。ところが，再びスウェーデンに試練の時がきた。それはヨーロッパ大陸におこったナポレオン旋風であった。スウェーデンは親英政策をとっておったため，ナポレオンは，新たに盟邦となったロシヤに，スウェーデン攻撃のフリー・ハンドを与えたことから，──ナポレオンは，それによって対英大陸封鎖を強化するつもりであった──スウェーデンは 1809 年，最後の領土であるフィンランドを失ってしまった。これで，スウェーデンは，完全に現在の本土のみの国となってしまった。

ノールウェイの独立

そしてナポレオン戦争の総決算ともいうべきキールの講和 (1814 年) で，デンマークは，ノールウェイをスウェーデンに割譲したが，これに反対してノールウェイはデンマークの皇子，クリスチャン・フレーゼリク Christian Frederik をノールウェイ国王に選び，自らの憲法を制定して独立をはかったため，スウェーデンはノールウェイに兵を進めた。しかし，この戦争は僅か二ヵ月で終った。そしてクリスチャン・フレーゼリクが退位し，ノールウェイはスウェーデンと君主連合をつくることになった。この戦争は，スウェーデンの最後の戦争であって，それ以来 143 年間スウェーデンの軍隊は実戦を知らないできている──第一次，第二次世界大戦にも，スウェーデンは中立であった。

その後 1905 年，ノールウェイはスウェーデンとの君主連合の解消により，独立国となり，デンマーク皇子カール Karl がホーコン七世として国王に迎えられた。

デンマークは，ノールウェイを失ってスカンジナヴィヤ半島から全く後退してしまったが，グリーンランドは依然その領土として残された。しかし，南の地続きのスレースヴィー Slesvig とホルスタイン Holstein──十五世紀中葉以来デンマーク領だった──は，第二回の丁独戦争 (1864 年) で失ってしまった──第一回丁独戦争 (1838-50 年) では，デンマークの勝利となって，この土地を領有することができたのだが──。けれども，第一次世界大戦後，Slesvig の北部は人民投票の結果，1920 年二月デンマークに復帰した。

アイスランドの独立

デンマーク領であったアイスランドは，1874 年の憲法で独自の立法権を得，王国として，1918 年にはデンマークと君主連合になったが，第二次大戦中の 1941 年，その君主連合を廃棄し，1944 年 6 月共和国として独立した。

甚だ退屈な歴史談義になってしまい，しかも余り文化に関係のなさそうな，国の栄枯盛衰の話みたいになってしまったが，決して，北欧三国は枯れもしなければ衰えもしなかったということを──強大な軍国から転落し，政治的には小国になってしまったとはいえ──強調するために，どうしてもこれだけは知っておいて欲しいので，少し横道ではあるが，あえて書いてきた次第である。

ところで気がついたことは，わたくしは，以上の短かい歴史話のなかで，今日の北欧の学問的な伝統がいつ頃から，どのようにして作られたか，という大事な点に，全然ふれなかったことである。仲々むつかしいことであり，わたくし如き浅学のものには到底，満足なことは説明できそうにもない。間違ったことを受売りするよりも，やはり読者にその方面の参考書をみていただくようお願いする方がましである。甚だずるい，また無責任なやりくちかも知れないが──ささやかな本書の目的は，北欧語学習へ読者を引っぱりこむことにあるので，北欧文化小史ではなかった筈でもあり──北欧が生んだ《歴史上の人物》のなかから，文化関係の偉人の名を若干あげることで，《三十六計》としたい。なお，既

にノベル賞受賞者としてあげた名前は省略することにする。

デンマークの偉人と学者

(イ) デンマーク

Tyge Brahe (1546-1601)

天文学の草分け。

Ole Rømer (1644-1710)

天文学，物理学（光線の速さの測定)。

Vitus Bering (1681-1741)

ベーリング海峡発見の探検家。

Ludvig Holberg (1684-1754)

（ノールウェイ生れ）詩人，劇作家。

Bertel Thorvaldsen (1768-1844)

彫刻家。

Hans Christian Ørsted (1777-1851)

物理学（磁気)。

Adam Oehlenschläger (1779-1850)

詩人，作家。

Nikolai F.S. Grundtvig (1783-1872)

宗教家，歴史家，詩人，国民高等学校の生みの親。

Rasmus Rask (1787-1832)

言語学（アイスランド語の研究，比較言語学――ことにヨーロッパ諸語間の親近性の立証――及び cuneiform 研究)。

Hans Christian Andersen (1805-1875)

童話で余りにも有名な詩人。童話以外にも名作がある。

Søren Kierkegaard (1813-1855)

哲学者，文学者，古くからわが国にも紹介されているが，最近は《実存哲学》とともに再び脚光をあびた。

Jacob Christian Jacobsen (1811-1887)

Carl Jacobsen (1842-1914)

J. Ch. はカルスベール (Carlsberg) ビール会社創立者，後カルスベール財団基金を寄附し，科学研究所を設立。古城 Frederiksborg を維持管理する。その子，Carl は父業をつぎ，新たに同名財団基金を寄附してコペンハーゲンに彫刻博物館を創設し管理している。

Georg Brandes (1842-1927)

美学，文学史家，《ゲーテ》，《シェイクスピア》，《ヴォルテール》の評論などでわが国でもよく知られている。

Vilhelm Thomsen (1842-1927)

言語学（フィン・ウゴル語と印欧語の接触について研究しフィン語の研究を提唱。古代トルコ語を研究してオルホン碑文を解読。驚くべき広範囲の言語に精通）わが国ではそのオルホン碑文解読と言語史によって知られている。

Harald Høffding (1843-1931)

哲学者。その宗教哲学及び哲学史の著述とで知られる。

Carl Nielsen (1865-1931)

作曲家。

Georg Jensen (1866-1935)

工芸家（彫金）《デンマークのイェンスンの銀器》で有名。

Valdemar Poulsen (1869-1942)

技師，電話，ラジオに関する発明 (Poulsen generator)。

Otto Jespersen (1860-1943)

言語学者とくに英語学者として世界的。日本でもその著書は多く読まれ，翻訳もある。

スウェーデンの生んだ世界的学者と偉人

(ロ) スウェーデン

Emanuel Swedenborg (1688-1772)

宗教家（神智学と神秘主義)，一宗派

を創設した。

Carl von Linné (1707–1778)

植物学者（植物分類学の創始者として世界的に有名）。

Anders Celsius (1701–1744)

天文学者，物理学者（寒暖計の摂氏）。

Karl Wilhelm Scheele (1742–1786)

化学者（有機化学の草分けのひとり）。幾つかの元素を発見した。

Jöns Jacob Berzelius (1779–1848)

化学者。

Franz Berwald (1796–1868)

作曲家，シンフォニイ・オーケストラ指揮者。

John Ericsson (1803–1889)

技師，発明家（蒸気船の水車に代るプロペラーの発明と，アメリカ南北戦争に際し，その建造した装甲艦《モニター》が南軍海軍を破ったことで有名）。

Jenny Lind (1802–1887)

声楽家（ソプラノ）。《スウェーデンのウグイス》として，全ヨーロッパ及びアメリカで令名が高かった。

Salomon August Andrée (1854–1897)

技師，気球飛行家（1897 年気球でスピッツベルゲンを出発北極に向ったまま行方不明となったが，1933 年スピッツベルゲンの東北の小島で，Andrée の最後のキャンプ跡が発見された）。

Alfred Nobel (1833–1896)

化学者，ダイナマイト発明。約 120 種のイギリス特許と 50 種のスウェーデン特許をもっていて，巨万の富を築いたが，その死に当り，自分の発明したダイナマイトが多くの人命を奪う結果となったことについて良心的な苦痛を感じ，巨額の遺産を寄附し，《人類の福祉に最も貢献したひとびとに賞金を与えるよう》遺言した。ノベル賞金がこうして生れたことは，既に読者もご承知のことと思う。

Fredrika Bremer (1801–1865)

婦人運動先駆者。社会改革，ことに女権主張の闘士。女流作家でもあった。

August Strindberg (1849–1912)

作家，劇作家。日本でも古くから翻訳で多く読まれている。

Anders Zorn (1860–1920)

画家。水彩画，エッチングで世界的。

Karl Bernhard Wiklund (1868–1934)

言語学者（フィン・ウゴル語の権威，とくにラップ語に関する著述で有名）。

Sven Hedin (1865–1952)

地理学者，探検家。チベット，中央アジア探検で有名。その著書は，日本訳されて多く読まれている。

Adolf Noreen (1854–1925)

言語学者。その古代アイスランド語文法，古代スウェーデン語文法，北欧語史，《わが国語》（スウェーデン語の言語学的記述）は名著。

Gustav Cassel (1866–1945)

経済学者（とくに貨幣論，金融論で有名）。その《理論社会経済学》には日本訳がある。

Eli Heckscher (1879–1952)

経済学者（とくに経済史）。そのマーカンティリズム研究

は世界的に知られているが，スウェーデン経済史もすぐれている。

(ハ) ノールウェイ

ノールウェイの誇り

Niels Henrik Abel (1802-1829)

数学者。二十七歳で夭折した天才的代数学者。その名を冠した奨学基金がある。

Henrik Johan Ibsen (1828-1906)

北欧の文学者として最も有名。日本では，早くからその近代劇が紹介された。

Edvard Grieg (1843-1907)

作曲家，そのピアノ・コンチェルトや《ペール・ギュント》組曲などで日本でもおなじみ。

Edvard Munch (1863-1944)

画家。最近は日本でもムンクのことがよく話題に上る。

Adolf Gustav Vigeland (1869-1943)

彫刻家。オスロのフログネル公園の一部に，その作品が無数に配置してあるのが威観である。

Roald Amundsen (1872-1928)

南極北極探検で有名。北極探検のイタリヤ飛行船遭難者救援のため 1928 年 6 月 18 日，トロムショーをフランス飛行機で飛び立ったまま，行方不明。

Vilhelm Bjerknes (1862-1951)

地球物理学者，気象学者。

この章の終りに一言しておきたいのは，大体読者諸君もお判りのように，北欧三国の今日あるのは，十世紀以来の歴史の歩みのなかの僅か数百年の変遷の結果に外ならないようでも，とにかくその伝統は古いものであること，それと同時に，今日の福祉文化国家としての三国は極めて新しいものである，ということである。

過去 150 年ほどの間，ヨーロッパの権力争いから離れ，ひたすら文化と国民生活の向上をめざしてきた三国とはいえ，現在のような生活水準に達し得る条件がそろったのは，1900 年にはいって，近代資本主義的繁栄と民主主義の実践とが平行するようになってからのことに過ぎない。第一次世界大戦に，三国とも中立を維持できたことと，その後の経済発展とが，今日の北欧の裕富な国民生活の土台となったことは事実である。デンマークとノールウェイは，不幸にして第二次大戦にまきこまれ，大きい消耗と物的損害をうけたが，今日では苦しかった再建時代の苦難を忘れたかのように立ち直って，再び結構な生活を営めるようになった。スウェーデンは，再び中立を守り通し，ひたすら蓄積してきただけあって，三国のなかでは一番裕富であり，生活水準が高いのも当然であろう。資源的にみても，スウェーデンは，一番恵まれている。こんなわけで，北欧の《理想境》も，僅々四，五十年の間の努力によってできあがったものに過ぎないことを，われわれは覚えておくべきであろう。

4. 北欧の文学

わたくしは，前の章で，北欧語が北欧の学問上の文献を読むためにだけでも，学習の価値があることを述べたが，文学のことは後廻しにした。それは，例えば医学や生化学の，北欧語で書かれた論文が読めることは，研究上大きなプラスであっても，絶対必要ではなく，少し学界で問題になる程度のものなら，必らず英語なりドイツ語なりに翻訳があるか，始めから英語，ドイツ語で書かれるかで，世界中の学者は何の不自由もない，という事情があるに反し，文学の場合は大分話が違ってくる，ということから，ことさら文学のことを別に取扱いたかったからである。

大体，北欧は，自然科学や，技師などのプラクティカルな面ですぐれたひとびとを輩出しているのに，人文科学の面，思想界などには，それほど人物が現われていない。もちろん，言語学だの経済学だのでは，わたくしでも幾多の世界的にみて第一級の学者がいることを知っているが，例えば哲学では，Kierkegaard ぐらいしかいないのではないか。いずれにしても，ドイツ，フランス，イギリスなどには，遙かにかなわないようである。大思想家として，一般のひとになじみのある名前は，ちょっと見あたらない。

ところが，文学——狭い意味でのそれ——となると，俄然生彩をはなつのが北欧である。ことにデンマークやスウェーデンほどに学者を出していないノールウェイが，文学の分野では一番多く世界的な作家を出している。以前のことではあるが，北欧文学といえばノールウェイ文学と考えられていたほどである。それはイプセン，ビョルンソンの名が余りにも高すぎたためであろう。とにかく，北欧三国の生んだ作家，詩人，劇作家で——ノベル賞金に輝く作家たちだけではない——ヨーロッパやアメリカで知られ

ているひとびとだけでも，われわれ一生かかっても読みきれないほどある。

北欧文学は北欧語で

わが国では，随分古くから北欧文学が紹介されてきた。その多くは英文学，ドイツ文学の専門家の手によるもので，作品の日本訳も多くはドイツ語，英語からの重訳であった。時代が新しくなると，北欧文学専門のかたがたがもでてきたし，作品の翻訳も，そろそろ原語からの直接訳が試みられるようになってきた。

ここで，当りさわりがあるかも知れないが，わたくしは，《わが国の北欧文学研究も，もういい加減に，原語による研究，原語による作品の鑑賞の時代になってもいい時分だ》といいたいのである。初期の先輩たちは，英語やドイツ語によってイプセンをわが国に紹介し，ストリンドベルイを翻訳し，それで十分に目的を達し，尊い寄与をされたわけである。たしかに，頭のさがることではある。しかし，いつまでも，それでいいということではない。すぐれた日本の文学者が，北欧語によって北欧文学を読み，鑑賞し，そしてそれを紹介する，といったことが望ましいと思うのは，わたくしばかりではあるまい。

判りきったことだが，学問上の論文なら翻訳でも十分であるが，文学作品だけは，翻訳では本当の味は，味わえないと思う。話の筋ぐらいなら，翻訳でも結構判るし，楽しく読めるかも知れないが，やはり原語で読む作品の味は別であろう。シェイクスピヤを読むのにドイツ語訳で十分だ，とか，ゲーテは英語で読めばいい，とは誰もいわない。北欧文学だけが，英語，ドイツ語でいいという理由はない。

それに，作品を英訳，ドイツ訳で読んでいる間はまだいいとして，それが日本訳になる場合には，新しく重訳という好ましくないことになる。イギリスの小説を，ドイツ訳から日本語に訳すのと，直接英語から訳すのと，どちらがいいか，などとは問題にも

ならないことである。北欧文学も，やはり原語からの直接訳がいい。第一，原作の英訳，ドイツ訳には，誤訳がないと限らない。次ぎに日本語への翻訳の際にも，神様でない限り，誤訳がないとは断言できない，重訳によって，二重に誤訳が生じうるわけである。また，長編物などでは，日本人のようにキチョーメンでやかましい人間を相手にしない英米独あたりの翻訳者は，適当に省略したりすることもある。日本の重訳者は，それをそのまま移してしまう。北欧文学作品の日本訳のなかには，エスペラント訳を底本にしたものもあるらしいが，例えばスウェーデンのラーゲリョーヴの作品などには，相当いいエスペラント訳があり，それらの訳は，みな真面目ではあるものの――わたくし自身，熱烈なエスペランチストであったこともあり，今でもその ideo には全面的に賛成ではあるにしても――どうも味の点からいうと，余り感心できない。古い伝統をもつ郷土とそこに生活する人間の描写は，どうもエスペラントではピンとこない。この点では，ドイツ訳の方がまだまだましである。

北欧語の魅力

北欧文学が原語で読める，これは北欧語学習の最大の喜悦である。これは，文学そのものを目的として北欧語をやるひとにも，ほかの学問の論文を読むために北欧語をやるひとにも，共通である筈だ。ただ，学術論文だけを読む程度の北欧語だけでは，すぐには文学作品は読めないから，ちょっとエクストラの勉強がいること，もちろんである。

それでは，北欧語でどんな文学作品が書かれているか？ ということになる。これはまた，たいへん広い範囲にわたることであり，それぞれのことばで書かれた作家の作品を，一々解説することは，本書の企図を逸脱することにもなるので，また再び読者に相済まないことではあるが，何か北欧文学の解説書のようなものでも参考にしていただくようお願いし，わたくしは，これまでにノベル

賞受賞作家ないし《歴史上の人物》としてあげた作家たちも含めて過去100年ぐらいから現在までの著名作家と代表作品を巻末に表にして掲げておくことにする。現在の作家といっても，北欧では，毎年秋のシーズンになるとクリスマスを前にして，多くの新人のデビューがあり，その処女作品が，これまた多くの既成作家の新刊書といっしょに読書界を賑わせるが，なかには一作きりで当分鳴をしずめる新進もあり，どの程度の作家までとりあげるか，が仲々むつかしい。とにかく，秋の本屋のカタログをみるだけでもうんざりするぐらい，新人が現われる――またすぐに消える新人もあるが，これが毎年のことだから，相当馬力をかけて読んでも，仲々追いつけない。そういうわけで，わたくしも，《新人あさり》には自信がないので，表にのせた現代作家は大抵，一応文壇，といっては語弊があるが，読書界で相当の読書層をもったひとびとに限っておいたので，念のためお断りしておく。ただ，どんな名の新人が，どんな小説を書いたか，が知りたいのであれば，新聞広告か図書目録でも眼を通せば，それでことたりることではある。

とにかく，北欧文学は，一国に限っても，仲々読みきれない分量があり，いわんや北欧語で書かれた文学作品は一生かかっても読みきれないだけある。北欧語を一生仕事にしても十分償いはある。わたくしの知っている限りでも，北欧のある特定の作家のものを読みたいとの熱情から，北欧語をやったひとがいるが，これからもそういうひとびとが続々と出てくることが望ましい。

5. 北欧語はどんなことばか

北欧語はむつかしくはない

そこで，北欧語は一体どんなことばなのか，自分もやってみたいのだが，むつかしくはないか，いままでに習ってきた英語やドイツ語などと，どんなに違うのか，などと質問がでてくる。そして，わたくしは，次ぎのように答えることにしている。

（イ） どんなことばでも，それ自体を本格的に学習し，研究しようとするのは，容易なことではない。ひとつのことばともなれば，やさしいものはない筈である。しかし，そういう意味ではなく，ある目的のための手段として，ことばを学ぶということであれば，少しの努力で，必要程度に学ぶことは，そうむつかしいことではない。もちろん，その場合でも，比較の問題になるので，あることばは，他のことばよりもやさしい，ということは，漠然とはいえるかも知れない。それも，そのひとによって判断が違うことが多いので，まことに文字通り漠然としたことである。日本ではよく，《英語はやさしいが，ドイツ語はむつかしい》というようだけれども，わたくし自身では，実はそう思ってはいない。《スペイン語は，発音がやさしいので，勉強するのが楽だ》ともいわれているが，これもそう思ってはいない。ひとによって考え方が違うのは，仕方がないが，とにかくこういうふうに，外国語のなかで，難易の順序がぼんやりながら，多くの日本人の頭のなかで出来あがっているものと，わたくしは承知している。それで，そんな順序を尺度にしていってみると**北欧語は，とくにむつかしいことばには属してはいない**，といえる。もう少しはっきりいうならば，ドイツ語ぐらいのむつかしさ，とでもいえるかも知れない。つまり，いままで余り多くのひとがやっていないことばだか

らといって，格別にやっかいなことばではない，といいたいのである。

もっとも，多くの日本人にとってあることばの学習の難易は，日本語で書かれた学習書，参考書，辞書などの優秀なのがたくさんあるかどうかに，大いに関係あることは，否定できないと思う。この点では，英，独，仏，露語は，どの北欧語よりも《学びやすい》ことにもなるが，これは，そういう本に対する需要供給の原則によって支配された結果の現象であって，ことばの難易そのものとは，元々無関係のこと，読者もおわかりのことと思う。

だから，わたくしはあえていうが，北欧語はことばとしては決してほかのいわゆる《第二外国語》以上にむつかしいものではないのである。

英独語からならやさしい

（ロ） 英語やドイツ語をやったひとなら，北欧語にはいるのは大いに楽である。北欧語も，ゲルマン語派の言語である以上，英，独語とは兄弟分であるから《よく似て》いる。だから，とっつきは悪くない。語彙からいうと，ゲルマン語源のものは北欧語にも英，独語にも共通である。例えば，[エ] arm, [ド] (der) Arm “腕” は，北欧語でも [デ] [ス] [ノ] arm, [ア] armur である——[ア] の armur は，-ur という語尾がほかのものと違っているが，これは古代北欧語の形が保存されているからで，[デ] [ス] [ノ] ではこの語尾がかなり以前に変形して脱落したに過ぎない——[エ] hand, [ド] (die) Hand “手” は，[ス] hand, [デ] [ノ] hånd, [ア] hönd である——[デ] [ノ] の -å-, [ア] の -ö- が，[エ] [ド] [ス] の -a- と違っているのは，それぞれのことばの音韻変化の結果であって，古代北欧語では hönd であった。そのほかゲルマン諸語の音韻変化について，ひと通りの概念を得てしまえば——それは特に，いわゆる歴史文法をやらなくても，少し数多くの語彙について比較していくうちに，およその見当もつくもので

ある――大抵の英独の単語と北欧語のそれとが同じ語源のものであることが，わかるのである。

[例] [エ] come, [ド] kommen "来る"=[デ] [ノ] komme, [ス] komma [ア] koma
[エ] go, [ド] gehen "行く"=[デ] [ス] [ノ] gå, [ア] ganga
[エ] year, [ド] (das) Jahr "年"=[デ] [ス] [ノ] år, [ア] ár
[エ] day, [ド] (der) Tag "日"=[デ] [ス] [ノ] dag, [ア] dagur
[エ] week, [ド] (die)] Woche "週"=[デ] uge, [ス] vecka, [ノ] uke, [ア] vika
[エ] nose, [ド] (die) Nase "鼻"=[デ] næse [ス] näsa [ノ] nese, [ア] nös, 複, nosir "鼻孔", nef "鼻"
[エ] head [ド] (das) Haupt "頭"=[デ] hoved, [ス] huvud [ノ] hode (複合語では hoved-) [ア] höfuð

ここで，ことわっておかねばならないことは，英語やドイツ語に似ている単語，語源を同一にするゲルマン語系の語彙にしても，それが書かれたもの，つまり眼でみた場合のことであって，耳で聞いた場合はそれぞれのことばによって発音が大いに違うから，ちょっとその相似がわかりにくい，いや，全然わからないことが多い。いま，読者諸君は，北欧語の発音について全然未知であると仮定して，これを書いている。といってその発音の説明をここでしている余裕はない――いずれ，後章で，各北欧語の発音について一応の話はするつもりである――それで，以下に話をつづけ

ていくのにも，もっぱら書かれた形を眼でみたときの場合だけを考えているので，読み方，発音は，しばらくお預かりしてふれないことにする。

北欧語は，だから，眼でみる限り現在の英語とドイツ語それにオランダ語をつき混ぜたような語彙をもっているわけで，もし既習の英独語の知識を，少し融通をきかせて"鍵"につかえば，北欧語の《パズル》がかなりとける筈である。この場合，フランス語が直接には"鍵"にならないことは致しかたない。全然語系が違うので，ドイツ語とフランス語とが違うように，北欧語とフランス語とも違う。北欧語にも多くのフランス語あたりから借用した語彙があることは，別問題であって，そういう借用した語彙のことになると，北欧語は，ヨーロッパのあらゆる言語からの借用語があり，また国際的に共通な単語――ことに学術上の用語など――もあるわけである。

英独語と似ている

簡単な質問に対して，簡単に答えるつもりでいたのに，ひどくごたごたして恐縮であるが，つまりはそう簡単に答えることはできないということなのである。

そこでさらに，どのぐらい英独語と似ているか，その例を単語でなくて，文章で示さないと，多くの読者は満足されないであろう。それで，次ぎに単文を例にとって比較してみる。何か外国語をやっているが，"ありがとう"，"こんにちは"はどういうか，とよくひとに聞かれるから，まずそんなところから始めるのも面白かろう。この程度のことなら，Archibald Lyall の A guide to the languages of Europe――副題を A practical phrasebook といい Sidgwick & Jackson, Ltd 発行――をひろげると，すぐにわかることである。

北欧語と英独語との比較

[例]

(1) [デ] tusind tak! [ス] tusen tack! [ノ] tusen takk! "どうも有難う"。tusind, tusen は [エ] thousand [ド] tausend で, tak, tack, takk は綴りが多少違っているが, [エ] thank, [ド] Dank である。

(2) [デ] goddag! [ス] god dag! [ノ] god dag [ア] góðan daginn! "こんにちは" いずれも [エ] good day! [ド] guten Tag! であることが, ひと目でわかる。

(3) [デ][ノ] Vi er japanere [ス] Vi är japaner [ア] við (vér) erum japanar "われわれは日本人だ"。vi, við 又は vér は [エ] we, [ド] wir であり, er, är, erum は [エ] の are から見当がつく。あとは [ド] Japaner である。[エ] の Japanese からでも推察できる。

デンマーク語文例

(4) [デ] Biskop Absalon var en stor statsmand, og man kalder ham Københavns grundlægger.

"アブサロン僧正は偉大な政治家であった, そしてひとは彼をコペンハーゲンの創設者と呼んでいる。"

biskop=[エ] bishop. var=[ド] ist の過去形 war. en=[ド] ein, [エ] one に当るがここでは a. stor "大きい" は現在の [エ] [ド] には直接対応する語がない。statsmand=[エ] statesman, [ド] Staatsmann. og="そして" は北欧語であるが, [ド]

auch の古語 auh と同語源。man=[ド] の不定代名詞 man. kalder=動詞不定形 kalde の現在形であるが, kalde は [エ] call. ham="彼" han の対格（目的格）で [エ] him. Københavns の -s =生格（所有格）語尾の -s. grundlægger=[ド] Grund "基礎", legen "置く" であり, -er が人を表わすことから, "基礎を置いた人"。

この文例を, 仮りに[ス]と[ノ]で書くとすれば, 次ぎのようになり, 三つとも似たりよったりになる。

[ス] Biskop Absalon var en stor statsman, och man kallar honom Köpenhamns grundläggare.

[ノ] Biskop Absalon var en stor statsmann, og man kaller ham Københavns grunnlegger.

スウェーデン語文例

(5) [ス] Birger Jarl omgav holmen med murar och torn, och lät uppföra en kyrka och ett slott.

"首長ビルイェルは, 島に城壁と塔をめぐらせ, (一つの) 教会と (一つの) 城を築きあげさせた。"

Birger=人名, jarl=[エ] earl. omgav=動詞 omgiva の単, 三人称過去形で [ド] umgeben, gab . . . um. holmen=-en は接尾定詞で [エ] の the に相当する。holm=[エ] "川の中洲" を意味する holm と同語。med=[ド] mit。murar=-ar は複数語尾で mur は [ド] Mauer. torn=[ド] Turm. och=[デ] [ノ] og=[ド] auch. lät=助動詞 låta の単, 三人称過去形, [ド] lassen, ließ. uppföra=[ド] aufführen. upp=auf, föra=führen. kyrka=

[エ] church, [ド] Kirche. ett＝en の中性形。slott＝[ド] Schloß.

ノールウェイ語
文例

(6) [ノ] Asbjørnsen og Moes eventyr kom første gang ut i 1842, og nå er de like populære i Norge som fortellingene om Alice in Wonderland er det i England. “アスビョルンセンとモーの民話は，1842 年に初めて世に出た（出版された)，そして，いまでは，《ふしぎな国のアリス》の話がイギリスで有名であると同じように，それはノールウェイで有名である。”

eventyr＝[ド] Abenteuer “冒険的な(珍らしい)出来事”“物語”。[エ] adventure と同語だが中世フランス語 aventure からでた語。デンマークの H. C. Andersen の《童話》は原名で Eventyr である。kom...ut＝[エ] came out, [ド] kam... heraus. første＝[エ] first. gang＝[ド] Gang. i＝[エ] [ド] in. nå＝[エ] now. de＝意味の上では [エ] they, [ド] sie であるが，形は [エ] the, [ド] die と同じグループの代名詞。like＝意味も形も [エ] like と同じであるが，ここでは like...som で [エ] as...as [ド] so...wie. populær＝[エ] popular. Norge＝[エ] Norway, [ド] Norwegen. fortellingene＝-ene は複数定形の接尾定詞，fortelling は [ド] Erzählung, [エ] tale. om＝“...について の”の意の前置詞で，[ド] um. det＝[エ] that と同じ意味と形の北欧語。

アイスランド語
文例

(7) [ア] Reykjavík er höfuðborg Íslands og liggur innarlega við Faxaflóa sunnanverðan. Fyrsti landnámsmaður Íslands, Ingólfur Arnarson, reisti bæ sinn í Reykjavík árið 874. “レイキャヴィークはアイスランドの首府でファクス湾の奥深く南側に位している。アイスランド最初の移住開拓者インゴウルフォル・アルナルソンは 874 年にレイキャヴィークに，自分の農園屋敷をたてた。”

höfuðborg の höfuð は既出。-borg＝[ド] Burg. cf. Ham*burg*. Íslands の -s＝生格の -s. liggur＝[ド] liegen. innarlega＝inn の比較級 innar の副詞形。við＝前置詞 “...のそばに”。形は [ド] wider [エ] with と同じ語源。-floa＝flói の対格，[エ] flow. sunnanverðan＝—verðan の対格。sunnan- は [エ] south [ド] südlich. fyrsti＝[エ] first. landnám＝“植民，移住開拓”。maður＝[ド] Mann [エ] man. reisti＝動詞 reisa の過去，[エ] raise. bæ＝bær の対格。“農園屋敷”“町”。sinn＝反照所有代名詞。árið＝-ið は中性単数接尾定詞，ár＝既出。

アイスランド語は，ほかの北欧語とちがって，極めて多く古代北欧語の語形，語法を残しているので，[デ] [ス] [ノ] と似ているところもあるが，全く見当のつかないことが多いので，[エ] や [ド] から直接に，似ているかどうかくらべてみることは無理かもしれない。

以上で大体，北欧語と英独との単文がどの程度似ているか，一

応めどがついたことと思う。そして，漠然ながら，北欧語の文の構造，語の順序も，[ア]は別としても，[デ][ス][ノ]では[エ][ド]と余り違わないこともわかった。

さていよいよ，前にお預りした問題をとりあげる段となった。つまり[デ][ス][ノ][ア]が話され，それを耳で聞いた場合はどうか，それも[エ][ド]などとよく似たことばとして聞えるか，ということになる。この答は，全然ノーである。書かれたことばを見くらべたとき，あれほど似ていたものが，耳で聞いたのでは，残念ながら少しも似ていない。やはり，方言的差異以上に大きい違いがあるので，やむを得ない。

北欧語の発音

ここで北欧語の発音について述べるには，どうしても標音記号を用いて説明しなければならないのであるが，それは多くの読者にとっては退屈であろうし，といってカナで発音を示すことは，なおさら不適当である。イタリヤ語は，割合にカナで発音を表わしやすいが，英語はすでにそれがむつかしくなり，北欧語となると，さらにむつかしくなってくる。だから，いいままでに例としてあげてきた単語や文例でも，正確な読み方をカナで表わすことはできなかった。カナで書くと，それがはっきりしている音でない限り，かえって間違いのもとになる。"どうも有難う"の例を[デ]ツシン・ツァック[ス]チゥセン・タック[ノ]トゥーセン・タックと仮りに書いたとしたら，それで読者にはそれぞれの"どうも有難う"が口でいえるか，まことに疑問である。このカナ書き発音を，いかに工夫してみても，結局同じことである。"こんにちは"の[デ]ゴデー[ス]グダー[ノ]ゴッダーはちょっと無難のようだが，dag の -a- が[デ][ス][ノ]とでそれぞれ違った音であることを思うと，デーとしたり，ダーとしたり，ダー(グ)としても，どうもうまくない。その上に，アクセントの問題がある。[デ]のゴデーは[エ]の goodday とはデーの音もアクセントもよく似

ているのに反し，[ス][ノ]グダー，ゴッダー(グ)は，音もアクセントも全く違うのである。

英語やドイツ語と発音が違うとか，アクセントが違うとかいうと，それだけで，何か北欧語の発音やアクセントが非常にむつかしいように思うひとがある。ところが，例えば英語の発音は，イギリス人以外のヨーロッパ人にとっては最もむつかしいものだそうで，かれらにとっては[デ][ス[[ノ]の方がやさしいといっている。われわれは大抵英語の発音のむつかしさを知らないで，或いは知ってもごまかして，それで過してしまう。だから英語の発音は，フランス語より遙かにやさしいと思いこんでいる。その結果，書いたり読んだりは不自由がなくても，話すと相手の英米人にさっぱり通じない，といった現象が起る。横道にそれてしまったが，英語の発音とくらべてみて，北欧語のそれの方がむつかしいということはない。ただ，英語やドイツ語などにない音があるだけである。従ってそれらの音になじみがない，というだけで，むつかしく思いこむのではあるまいか。それから，もう一つは，アルファベットのなかに[デ][ノ]のように ø や å があったりするからではあるまいか。また見なれない子音の重なった[ス] lj- だの stj- だのが出てくるからではあるまいか。それらは少しもむつかしい発音ではないので，むしろ英語のあの複雑な母音システムの方が遙かにやっかいなのである。英語式に発音するのと，北欧語の発音とが全然異ったものになること，例えば[ス] Kyrka がカーカでなくチルカであることなどは，ただなれないため奇妙に思われるに過ぎない。英語でも church と chorus では，同じ ch が全く異った音であることを思えば，大したことではない。

だから，北欧語の発音やアクセントは，特別にむつかしいものではないと申上げたい。では，極めてやさしいか，というと，そうやさしくもない，といわざるを得ない。北欧語をやり始めると，文法など，[ア]を除いてはドイツ語のような der, des, dem,

den，がないので，とっつきやすく，特にむつかしいと思わないひとでも，発音はちょっとやっかいだ，と感ずるようである。つまり，その程度のむつかしさはある。わたくしもよくいうことだが，北欧語をやる場合に比較的むつかしいと思うのは，発音とアクセントである。しかし，これは読者の北欧語学習意欲を減殺させるほど，恐しくむつかしいものでないことは，強調しておきたい。

わたくしは，ここで特に《語学》に関心をもつ読者に，《世界言語概説》上巻(研究社発行)の[デ][ス][ノ]各語文法大要に，附録として収録されている《北風と太陽》という小話の発音転写を，ちょっとご覧になることをおすすめする。それだけで，北欧語が，どれだけ[エ][ド]と違った発音であるかおわかりになると思う。

要するに，わたくしはこの章では次ぎのことをいいたい。

(イ) 書かれた北欧語は，英語やドイツ語に似ているところが大いにあるから，英独語の素養があると，北欧語を学ぶのにたいへん楽である。

(ロ) 耳で聞いたのでは，その似ている点がちょっとつかめない。

(ハ) といって，北欧語の発音は特にむつかしいものではない。

(ニ) ただ北欧語の文法にくらべると，発音の方が学習するのにやっかいである。

最後に，序であるから一言述べておくと，いままでの文例でもおわかりのとおり，[デ][ス][ノ]は書かれたことばとしては非常によく似ている。話されることばとしては，しかし，[ス]と[ノ]は割合に近いが，[ス]と[デ]，[ノ]と[デ]はかなり違う。いずれ後にもっと説明するが，かなり違っていても，まアまアおたがいに用は通じるのである――反面，日常の極めて簡単なことが，ちょっとしたことで全然通じない場合もあるにはある――[ア]となると，これは書かれた場合でもかなり違うが，話しことばになる

とますます差異が大きくなる。だから，同じ北欧語間の相似といっても，[ア]だけは埒外におかねばならない。

このことは，[デ][[ス][ノ]のうち，どれかひとつを知っておれば，他のふたつは楽に学習できるし，特別に学習しなくても辞書さえあれば読むことはできる，ということになる。また古風で味のある――だが難解な文章の多い――[ア]も，[デ][ス][ノ]からなら比較的に楽に学習できるであろう。

6. 北欧語の概要

ここでわたくしが述べようとするのは，北欧語の概要といっても，それこそ《どんなことばかしら》と思っている読者のかたがたに，《まずまず，こんなことばです》とお答えする程度の概要なのであって，発音や文法などについて，筋みちをたてて説明するのではない。もちろん発音の話も文法の話もでてくるが，それは北欧語の特徴のような点ばかりにふれるだけで，いわば英独語などと異っている点をひろいながら話すだけである。それでも，これを読まれたあとで，《なるほど，北欧語って，そんなことばなのか》と薄ぼんやりなりとも見当がつき，《それならひとつ，やってやろう》と決心して頂ければ，わたくしの目的は達せられたわけである。

I　音とアクセント

デンマーク語の音

(イ)　デンマーク語

正直にいって，[デ]は聞いていて美しいことばではない。これはわたくしだけの感じではなく，外国人もよくそういう。デンマーク人でも自分たちのことばとはいいながら，きれいなことばとは思っていないだろう。

デンマーク語の声門閉鎖 stφd

ことに，[ノ]が美しい高低アクセントをもち，その母音も澄みきった泉の水のようにきれいであることと比較すると，なおさらそう思われる。では，どこが美しくないのか，といわれると，やはり母音発声の場合の口の開きかた，のどのつかいかた，などによるのと，アクセントの一種である声門閉鎖 ([エ] glottal stop [デ] stφd) があること，それにのどの奥へのみこむような g や r の音があることによるらしい。この声門閉鎖というのは，むつかし

そうに聞えるが，ドイツ語の母音の前に必らずある《短かい息のつまり》のことで，例えば mit einem Ausländer “ひとりの外人といっしょに” というとき，ミタイネマウスレンダーでなくて，ミット′アィネム′アゥスレンダーのように，アの前の′の場所に，アを発音する前に《息をつめる》一瞬がある。どんなに早く話すときでも同じである。その′が声門閉鎖なのである。[デ]ではこの声門閉鎖が語のなかでも語尾でも，また母音のあとでも子音のあとにも現われるので，ちょっとやっかいなのである。外国人には，なかなかマスターできない点である。デンマーク方言のなかには，これが全然ない方言もあるぐらいだから，余り気にしなくてもよさそうなものの，標準[デ]ではこの声門閉鎖が同音異語を区別する唯一の発音上の差異になっているから，ますますやっかいである。[デ]で “犬” は hund で，-nd は -nn であるから [hun'] と発音され，即ち -n のあとに声門閉鎖の《息のつまり》がある。この《息のつまり》なしに [hun] と発音すると，“彼女” の hun になってしまう。書いたものをみれば問題はないし，話のつながりから誤解も生じまいが，デンマーク人の耳には変に聞えることである。そのほか mord “殺人” [mɔɹ'], mor “母” [moɹ]——[r] をさかさにした記号 [ɹ] は，のどの奥で発音される[デ]特有の r の音である。——bæst “野獣” [bæ'sd], bedst „最上の” [bæsd] など，このような例はたくさんある。しかし，本を読むのには，大して関係はないだろうし，話すことはどうせデンマークへいってやらないと駄目で，現地へいけばちょっとの努力で習得できることであるから，決して恐れをなすには及ばない。

それ以外に，アクセントについては，とくにやっかいなものはないと思う。複合語でない限り，第一音節に強いアクセントがあることはドイツ語に似ている。

[デ] のアルファベットには，《ダンゴの串刺し》φ と《ボール

を頭にのせたアシカ》å, Å があるのが珍らしがられている——もっとも φ は［ノ］にも，å, Å は［ス］［ノ］にもある——この φ は［ド］の ö に相当するもので［φ］［œ］［ö］などの音があり，å は 1948 年三月までは普通 aa と正字法で書かれていたもので［o］［ɔ］の音がある。だから，恰好が変っているほどには，特別な音ではないわけである。æ, Æ は，［エ］［ド］にも出てくる。

デンマーク語の発音はやっかいだが．．．

発音全体を通じ，母音よりも子音の方が，ちょっと面倒である。《童話の Andersen は Odense で生まれた》のアンデルセンはアナスン，オーデンセはオーゼンセに近く，[ánəsn] [óðənsə] である——[ð] は英語の the の th の音——。よくあるデンマーク人の人名 Madsen はマドセンでなくてマスン [masn], Sφrensen は，セーレンセンでなくてセアンスン [söɹnsn] で，このようにデンマークでは，地名や人名を読むことが，最初はなかなか骨である。子音のなかでも，d, g, r がとくにやっかいのようだ。kold“冷い”[kɔl'], vand“水”[van'], klæder“きもの”[klǽ:'ɹ], fugl“鳥”[fu:'l], bleg“青白い”[blai'], meget“たくさん，たいそう”[maiəð], lærer“教師”[lǽ:ɹ] など，例をあげると，読者をディスカレッヂするばかりであることをおそれる。だが，デンマーク語を学習する場合，この発音の部，ことに p, t, k, b, d, g を含む語の読みかたやそれで書き表わされている音を学んでしまえば，もう文法の半分以上はやってしまったことになるといってもいいぐらいである。もし読者が，何かの機会にデンマーク人に合うようなことがあり，《わたくしはデンマーク語を習っていますが，発音はむつかしいですね》とでもいうと，そのデンマーク人は《そうだろう，あなたはこれが読めますか》といって Rφdgrφd med flφde とペンで書いてみせる公算が大である。これが完全に読めたら卒業，とでもいわんばかりに，諸君の発音をそうじゃない，こうですよ，と直してくれることだろう。これは文字

どおりにいえば《クリームをいれた赤ポリッヂ》で，赤ポリッヂは果物の汁をどろりとさせた甘いデザートで，デンマークの家庭でふだんに食べる食事である。これは [rφ:'ðgrφ:'ð mæ flφ:ðə] であるが，デンマーク語の発音のむつかしい音と声門閉鎖とがいっしょくたになっていて，ちょっと面倒である。

(ロ) スウェーデン語

歌のようなスウェーデン語

ことばそのものは［デ］と本当の兄弟分で瓜二つであるのに，話されている［デ］と［ス］を聞きくらべると，腹違いの兄弟ではないか，と思われるほど，ことばの調子が違っている。［デ］の場合，第一音節に強勢があって，最後の音節が急に弱くなって，のどの奥に消えそうな発音で，p, t, k が [pʰ], [tʰ], [kʰ] と発音されるのが耳にのこり，そこへ声門閉鎖があって，ちょっとのどの奥でもぐもぐしゃべるような，そしてごつごつと途切れるような感じがすることば，といった印象をうける。ところが，［ス］になると，そうしたことは全然ないが，まるで坂道を登ったり下りたりのような，歌うような調子で，悪くいえば，少し間の抜けたひびきをもっている。

音樂的アクセント

文全体のそのときどきの抑揚とは別に，［ス］には，ヨーロッパ諸語にある強弱アクセントのほかに，高低アクセントがあるからである。これは別名音楽的アクセントとも呼ばれ，現在の［デ］にはないが，［ノ］では［ス］以上に多い。どんなアクセントかというと，本来二音節からなる語では，第一音節と第二音節の間が∨のように低くなり，それからまた上昇して第二音節を発音する。これは音の強弱ではなくて，高低なのである。われわれが，何かがっかりさせられて，思わず《あァーあァー》ともらすとき，或いは，子供が顔を泥だらけにして家へ帰ってきたとき，ママが《まァーまァー，なんてきたないの》と驚いて嘆声を発するとき，《あァーあァー》の最初の《あァー》が下降音で，《アー》が終った

ときに，また次ぎの《あァー》が最初の《あァー》の《あ》に近い高さに昇って発音される。《まァーまァー》の場合も，それによく似ている。だから，例えば [ス] の tala “話す” は《あァーあァ》の調子で《ターラ》[tàːla] とやれば，まずまずパスする。

アクセントと意味の相違

このアクセントは，音楽的アクセントの複合調といわれるもので，単調というのは，下降型か上昇型か一つの調子のもので，高低の昇り降りはない。この単調か複合調かによって，[デ]の声門閉鎖の有無による区別と同じような，意味の上の区別が行われることは大事なことで，例えば，anden を [ándən] と単調にすると “鴨” になり，[àndən] と複合調にすると “霊魂” になるといった具合。[ス] の発音でむつかしいのはこの点だけで，それも[デ]の声門閉鎖がほとんど無規則であるに反し，[ス]の高低アクセント単調と複合調には，どんな語が単調で，どんな語が複合調か，はっきりした規則があるから，それだけ楽である。この複合調高低アクセントは，ほかのヨーロッパ人には苦手とみえて，読み書きで[ス]をマスターしているが，ひとたび話しだすと，ボロを出してしまうのが多い。しかし，われわれ日本人には，これは極めて楽に習得できるから，読者は安心されていいと思う。

むつかしい音

音としては，母音では y で書かれる [y] の音，u で書かれる [ɯ] の音が，まあむつかしいぐらいである。子音も正書法で書かれる dj-, lj-, stj- などをみると，やっかいに思われるが，それぞれ [j] [j] [ʂ] と覚えてしまえば，音そのものはむつかしくはない。その昔，《ストリンドベルヒか，ベルクか》の論争があって《ストリンドベリなり》と判定が下った Strindberg は，[-bærj] だから，《ベリ》ならまァまァ無難——わたくしは《ベルィ》と書くことにしているが——こういった -g の読みかた，《ゲスタ・ベーリング物語》の《ゲスタ》も Gösta だから《ヨスタ》の方がまし

だ，といったことなどは，知ってしまえば，なんでもないことだ。国連事務総長 Hammarskjöld 氏の名前の読みかたが，世界中の新聞記者のあいだで問題(?!)になったとかいうことだが，日本でも大体《ハマーシュルド》か《ハマーショルド》に落付いている。これも《ハンマルショルド》[hàmːarʂœld] と読むことなど，第一課でやってしまえば，何でもない。もっとも [ス] の [ʂ] の音は，普通の [ʃ] の音とちょっと一風変っているけれども，決してむつかしいものではない。ただ，正書法がやっかいに感じられるだけであって，音そのものはむつかしくはないとはいえ，全体の《スウェーデン調》は，習得するのに少し時間がかかる。たしかに野暮くさい《スウェーデン調》ではあるが，外国人にはなかなか真似がしにくいものである。だから，《読み書き話す》のうち，《話す》を重要視しないのであれば，大した苦労もいらないわけである。

(ハ) ノールウェイ語

ノールウェイ語といっても . . .

《フランスではフランス語が話される》，《ドイツではドイツ語が話される》というのと同じ意味で，《ノールウェイではノールウェイ語が話される》ということはできるが，いままでの[ス]や[デ]の場合に《一つのスウェーデン語》，《一つのデンマーク語》について述べたと同じように，《一つのノールウェイ語》について話すことができないのが，このノールウェイ語なのである。まことにやっかいなことで，僅か 330 万のこの国のひとたちは，歴史と政治の産物として，二つの《国語》をもっている。ここで《国語》とは，わたくしは，《書く公用語》という意味でつかっているのだが，政府の法令などは，二種のノールウェイ語で公布され，国中を走る国有鉄道の車のなかの，《頭を窓から出すと危険》といった掲示なども，二つのノールウェイ語で書かれている。日本で東北弁あり，鹿児島弁があるように，ノールウェイでも地方の方言があることはもち

ろんだが，そんな話しことばだけの問題ではなくて，書くことばにも違った二つの公用ノールウェイ語があるというのである。

こんなわけで，《はい，これがノールウェイ語で》と簡単にとりだせない。まことに不本意ながら，いきなり頭の痛い話になるが，しばらく我慢して頂きたい。

ひと口にノールウェイ語というものの，普通，一般に，ことに外国からみてノールウェイ語というときは，bokmål（ボークモール）を指している。これがオスロを中心として主要都市とその周辺地域で一般に話され，かつ全国的にノールウェイの共通語として通じるノールウェイ語である。

landsmål から nynorsk へ

これに対して，19 世紀の中頃，Ivar Aasen（イーヴアル オーセン）が自分の郷里の方言を中心に，各地方の方言を整理して提唱した landsmål（ランスモール），即ち今日では《新ノールウェイ語》nynorsk（ニーノルスク）と呼ばれるノールウェイ語がある。この nynorsk は，主として西南部に勢力をもっていたが，1885 年公用語として認められた結果，前にも書いたように，国の法律を二つのことばで印刷しなければならないことになった。もっとも，nynorsk も，bokmål と全然違ったことばというわけでないので，ノールウェイ人ならばオスロ住民でも話しことばとしての nynorsk なら容易に理解できるし，高等学校では nynorsk を書くことも一応教えられる。

riksmål から bokmål へ

この landsmål が nynorsk と呼ばれるようになった 1929 年に，それまで landsmål に対立していた riksmål（リクスモール）も bokmål と公式に改称されたのであるが，bokmål はもともと，オスロを中心とする都市語 bymål（ビューモール）であって，ある意味では標準語であるが，今日のノールウェイでは，nynorsk も bokmål もともに公用語であって，そのいずれが標準語ということはできないようである。

ノールウェイの国語問題の政治問題化

ところが，bokmål と nynorsk は，riksmål，landsmål 時代から今日まで，1907，1917，1938 年と三回にわたり，正書法を主として語法改正が行われてきたため，かなり国民の言語生活に混乱をきたしたことは事実である。現在生きている一般のノールウェイ人のなかでも，その教育をうけた時代によって——これは大体年令層による区別とも一致する——文章を書くときの綴字が違っていることが多い。幾人ものノールウェイ人から手紙をもらったことのあるひとなら，気が付くことである。現にオスロで出ている日刊新聞でも，二つの違った語法が用いられている。このような綴字や語法の違いは，もちろん理解を妨げる程度のものではないが，少くとも外国人で bokmål を学んでいるものにとっては，ちょっと面食うことがある。以上に述べた三回の改正には，実は landsmål が公用語になったとき以来の《国語問題の政治問題化》が背景になっているが，その大きい現われは，bokmål と nynorsk との接近ないし統合である。

samnorsk

ことに 1938 年以来は samnorsk という語ができて，二つのノールウェイ語を行く行くは，samnorsk 即ち《共通ノールウェイ語》というか《統合ノールウェイ語》というか，とにかく一つの国語にしようとする動きが顕著になってきた。

以上は，今日におけるノールウェイ語について述べたのであるが，もうひとつ，やっかいなことがある。

例えば 1800 年代の中頃までに書かれた多くの文学作品はもちろんのこと，かの Ibsen の作品などに用いられたノールウェイ語が，さきに述べた bokmål とも nynorsk とも違ったものであることである。いわば《第三のノールウェイ語》があったということである。

dansk-norsk

前にノールウェイの歴史について述べたとおり，ノールウェイは 1814 年独立するまで 400 年以上もデンマークの領土であったため，政治的，宗教的，また文化的にもデンマークの影響下におかれ，従ってデンマーク語の勢力が強く，当時の教養あるノールウェイ人は dansk-norsk《デンマーク語風のノールウェイ語》を話し，書いたものである。もちろん，デンマーク語とはいえ，ノールウェイ人たちはデンマーク本国のデンマーク語と違った，ノールウェイ風の発音をしていた。つまり，ノールウェイにおけるデンマーク語というわけであった。文章を書くひとびとは，できるだけ正確なデンマーク語を書くことに専念し，それまでノールウェイの国土で話されていたことばを混入することを恥とした。

ナショナリズムとノールウェイ語

ところが，1814 年デンマークから独立したのを契機としてナショナリズム運動が起り，これが言語の分野にも及んできた。そこで従来の dansk-norsk の純ノールウェイ語化となり，それは主として前に述べた bymål において次第に進んできた。他方，Ivar Aasen らの landsmål 運動も，ナショナリズム運動と平行的に強力となり，ついに政治問題となり，1885 年に公用語として認められるようになったのである。そして，bymål を基礎とした純ノールウェイ語が riksmål となったことは，前述のとおりである。

1900 年にはいってからの言語改正は，常にナショナリズムにつながる政治問題であった。ノールウェイの首府は Christiania であったが，それはデンマーク王の名前からとったという理由から，ナショナリズム運動の槍玉にあげられ，1925 年旧名 Oslo にかえったことを想起すべきである。riksmål, bokmål から，できるだけデンマーク語式の綴字法や語を排除して，古くからノールウェイの国土で話されてきたことばを取りいれ，それに合うように綴字法を改正してきた。landsmål, nynorsk の方も，少しずつbokmål に歩み寄る方向にむいてきた。だから，ノールウェイの為政者や言語学者たちは，いつか samnorsk に統一される日の来ることに，期待をかけている。

以上，わたくしは，長々と，しかし必要の範囲に限定してノールウェイにおける国語の今昔について語ってきた。これだけは，どうしても読者諸君に知っておいて頂かないと，このあとの話に差支えるのである。余りごちゃごちゃしたようだから，次ぎにこれをまとめておく。

(1) 1800 年中頃ぐらいまでの主な文献や文学に書かれたノールウェイ語は dansk-norsk であったが，いまは当時の本を読む以外には，これを学ぶ必要はないし，dansk-norsk をやるぐらいなら，デンマーク語をやればいい。

(2) 現在のノールウェイ語には bokmål とnynorsk とがあるが，普通にノールウェイ語というときはbokmål をさしている。文学作品の大部分や，学術論文はbokmål で書かれているし，大部分のノールウェイ人の話すことばも bokmål である——方言は別として。だから，ノールウェイ語を外国人が学ぶ場合——特別の目的がない限り——bokmål をやればいい。

(3) ノールウェイでは《二つのノールウェイ語》といった表現は用いられず，《国語の二つの形》といっている。だから，これまでの記述はあくまでありのままの過去と現在を述べたに過ぎないもので，ノールウェイ語の混乱を語ることによって，読者諸君のノールウェイ語学習意欲を減殺するようなことがあれば，それはわたくしの本意ではない。

これから，わたくしはノールウェイ語について語るが，それは，bokmål のことであって，dansk-norsk や nynorsk については一切ふれない。だから以下では一々ことわらないで，ノールウェイ語といえば bokmål のことであるから，そのつもりで。

美しいノールウェイ語

ノールウェイ語は，わたくし個人の印象としては，北欧語のなかで，聞いていて一番美しく耳にひびくことばである。スウェーデン語と同じような音楽アクセントがあって――スウェーデン語よりも多い――本当に歌うようである。音も母音はきれいだし，子音も柔かみがある。話の抑揚なども加わって，メロディがある。外国人にちょっと真似のできにくい母音に，hus [hu:s] "家" の [u:] があり，子音では kirke [çirkə] 又は [kji'rkə] "教会" の [ç] 又は [kj] が，ちょっとむつかしい。この [ç] [kj] は仮名で書けないが，強いていえばチとシのあいだの音で，ヒではない。ひとによってはシと聞えたり，またチに近く聞えるひともある。そのほか -rd-, -rt- が [d] [t]――これはスウェーデン語にもある――であることも，少しやっかいである。しかし，音として，われわれ日本人の手に負えないようなものはないから，安心していい。

デンマーク語とノールウェイ語の違い

dansk-norsk と bokmål とで綴字法が異っている語，例えば前者の Fløde "クリーム", Kage "ケーク", gabe "大口をあける，あくびする" は，後者では fløte, kake, gape であるが，これはデンマーク語の d, g, b が以前からノールウェイでは [t] [k] [p] に発音されていたからで，こういった風にデンマーク語の子音も，ノールウェイでは別の音になっている。しかし一番違う点は，デンマーク語では強弱アクセントしかない語が，ノールウェイでは高低アクセントである音楽アクセントをもつことである。

(二) アイスランド語

古風なアイスランド語

アイスランド語は，北欧語のなかで一番古風で，古代北欧語の面影を最も多く残していることばである。その地理的条件をみれば，直ぐに了解できることである。古風だというのは，書かれた現代のアイスランド語を 13, 14 世紀頃のアイスランド語と比べて，文法上の変化などが

余り変っていない，ということであって，話しことばが，どの程度昔の話しことばに近いか，遠いかは，もちろんわからない。その頃にレコードとかテープレコーダーでもあればともかく，今日のアイスランド人の喋べることばの音と，かれらの祖先のそれとを比較することはできない。しかし，ある程度，古い音，少くともそれに近い音が残っているものと考えることはできよう。

現代アイスランド語の音には，個々の音として発音のとくにむつかしいものはない。ð や þ は [ð] [þ] で，英語の the の th-, think の th- の音であって別に苦労しなくても習得できる音である。やっかいなのは，正書法による綴字どおりに読まないものが多いことである。例えば，u は [ø] [u] [y] の音があり，æ は [ai], au は [öy] と発音され，guð "神" は [g] のあとに [v] があるように，járn "鉄" の -rn は [dn] のように，allur "すべての" の -ll- は [dl] のように発音されるなど。

アクセントは強弱アクセントだけで，原則として第一音節にアクセントがある。

先年わたくしは，ストックホルムであるアイスランド大学生からアイスランド語を習っていたとき，彼にアイスランド作家の書いたものを朗読してもらって，そばで聞いたことがしばしばあるが，割合になめらかな調子で，力強い感じで迫力はあるが，ゴツゴツ響かない，まことに優雅な感じがした。その大学生の個人的なくせではないと思うが，r の音がいわゆる巻舌の [r] で非常に強く響いたこと，ð や þ の音がふんだんにでてくること，母音では二重母音 diphthong に特色があることなど，とくに印象に残っている。

II 文法――品詞とその変化

全般的にみて，やはり北欧語も[エ][ド]と同じくゲルマン語系のことばだけあって，似たりよったりである。古い変化の形を残している[ア]を除けば，他の北欧語の変化は，今日ではかなり単

純化しているので，[エ][ド]をやったひとにとっては，とくに北欧語的と思われる一，二の点を別にして，それほど意外に感じるものはないと思う。以下主な品詞別に，その概要を述べてみたい。もちろん本書では，文法の話を詳しくするつもりはないので，専ら北欧語が[エ][ド]などと異っている点，北欧語の特異点をひろって話すわけである。

(A) 名詞の数変化

名詞の複数

名詞の変化では，まず複数形について述べる。複数形は [エ] だと -s, -es を単数名詞の語尾につけたり，[ド] だと -e, -er, -en をつけたり――ときには Umlaut を伴うことはご承知のとおり――して造られるのが普通である。北欧語は，この点では，[ド]に似ているといえるが，[ス] [ア] は大分複雑である。例えば，“馬”“週” という単語でみると，次ぎのような変化になる。

“馬”

[デ]	単，主	hest	複，主	heste
[ス]	〃	häst	〃	hästar
[ノ]	〃	hest	〃	hester
[ア]	〃	hestur	〃	hestar

“週”

[デ]	単，主	uge	複，主	uger
[ス]	〃	vecka	〃	veckor
[ノ]	〃	uke	〃	uker
[ア]	〃	uika	〃	uikur

デンマーク語の名詞複数形

原則として[デ]では複数形には汎性 common gender と中性 neuter gender の名詞を通じて，-e, -r, -er, の三つの語尾をとるものと，単＝複で語尾変化 0（ゼロ）のものとがある。

[例]

汎性名詞	(1) *-e*	“日”	単，主	dag	複，主	dage
	(2) *-r*	“週”	〃	uge	〃	uger
	(3) *-er*	“月”	〃	måned	〃	måneder
	(4) *0*	“靴”	〃	sko	〃	sko
中性名詞	(1) *-e*	“家”	単，主	hus	複，主	huse
	(2) *-r*	“心臓”	〃	hjerte	〃	hjerter
	(3) *-er*	“木”	〃	træ	〃	træer
	(4) *0*	“年”	〃	år	〃	år

複数形で母音の変音 Umlaut になるものがあるのは，[エ] [ド]と同じである。

[例] “本” 単，主 bog 複，主 bøger

cf. [ド] Buch, Bücher

“足” 〃 fod 〃 fødder

cf. [エ] foot, feet

[エ]と同じような不規則変化の語もある。

“ガチョウ” 単，主 gås 複，主 gæs

cf. [エ] goose, geese

“人，男” 〃 mand 〃 mænd

cf. [エ] man, men

スウェーデン語の名詞複数形

[ス] ではいま少しく複雑で，複数形語尾は，-or, -ar, -er, -n と 0（ゼロ）となる。

[例]

(1) *-or* “週” 単，主 vecka 複，主 veckor

(2) *-ar* “日” 〃 dag 〃 dagar (汎性名詞)

(3) *-er*	"月"	単, 主	månad	複, 主	månader (中性名詞のみ)
(4) *-n*	"木"	〃	trä	〃	trän
(5) *0* (ゼロ)	"名"	〃	namn	〃	namn

(namn は中性, 汎性名詞でこれに属するものがある)

複数形に Umlaut を伴うものや, 不規則変化のものがあることは, [デ]と同じである。

[例]	"本"	単, 主	bok	複, 主	böcker
	"足"	〃	fot	〃	fötter
	"ガチョウ"	〃	gås	〃	gäss
	"人, 男"	〃	man	〃	män

ノールウェイ語の名詞複数形

[ノ]では大体[デ]と同じであるが, 男性と女性を合わせて汎性とした汎性名詞は, 原則として複数語尾 -er, -r, 中性名詞は -r をとるが, *0* (ゼロ) のものもある。

[例]

(1) *-er*	"馬"	単, 主	hest	複, 主	hester
(2) *-r*	"街, 街路"	〃	gate	〃	gater (汎性名詞)
(3) *-r*	"心臓"	〃	hjerte	〃	hjerter
(4) *0* (ゼロ)	"年"	〃	år	〃	år

Umlaut を伴う複数形, 不規則複数形は[デ][ス]と同様である。

[例]	"本"	単, 主	bok	複, 主	bøker
	"足"	〃	fot	〃	føtter
	"ガチョウ"	〃	gås	〃	gjess
	"人, 男"	〃	mann	〃	menn

アイスランド語の名詞複数形

[ア] は他の北欧語と異り, かなりやっかいであるが, 主な複数形語尾をあげてみると, 次ぎのとおりである。

[例] **男性名詞強変化**

(1) *-ar*	"馬"	単, 主	hestur	複, 主	hestar
	"医者"	〃	læknir	〃	læknar
(2) *-ir*	"鍛冶や"	〃	smiður	〃	smiðir
	"谷"	〃	dalur	〃	dalir
(3) 不規則	"足"	〃	fótur	〃	fætur

女性名詞強変化

(1) *-ar*	"針"	〃	nál	〃 nálar
	"ステーション"	〃	stöð	〃 stöðvar
(2) *-ir*	"時"	〃	tíð	〃 tíðir
	"港"	〃	höfn	〃 hafnir
(3) *-ur*	"本"	〃	bók	〃 bækur

中性名詞強変化

(1) *0* (ゼロ)	"机"	〃	borð	〃 borð
	"土地, 国"	〃	land	〃 lönd

男性名詞弱変化

(1) *-ar*	"時間"	〃	tími	〃 tímar
	"パンや"	〃	bakari	〃 bakarar
(2) *-ur*	"農民"	〃	bóndi	〃 bændur

女性名詞弱変化

(1) *-ur*	"物語"	〃	saga	〃 sögur
(2) *-ar, -ir*	"うそ"	〃	lygi	〃 lygar
	"伝記"	〃	æfi	〃 æfir

中性名詞格変化

(1) -*u* “眼” 単，主 auga 複，主 augu

(B) 名詞の格変化

デンマーク語，スウェーデン語，ノールウェイ語には生格以外の格変化はない

[デ][ス][ノ]を学ぶものにとって何よりの慰めは，格変化について，[ド]の der, des, dem, den のように頭を悩ますものがないことである。[エ]と同じで，生格(二格というひともある)で -s 語尾をとるだけで，あとは主格，与格(三格)，対格(四格)はみな同じ形である。

アイスランド語の格変化は古風でやっかい

ところが，[ア]となると，これはまたラテン語なみのやっかいさである。前に複数形のときにあげた分類によって格語尾が異っているからである。参考として二，三の例をあげておく。

		“馬”	“針”	“本”	“土地”	“物語”
単	主	hestur	nál	bók	land	saga
	生	hests	nálar	bókar	lands	sögu
	与	hesti	nál	bók	landi	sögu
	対	hest	nál	bók	land	sögu
複	主	hestar	nálar	bækur	lónd	sögur
	生	hesta	nála	bóka	landam	sagna
	与	hestum	nálum	bókum	löndum	sögum
	対	hesta	nálar	bækur	lönd	sögur

わたくしは，さきの大学生の先生に，じょう談半分に《こんなむつかしい変化を，よくもしゃべれるね》といったら，《生れたときから，やってますからね》といって笑っていた。

考えようでは，この[ア]のように古い時代の変化の形を保存し

ていることばのあることは，まことに有難いことでもある。

(C) 冠詞

不定冠詞

不定冠詞は，[エ]の a, an, [ド]の ein, eine と同じものが北欧語にもある。それは，次ぎのとおりで，[ド]のような格変化はないから割合に簡単である。

[デ] 汎性 en 中性 et

[例] en dag＝[エ] a day. et hus＝[エ] a house

[ス] 汎性 en 中性 ett

[例] en dag, ett hus

[ノ] 男性 en 女性 ei (en) 中性 et

しかし，この女性 ei は，1938 年の言語改正以降書くことばでは正式に採用されたが，未だにこれを用いず en を用いるひとが多い。話しことばでは大体 en である。

[例] en dag, ei (en) gate, et hus

アイスランド語には不定冠詞はない

[ア]には冠詞としては，定冠詞又は接尾定詞 definite article しかなく，不定冠詞はないが，《一つの》の意味で数詞の“1” einn を用いることができる。それには[ド]のように性と格による変化があって，[デ][ス][ノ]のように簡単ではない。

	男性	女性	中性
主	einn	ein	eitt
生	eins	einnar	eins
与	einum	einni	einu
対	einn	eina	eitt

定冠詞，つまり[エ]の definite article では，北欧語は[エ][ド]と全く異った接尾定詞がある。[エ]の the house, [ド]の das Haus の the, das は，冠詞といってもいいが，北欧語では

[デ][ス][ノ] hus*et* のように，hus のあとに -et が接尾されるので，この -et は article ではあるが冠詞というのは，ちょっと文字にこだわるようだが妙に聞える。それで，わたしは，以前からこれを接尾定詞と呼ぶことにしている。

定冠詞と接尾定詞

さて，[エ] the，[ド] der, das, die の定冠詞に当る北欧語の接尾定詞は，[ア]以外では極めて簡単である。もちろん，生格で -s をとる以外には，格変化は，全然ない。ただ単数と複数，性別があるだけである。

[デ]　単，汎性 -en, -n　　中性 -et, -t
　　　複，各性とも -ne, -ene
　[例]　単 hesten，複 hestene；単 ugen
　　　　複 ugene；単 året，複 årene
[ス]　単，汎性 -en, -n　複，汎性 -na
　　　単，中性 -et, -t　複，中性 -a, -en
　[例]　単，汎 dagen，複 dagarna；単，中 huset，
　　　　複 husen；単，中"蜜蜂" biet，複 bina；
　　　　単，中 namnet，複 namen
[ノ]　単，男性 en, -n
　　　〃 女性 -a　　　複 -ene, -ne
　　　〃 中性 -et, -t

この単，女性接尾定詞 -a は 1938 年の言語改正で，書きことばに採用されたが，いまだ男性と同じ -en, -n が用いられているし，話しことばでも，オスロでは -a はめったに聞かれない。

[例]　単，男 hesten，　複 hestene
　　　〃 女 gata，　〃 gatene
　　　　　　(gata より gaten の方がまだ普通)
　　　〃 中 huset　〃 husene

この接尾定詞のほかに，名詞を修飾する形容詞がその名詞と共にある場合の definite article [エ] の the に相当する定冠詞がある。

[デ]　単，汎 den，中 det，複 de
　[例]　単，汎"黒い馬" den sorte hest
　　　　複　　　　　　de sorte heste
　　　　単，中"大きい家" det store hus,
　　　　複　　　　　　de store huse
[ス]　単，汎 den，中 det，複 de
　[例]　単，汎"黒い馬" den svarta hästen
　　　　複　　　　　　de svarta hästarna
　　　　単，中"大きい家" det stora huset
　　　　複　　　　　　de stora husen

即ち，[ス]では，この定冠詞は名詞の接尾定詞をつけた形に先行する，つまり den. . .-en, det. . .-et, de. . .-na, de. . .-en となるが，[デ]では定冠詞が先行するときは，その名詞には接尾定詞がつかない。

[ノ]　単，汎 den，中 det 複 de
　[例]　単，汎 den svarte (sorte) hest 又は hesten
　　　　複　de svarte (sorte) hester 又は hestene
　　　　単，中 det store hus 又は huset
　　　　複　de store hus 又は husene

[ノ] では，[ス] のように定冠詞と接尾定詞と二重に用いられることも，[デ]のように先行定冠詞のあとに接尾定詞を省略することもある。

アイスランド語の定形変化

[ア]の定冠詞，接尾定詞は，[デ][ス][ノ]に比べると，遙かに複雑である。定冠詞は，例えば"善い男" hinn góði maður の hinn

のように形容詞の前につくが，goði maðurinn の -inn のように h- を落して接尾定詞としても用いられる。接尾定詞の変化は，次ぎのとおりである。話しことばでは hinn の代りに指示代名詞 sá, sú, það が用いられている。

		男性	女性	中性
単	主	hesturinn	nálin	landið
	生	hestsins	nálarinnar	landsins
	与	hestinum	nálinni	landinu
	対	hestinn	nálina	landið
複	主	hestarnir	nálarnar	löndin
	生	hestanna	nálanna	landanna
	与	hestunum	nálunum	löndunum
	対	hestana	nálarnar	löndin

これに形容詞をつけた形をみると，例えば

“お金持の男”　(男性) hinn ríki maður (=ríki maðurinn)

“美しい女性”　(女性) hin fagra kona (=fagra konan)

“陽気なこども”　(中性) hið glaða barn (=glaða barnið)

を単複の四つの格に変化させるとなると(形容詞の変化参照)，ことは容易ではない。わたくしは，読者を驚かせるつもりで，そういっているのではなく，[デ][ス][ノ]に比べて，余りにもやっかいだからである。しかし，読者のなかには，これを聞いて，かえって勇猛心をふるいたたせ，《その難物，見事に退治してくれん》と，敢然として［ア］征服を決意するひともあるだろう，とも思っている。

デンマーク，スウェーデン，ノールウェイ各語の形容詞は格変化しない

(D) 形容詞の変化

［ア］を除く北欧語では，形容詞は性と数の変化があるだけで，［ド］のような格変化はないから，極めて簡単である。そして中性単数において，大抵の形容詞が -t, -tt の語尾をとることが共通点である。

	単，汎性	中性	複
[デ]	stor	stort	store
	“大きい”		
〃 〃	lang	〃 langt	〃 lange
	“長い”		
〃 〃	ny	〃 nyt	〃 nye
	“新しい”		

普通これを強変化といい，(イ)単数と複数の不定形名詞の修飾語としてたつとき，(ロ)述語補語としてたつときに用いられる。

[例] (イ) 単，　en stor hest, et stort hus ;
　　　　複，　store heste, store huse
　　　　単，　en ny bog, et nyt hus ;
　　　　複，　nye bøger, nye huse
　　(ロ) 単，　hesten er (=[エ] is) stor.
　　　　　　“馬は大きい”
　　　　　　huset er nyt
　　　　　　“家は新しい”
　　　　複，　hes tene er (=[エ] are) store.
　　　　　　husen er nye.

これに対して，弱変化は，定冠詞のあとの形容詞がとる形で store, lange, nye のように -e がつくだけで，つまり強変化複数形と同じである。

[例] 単, den store hest, det ny(e) hus;
複, de store heste de nye huse.

[ス] **強変化**: 単, 汎 stor, 中 stort 複 stora
〃 lång 〃 långt 〃 långa
〃 ny 〃 nytt 〃 nya

弱変化: stora, långa, nya

[例] en stor häst, ett stort hus;
stora hästar, stora hus
en ny bok, ett nytt hus;
nya böcker, nya hus
hästen är (=[エ] is) stor, huset är stort.
hästarna är (=äro=[エ] are) stora,
husen är stora.
den stora hästen, det nya huset.
de stora hästarna, de nya husen.

[ノ] **強変化**: 単, 汎 stor 中 stort 複 store
〃 lang 〃 langt 〃 lange
〃 ny 〃 nytt 〃 nye

強変化: store, lange, nye

これらの用法は，全く[ス]と同じである。

[例] en stor hest, et stort hus;
store hester, store hus;
hesten er stor, huset er stort;
hestene er store, husene er store.
den store hest(en,) det store hus(et);
de store hester (hestene), de store hus(ene).

アイスランド語の形容詞の格変化

[ア]の形容詞も強，弱変化とも格変化があるが，弱変化は簡単である。両変化とも性によって異る点は，ちょっと面倒である。

強変化:

		男性	女性	中性
単	主	stór "大きい"	stór	stórt
	生	stórs	stórrar	stórs
	与	stórum	stórri	stóru
	対	stóran	stóra	stórt
複	主	stórir	stórar	stór
	生	stórra	stórra	stórra
	与	stórum	stórum	stórum
	対	stóra	stórar	stór

"大きい馬" の不定形 stór hestur の格変化は，前述の名詞の数変化で掲げておいた hestur の変化形と，この stór の変化形とを組合わせることになる。

弱変化:

		男性	女性	中性
単	主	stóri	stóra	stóra
	生与対	stóra	stóru	
複	主生与対	stóru		

ここで，参考までに前に冠詞のところでちょっとあげておいた hinn ríki maður の格変化を掲げておこう。

単 主 hinn ríki maður (=ríki maðurinn)
生 hins ríka manns (=ríka mannsins)
与 hinum ríka manni (=ríka manninum)
対 hinn ríka mann (=ríka manninn)

複 主	hinir	ríku menn	(=ríku mennirnir)
生	hinna	ríku manna	(=ríku mannanna)
与	hinum	ríku mönnum	(=ríku mönnunum)
対	hina	ríku menn	(=ríku mennina)

形容詞の比較級と最上級

形容詞の比較変化は，全く[エ][ド]と同じくゲルマン語の比較変化であって，むつかしいことはない。以下に例をあげておく。

	原 級	比較級	最上級
[デ]	rig "金持ちの"	rigere	rigest
	stor "大きい"	større	størst
	lang "長い"	længere	længst
[ス]	rik	rikare	rikast
	stor	större	störst
	lång	längre	längst
[ノ]	rik	rikere	rikest
	stor	større	størst
	lang	lengre	lengst
[ア]	ríkur	ríkari	ríkastur
	stór	stærri	stærstur
	langur	lengri	lengstur

比較級，最上級が，[エ][ド]におけると同様，不規則というか，全然別の語で代用されるもののあること，もちろんである。

	原 級	比較級	最上級
[デ]	god	bedre	bedst
	(=[エ] good)	(=[エ] better)	(=[エ] best)
	gammel	ældre	ældst
	(=[エ] old)		
	dårlig	værre	værst
	(=[エ] bad)		
[ス]	god	bättre	bäst
	gammal	äldre	äldst
	dålig	sämre	sämst
[ノ]	god	bedre	best
	gammel	eldre	eldst
	ond, vond	verre	verst
[ア]	góður	betri	bestur
	gamall	eldri	elstur
	vondur, illur	verri	verstur

"A is better than B" の than は，[デ] end, [ス] än, [ノ] enn, [ア] en である。

[デ] København er større end Oslo.

"コペンハーゲンはオスロより大きい"

[ス] Köpenhamn är större än Oslo.

[ノ] København er større enn Oslo.

[ア] Kaupmannahöfn er stærri en Oslo.

(E) 数 詞

数詞 20 までは問題ない

数詞基数は[エ][ド]とあまり異ってはいないが，ただ[デ]では古い 20 進法が残っているので，慣れるまでは非常に勝手がわるい。外国へ旅行して一番さきに必要を感じるのは，値段や時間などを表わす数であるのに，デンマークへいくと，50 以上の数はまことにやっかいで，即席の詰込みではどうにもならないようだ。1 から 10 までは次ぎのとおりである。

	[デ]	[ス]	[ノ]	[ア]
1	een,	en,	en,	einn

	(eet 中性)	(ett 中性)	(ett 中性)	
2	to	två	to	tveir
3	tre	tre	tre	þrir
4	fjre	frra	fire	fjórir
5	fem	fem	fem	fimm
6	seks	sex	seks	sex
7	syv	sju	sju, syv	sjö
8	otte	åtta	åtte	átta
9	ni	nio	ni	níu
10	ti	tio	ti	tíu

[デ] では不定冠詞 en, et と数詞の 1 とは綴字法でも発音に近く書くが，[ノ] では en に強いアクセントをつけると 1 になる。このうち [ア] では 1 から 4 までは格変化があって面倒である。[ノ]の 7 は syv が古くから用いられ，sju は新しく採用されたので，まだ十分浸透していない。11 から 20 までもあまり問題はない。

11	elleve	elva	elleve	ellefu
12	tolv	tolv	tolv	tólf
13	tretten	tretton	tretten	þrettán
14	fiorten	fiortòn	fiorten	fjórtán
15	femten	femton	femten	fimmtán
16	seksten	sexton	seksten	sextán
17	sytten	sjutton	sytten	sautján (seytján)
18	atten	aderton	atten	átján
19	nitten	nitton	nitten	nítján
20	tyve (toti)	tjugo	tjue, tyve	tuttugu

[ノ] の 20 は tyve の方が古くから用いられており，新しく採用された tjue はまだあまり用いられていないようだ。30，と 40 は問題はない。

30	tredive	trettio	tredve, tretti	þrjátíu
40	fyrre	fyrtio	førr, førti	fjörutíu

21, 22...の唱え方は，デンマーク，ノールウエイとスウェーデンとて違う。

ところが，21，22...31，32...41，42...になると，若干数のとなえかたが北欧語の間でも違ってくる。つまり [デ] [ノ] では，21, 32, 43 などは "1 と 20"，"2 と 30"，"3 と 40"，といったふうに，[ド]と同じようにとなえる。[ス] [ア]では[エ]や日本語と同じである。

21	en og tyve	tjugoen, -ett	en og tjue	tuttugu og einn
32	to og tredive	trettiotvå	to og tredve	þrjátíu og tveir
43	tre og fyrre	fyrtiotre	tre og førr	fjörutíu og þrír

このうち，[ノ]では 1950 年以降，en og tjue の "1 と 20" 式から，[ス] 式の tjue en を学校で教えることになった。また 30, 40 も tretti, førti の方を採用することになり，32 は trettito, 43 は førtitre となるが，現在はまだ to og tredve 等から抜けきれないでいる。

50 以上も，[デ] を除けば問題はないので，[ス] [ノ] [ア] をまず掲げておく。51, 62, 73, 84...は，21, 32, 43...の場合と同じとなえかたをする。

	[ス]	[ノ]	[ア]
50	femtio	femti	fimmtíu

60	sextio	seksti	sextíu
70	sjuttio	sytti	sjötíu
80	åttio	åtti	áttatíu
90	nittio	nitti	níutíu
100	hundra	hundre	hundrað

デンマークでは 50 以上は二十進法の名残り

デンマークでは，珍らしくも 20 進法が残っているので，やっかいではあるが，なかなか面白い。

50 は $2\frac{1}{2}\times 20$ である

50 は halvtreds（ハルトレス） という。ゲルマン系諸語に共通の 5 を意味する語根は見当らない。なぜか。つまり halvtreds は，halvtredsindstyve の省略形で "$2\frac{1}{2}\times 20$" の意味だからである。この伝で 60 は，3×20，70 は $3\frac{1}{2}\times 20$，80 は 4×20，90 は $4\frac{1}{2}\times 20$ といい，50 のときのように省略形を普通に用いている。

50	halvtreds（ハルトレス）	
60	tres（トレス）	(tresindstyve の略)
70	halvfjerds（ハルフィェッス）	(halvfjerdsindstyve の略)
80	firs（フィールス）	(firsindstyve の略)
90	halvfems（ハルフェムス）	(halvfemsindstyve の略)
100	hundrede	

51，62，73...99 までは，en og halvtreds，to og tres，tre og halvfjerds...ni og halvfems となる。

もっとも［デ］でも，小切手や商業上の書類などに数を数字でなく，ことばで書くときには，30 treti，40 firti，fireti，50 femti，60 seksti，70 syvti，80 otteti，otti，90 niti が用いられる。

序数は次ぎのようになっている。

	［デ］	［ス］	［ノ］	［ア］
1	første	förste, -a	første	fyrsti
2	anden	andre, -a	annen, andre	annar
3	tredje	tredje	tredje	þriðji
4	fjerde	fjärde	fjerde	fjórði
5	femte	femte	femte	fimmti
6	sjette	sjätte	sjette	sjötti (sétti)
7	syvende	sjunde	syvende sjuende	sjöundi
8	ottende	åttonde	åttende	áttundi
9	niende	nionde	niende	níundi
10	tiende	tionde	tiende	tíundi
11	elvte	elfte	ellevte	ellefti
12	tolvte	tolfte	tolvte	tólfti
13	trettende	trettonde	trettende	þrettándi
20	tyvende	tjugonde	tjuende, tyvende	tuttugasti
30	tredvte	trettionde	tredevte, trettiende	þrítugasti
40	fyrrty-vende	fyrtionde	førtiende	fertugasti
50	halvtred-sindstyvende	femtionde	femtiende	fimmtugasti
60	tresinds-tyvende	sextionde	sekstiende	sextugasti

70 halvfjerd-sindstyvende	sjuttionde	syttiende	sjötugasti
80 firsinds-tyvende	åttionde	åttiende	áttugasti
90 halvfem-sindstyvende	nittionde	nittiende	nítugasti
100 hundrede	hundrade	hundrede	hundraðasti

(F) 代名詞

人称代名詞 人称代名詞は若干の形を除いて，北欧語に共通である。

一人称		[デ]	[ス]	[ノ]	[ア]
単	主	jeg "私"	jag	jeg	ég, jeg
	生	—	—	—	mín
	与/対	mig	mig	meg	与 mér, mjer / 対 mig
複	主	vi "われわれ"	vi	vi	við, ver
	生	(vores)	—	—	okkar, vor
	与/対	os	oss	oss	与/対 okkur, oss

二人称					
単	主	du "君", De "あなた"	du, ni	du, De	þú
	生	— Deres	— —	—, Deres	þín
	与/対	dig, Dem	dig, er	deg, Dem	与 þér / 対 þig
複	主	I, De "貴下達，君達"	I, ni	dere, De	þið, þér
	生	jeres, Deres	— —	deres, Deres	ykkar, yðar
	与/対	jer, Dem	er, er	dere, Dem	ykkur, yður

三人称					
単	主	(1) han "彼"	han	han	(1) hann
		(2) hun "彼女"	hon	hun	(2) hún
		(3) den "それ"	den	den	
		(4) det "それ"	det	det	(3) það
	生	(1) hans	hans	hans	(1) hans
		(2) hendes	hennes	hennes	(2) hennar
		(3) dens	dess	dens	
		(4) dets	dess	dets	(3) þess
	与/対	(1) ham	honom	ham	与 (1) honum (2) henni (3) því
		(2) hende	henne	henne	
		(3) den	den	den	対 (1) hann (2) hana
		(4) det	det	det	(3) það
複	主	de	de	de	主 (1) þeir (2) þær (3) þau
	生	deres	deres	deres	生 (1) (2) (3) þeirra
	与/対	dem	dem	dem	与 〃 þeim / 対 (1) þá (2) þær (3) þau

所有代名詞 所有代名詞は，[デ][ス][ノ]では共通であり，[ア]は語源的には共通ではあるが，格変化をする点が違う。また所有代名詞に欠けているものは，人称代名詞生格で補われる。

[デ]

単，汎 min　　中 mit　　複，汎中 mine

"わたくしの"

単 複 vor　中 vort　複 汎中 vore

"われわれの"

(話しことばでは 単, 汎中, 複とも Vores が普通)

〃 〃 din　〃 dit　〃 〃 dine

"お前の, 君の"

〃 〃 Deres　〃 Deres　〃 〃 Deres

"あなたの"

〃 〃 jeres　〃 jeres　〃 〃 jeres

"お前たちの"

(書きことばでは jer, jert, jere の形もある)

(三人称は人称代名詞生格)

[ス]

min — mitt — mina

vår — vårt — våra

din — ditt — dina

er — ert — era

[ノ] min — mitt — mine

(単, 女 mi もある)

vår — vårt — våre

din — ditt — dine

(単, 女 di もある)

Deres — Deres — Deres

deres — deres — deres

[ア] 単, 男 minn　女 mín　中 mitt

〃 〃 vor　〃 vor　〃 vort

〃 〃 þinn　〃 þín　〃 þitt

複, 男 mínir　〃 mínar　〃 mín

〃 〃 vorir　〃 vorar　〃 vor

複 男 þínir　女 þínir　中 þín

この三つは形容詞強変化と同じ格変化をする。所有代名詞に代るその他の人称代名詞生格は格変化しないで用いられる。なお若干の疑問代名詞をあげておく。

疑問代名詞

	[デ]	[ス]	[ノ]
hvem (=who, whom)		vem	hvem
hvis (=whose)		vems	(hvis)
hvad (=what)		vad	hva
hvilken 単, 汎	(=which)	vilken	hvilken
hvilket 単, 中		vilket	hvilket
hvilke 複		vilka	hvilke
hvad for (en, et)	(=[エ]what kind of)	vad för (en, ett)	hva for (en, ett)

([ノ] の hvis は話しことばでは避けられ, 例えば [ス] Vems hus är detta? "これはだれの家か"=[ノ] hvem eier dette huset? "この家を所有しているのはだれか" といいかえられる)

[ア] では少し面倒で, 男, 女, hver (=who), 中, hvert (=what), hvað (=what) hvaða (=what kind of) 男, 女, hvor 中, hvort (which of two), 男, hvílíkur, 女, hvílik, 中, hvílíkt (=what kind of,what) などがあるが, hvaða 以外はみな格変化する。

指示代名詞

指示代名詞の主なものは次ぎのとおりである。

	[デ]	[ス]	[ノ]	[ア]
単, 汎	denne (=this)	denna	denne	男 þessi

		(denne)		女 þessi
		den här		
単, 中	dette (=this)	detta,	dette	中 þetta
		det här		
複	disse (=these)	dessa,	disse	男 þessir
		de här		女 þessar
				中 þessi
単, 汎	den (=that)	den,	den	男 sá
		den där		女 sú
中	det (=that)	det,	det	中 það
		det där		
複	de (=those)	de,	de	男 þeir
		de där		女 þær
	(与. 対.=dem)	(与. 対. dem)	(与. 対. dem)	中 þau

([ア] の指示代名詞は全部格変化する)

(G) 動詞の変化

強動詞と弱動詞

動詞を，過去形が[エ][ド]で普通に規則変化動詞と呼ぶ動詞のように，過去語尾をとるものと，(例 [エ] ask, asked)，普通不規則変化動詞と呼ばれる動詞のように，母音変化 (例 [エ] blow, blew, blown) するだけで過去語尾をとらないものとに分け，前者を弱動詞，後者を強動詞とすることは，北欧語文法に共通である。

[エ] の ask, asked における -ed の過去語尾にあたるものは，北欧語は共通で [エ] の -ed と同じようなものである。

	[デ] (1)	[デ] (2)	[ス] (1)	[ス] (2)	[ス] (3)	[ノ] (1)	[ノ] (2)	[ノ] (3)	[ノ] (4)
過去語尾	-ede,	-te	-ade	-de, -te	-dde	-et,	-te	-de	-dde
過去分詞	-et,	-t	-ad	-d, -t	-dd	-et	-t	-d	-dd

[ス] 完了分詞 -at -t -tt

スウェーデン語の完了分詞

このうち，[ス] の完了分詞 supinum は，現在完了とか過去完了とかの複合時制をつくるときに，[デ][ノ]の過去分詞のように用いられるもので，[ス]ではその場合過去分詞は用いない。過去分詞は受身迂説形や形容詞として用いられる。

ここで動詞の人称語尾について述べておく。[エ] の ask は現在では三人称単数で askes のように -es の人称語尾をとるほか，I ask, we ask, you ask, they ask で人称語尾はとらない。[デ][ノ] では各人称単複とも，不定形の語尾母音に -r をつける。[ス] では不定形が -a で終るとき，それに -r をつける場合と，-a を -e に変えた上で -r をつけて -er になる場合があり，-e で終るときは -r をつけ，その他の母音で終るときも -r をつける。話しことばでは各人称単複とも同形であるが，従来書きことばでは複数は不定形と同形のままであったのが，今では書きことばも話しことばと同じく，単複の区別をしなくなった。この点で[デ][ノ]の方が[ス]よりも進歩的であった。[デ][ス][ノ]は過去では人称語尾はない。

動詞の不定形

次ぎに先ず，動詞変化テーマを掲げてみる。[エ] の動詞不定形の to は，[デ] at，[ス] att，[ノ] å，[ア] að である。

	不定形	現在	過去	過去分詞	完了分詞
[デ]	kaste	kaster	kastede	kastet	
	“投げる”				
	købe	køber	købte	købt	
	“買う”				
[ス]	kasta	kastar	kastade	kastad	kastat
	köpa	köper	köpte	köpt	köpt

"生きる"

leva	lever	levde	levd	levt
tro	tror	trodde	trodd	trott

"信じる"

[ノ]	kaste	kaster	kastet	kastet
	kjøpe	kjøper	kjøpte	kjøpt
	leve	lever	levde	levd
	tro	tror	trodde	trodd

弱動詞に若干不規則のものがある。

[例] [デ]

不定形	sælge "売る"	sige "言う"	gøre "する"
現在	sælger	siger	gør
過去	solgte	sagde	gjorde
過去分詞	solgt	sagt	gjort

[ス]

不定形	sälja	säga	göra
現在	säljer	säger	gör
過去	sålde	sade	gjorde
過去分詞	såld	sagd	gjord
完了分詞	sålt	sagt	gjort

[ノ]

不定形	selge	si	gjøre
現在	selger	sier	gjør
過去	solgte	sa (sagde)	gjorde
過去分詞	solgt	sagt	gjort

強動詞の変化のテーマ

強動詞の母音変化は，[ド][エ]のそれと一脈通じるものがあるから，覚えることがさほど重荷にならない。[デ][ス][ノ]とも大体同じ母音変化で，それによって分類されている。次ぎに若干の例をとってテーマをあげてみる。

	不定形	現在	過去	過去分詞	完了分詞
[デ]	skrive	skriver	skrev	skrevet	
	"書く"				
	flyve	flyver	fløj	fløjet	
	"飛ぶ"				
	drikke	drikker	drak	drukket	
	"飲む"				
	give	giver	gav	givet	
	"与える"				
	se	ser	så	set	
	"見る"				
	stå	står	stod	stået	
	"立っている"				
	holde	holder	holdt	holdt	
	"もつ，保つ"				
[ス]	skriva	skriver	skrev	skriven	skrivit
	flyga	flyger	flög	flugen	flugit
	dricka	dricker	drack	drucken	druckit
	giva	ger	gav	given	givit
	se	ser	såg	sedd	sett
	stå	står	stod	(stådd)	stått
	hålla	håller	höll	hållen	hållit
[ノ]	skrive	skriver	skrev,	skrevet	

		skreiv	
fly(ve),	flyver,	fløy	fløyet
flyge	flyger	flaug	
drikke	drikker	drakk	drukket
gi	gir	ga(v)	gitt
se	ser	så	sett
stå	står	sto(d)	stått
holde	holder	holdt	holdt

助 動 詞

主な助動詞を次ぎにあげて比較してみる。

[デ] være (=[エ] to be)—er {=[エ] am / is / are}—var (=[エ] was / were)

—været (=[エ] been)

have (=[エ] to have)—har—havde—haft

kunne (=[エ] to be able to)—kan (=[エ] can)

—kunne (=[エ] could)—kunnet

skulle—skal (=[エ] shall, must)—skulle (=[エ] should)—skullet

ville—vil (=[エ] will)—ville (=[エ] would)—villet

[ス]	vara	— är	— var	— varit	(完了分詞)
	ha(va)	— har	— hade	— haft	(〃)
	kunna	— kan	— kunde	— kunnat	(〃)
	skola	— ska(ll)	— skulle	— skolat	(〃)
	vilja	— vill	— ville	— velat	(〃)
[ノ]	være	— er	— var	— vært	
	ha	— har	— hadde	— hatt	
	kunne	— kan	— kunne	— kunnet	

skulle	— skal	— skulle	— skullet
ville	— vil	— ville	— villet

複 合 時 制

複合時制は大体 [エ] と同じで，例えば未来，現在完了などで[ド]のように不定形，過去分詞が文末に置かれることはない。

[デ] 未 来： 話しことばでは，現在形が未来を意味する時の副詞とともにしばしば用いられる。vil, skal＋動詞不定形もあるが，用法が複雑である。ともに単純未来を表わすこともあり，話手の意思，命令，勧告，約束を表わすこともある。

[例] Jeg køber bogen imorgen.

"わたくしは明日(その)本を買う，(買うでしょう)"

Jeg vil købe bogen.

"わたくしは本を買うでしょう，買いたい"

Jeg skal købe bogen.

"わたくしは本を買います" (約束)

Skal vi købe?

"買いましょうか"

Du skal købe.

"お前は買うんだぞ"

現在完了： har (又は er)＋過去分詞でつくる。他動詞と多くの自動詞は har をとるのが原則である。

[例] Jeg har købt bogen.

"わたくしは本を買った"

komme, gå のような自動詞は har でなく，er を用い，han er kommet "彼は来た"，han er gået "彼はいってしまった" という。この場合でも，意味によって [ド] で sein か haben かを使い分けると同じようなことが，[デ]にもある。

過去完了： har, er を havd, var にすればいい。

［ス］ **未　来：** 単純未来は現在形か komma att＋不定形で表わすのが普通で，skall は勧告，命令，約束を表することが多く，vill は意志を表わし，ともに未来でもあるが，単純未来ではない。

［例］ Jag köper boken i morgon.
Jag kommer att köpa boken.
Jag skall köpa boken.
"本を買いますよ"
Du skall köpa boken.
"お前，本を買うんだぞ"

現在完了： har＋完了分詞（過去分詞ではない）

［例］ Jag har köpt boken.

"春が来た"は Våren har kommit で，komma も har で完了形をつくるが，この場合 Våren är kommen とすれば，この kommen は過去分詞で形容詞として用いられており，ニュアンスも意味も若干違うが，とにかく"春になった"ぐらいの意味にはなる。har を hade にすれば，過去完了になる。

［ノ］ **未　来：** 未来を意味する時の副詞とともに現在形を用いて単純未来を表わすほか，一人称 skal，二人称，三人称 vil が用いられる。また komme til å＋不定形（この å は不定形の前の［エ］では to come の to，［ド］の zu kommen の zu にあたる）の形もある。vil は未来でもかなり確実性のあることを表わすのに用いることが多い。

［例］ jeg kjøper boken i morgen.
jeg skal kjøpe boken＝jeg kommer til å kjøpe boken.

現在完了： 他動詞と多くの自動詞は har＋過去分詞でつ

くるが，始動，結果，移行等を表わす自動詞では har の代りに er が用いられることは［デ］と同様である。

［例］ Jeg har kjøpt boken.
Han er kommet.

［デ］［ス］と同じく，har，er を hadde，var にかえると過去完了になる。

北欧語の受身 -s 形

動詞変化では，受身の形に北欧語は特異な形がある。それは -s を動詞語尾につけるので，［エ］［ド］にはない形である。例えば，［デ］skrive に -s をつけ skrives とすると，受身不定形になる。

［例］ ［デ］ Bogen købes. Bogen købtes.

しかし，blive をつかって，blive＋過去分詞の形ででも受身を表わすことができるし，話しことばでは，過去にはこの形の方が多く用いられるようである。完了形では，er＋blive の過去分詞＋動詞の過去分詞，例えば，Bogen er blevet købt. となる。

［例］ ［デ］ Bogen købes＝Bogen bliver købt.
Bogen købtes＝Bogen blev købt.
Bogen er blevet købt.

［ノ］でも，大体［デ］と同じように受身の形がつくられる。

［例］ Boken kjøpes＝Boken blir kjøpt.
Boken kjøptes＝Boken ble kjøpt.
Boken er blitt kjøpt.

［ス］では，Boken köpes，Boken köptes のほかに，完了分詞の受身形があるので，Boken har köpts という形もある。もちろん，それぞれ Boken blir köpt，Boken blev köpt，Boken har blivit köpt とすることもできる。この場合の köpt は完了分詞ではなくて，過去分詞である。［デ］［ノ］では er blevet，er blitt だが，［ス］では har blivit で，er と har の違いがある。

以上に，［デ］［ス］［ノ］における動詞の変化について述べたが，読者諸君も，それらが大体において［エ］［デ］に似かよっていること，そしてとくにむつかしい点もないことが，お判りになったことと思う。ところで，［ア］の動詞については，これまでふれなかったが，実は［ア］の動詞は［デ］［ス］［ノ］みたいに組し易いものではない。強動詞と弱動詞の別は，大体同じだが，人称語尾があるのでやっかいである。例えば“愛する”は［デ］elske,［ノ］elske,［ス］älska［ア］elska であるが，現在形は，［デ］［ノ］elsker,［ス］älskar に対し，［ア］では

一人称	単 elska	複 elskum
二人称	〃 elskar	〃 elskið
三人称	〃 elskar	〃 elska

となり，過去は［デ］elskede,［ノ］elsket［ス］älskade に対し

アイスランド語の弱動詞変化と人称語尾

単一人称	elskaði	複 elskuðum
二人称	〃 elskaðir	〃 elskuðuð
三人称	〃 elskaði	〃 elskuðu

となる。強動詞は，母音変化による過去形にも，それぞれ人称語尾がつく。強動詞の変化のテーマを若干あげてみる。

強動詞変化と人称語尾

fljúga — flýg — flaug — floginn
drekka — drekk — drakk — drukkinn
gefa — gef — gaf — gefinn
sjá — sé — sá — séður (sénn)
standa — stend — stóð — staðinn
halda — held — hélt — haldinn

(これらの動詞は，さきに［デ］［ス］［ノ］についてあげた動詞と同じ意味のものである．［ア］の skrifa は弱動詞であるから除いた.)

複合時制のうち，未来は munu, skulu＋不定形——munu も skulu も人称語尾変化がある——で，現在完了は hafa＋過去分詞でつくられる。hafa は，現在形単 1. hef, 2. hefur (hefir), 3. hefur (hefir), 複 1. höfum, 2. hafið, 3. hafa, 過去単 1. hafði, 2. hafðir, 3. hafði, 複 1. höfðum, 2. höfðuð, 3. höfðu と変化する。

アイスランド語の受身と中間態 Meduim

［ア］には能動態のほかに，受動態と中間態 Medium がある。受動態は受身の形で，vera (＝［デ］［ノ］være,［ス］vara)＋過去分詞でつくられる。vera は，現在形単 1. er, 2. ert, 3. er, 複 1. erum, 2. eruð, 3. eru, 過去形単 1, var, 2. varst, 3. var, 複 1. vorum, 2. vouð, 3. voru と変化する。中間態は，反照的相互的の意味で，例えば［ド］で sich を対格（四格）補語としてとる動詞，与格（三格）として伴う動詞に相当するもので，-st がつく。例えば不定形 elska は elskast となり，現在，過去では人称語尾のあとに -st がつく。

とにかく，［ア］は動詞変化が大変である。古風で面白いところはあるが，名詞といい，形容詞といい，この動詞といい，変化はなかなか覚えるのが骨である。しかし一度，ある程度の例について，それを習得してしまえば，あとは楽な筈だが，なかなかそこまでが大変なのである。前にもいったように，《難物克服》に興味のあるひとには，好適な相手である。

(H)　その他の品詞

副詞以下の品詞になると，［エ］［ド］とちょっと似ていない形のものもかなりあるが，それは大した厄介物ではない。

(イ)　副詞　移動を表わす場所の副詞に，［デ］［ノ］では -e［ス］では -a, -e をつけると静止の副詞になる。［ア］は -i -a でこの区別をしている。

［例］　［デ］　hjem“家へ”—hjemme“家にいる”; bort

“向うへ”—borte “向うに”; ud “そとへ”—ude “そとに”; ind “なかへ”—inde “なかに”; op “上へ”—oppe “上に”; ned “下へ”—nede “下に”.

[ノ] hjem—hjemme; bort—borte; ut-ute; inn—inne; opp—oppe; ned—nede.

[ス] hem—hemma; bort—borta; ut—ute, in—inne; upp—uppe; ner—nere

[ア] heim—heima; út—úti; inn—inni; upp—uppi; niður—niðri

形容詞中性形が副詞になることは，北欧語に共通である。

[例] [デ] sen 形容詞 “遅い”—sent 副詞 “遅く”

[ス] sen—sent [ノ] sen—sent [ア] seinn—seint

参考までに若干の副詞をあげておく。

[デ]	[ス]	[ノ]	[ア]
aldrig	aldrig	aldri	aldrei
“決して...ない”			
altid	alltid	alltid	alltaf
“いつも”			
atter	åter	atter	aftur
“ふたたび，またしても”			
snart	snart	snart	snart
“すぐに”			
tidlig	tidigt	tidlig	—
“早く”			
ganske	ganska	ganske	—
“全く，かなり”			

[デ]	[ス]	[ノ]	[ア]
gerne	gärna	gjerne	gjarna(n)
“よろこんで” (=[ド] gern)			
måske	kanske	kanskje	kannske, máske
“多分”			
ja	ja	ja	já
(=[エ] yes, [ド] ja)			
jo	jo	jo	jó
(否定形質問に対する肯定)			
nej	nej	nei	nei
(=[エ] no, [ド] nein)			
ikke	icke, inte, ej	ikke	ei, ekki, eigi
(=[エ] not, [ド] nicht に相当する否定詞)			

(ロ) 前置詞　前置詞は語形が少し[エ][ド]と違ったものもあるが，その用法はそれ以上に違っているので，学習上ある程度の努力を必要とする。[デ][ス][ノ][ア]で全く同じ形でも，用法の異なるものもある。

[デ]	[ス]	[ノ]	[ア]
af	av	av	af
(=[エ] of, [ド] ab)			
efter	efter	etter	eftir
(=[エ] after)			
for	för	for	fyrir
(=[エ] for, [ド] für)			
fra	från	fra	frá
(=[エ] from)			
gennem	genom	gjennom	gegnum
“...を通じて，...によって”			
i	i	i	í

(=[エ] in)			
med	med	med	með
(=[ド] mit)			
mellem	mellan	mellom	milli, millum
"...の間に"			
om	om	om	um
(=[ド] um)			
på	på	på	á
"...の上に"			
til	till	til	til
(=[エ] till)			
ved	vid	ved	við
"...のそばに" (=[エ] with, [ド] wider)			

前置詞の格支配は，今日の[デ][ス][ノ]では問題はなく，すべての前置詞は名詞の原形（主格与格対格の格語尾がないことは前に述べたとおり），代名詞の場合には与対格を伴う(固定した表現では名詞の古い生格，与格支配の名残りのあるものもあるが，それらは既に副詞句的な存在となっている)。しかし，[ア]だけは，いまでも格支配があり，ある前置詞は常に一定の格を伴い，ある前置詞は，[ド]におけると同様，静止か移動かによって，与格支配か対格支配となるので，甚だ面倒ではある。

(ハ) 接続詞　主なものを若干あげるだけに止めておく。

[デ]	[ス]	[ノ]	[ア]
og	och	og	og
"そして,...及び..." (=[ド] auch)			
også	också	også	—
"...もまた"			
men	men	men	en

"しかしながら"			
eller	eller	eller	eða
"又は"			
for	för	for	—
(=[エ] for)			
thi	ty	ti	því að
"なんとなれば,...そのわけは"			
enten...	antingen	enten...	annaðhvora
eller	...eller	eller	...eða
"...か...か"			
at	att	at	að
(=[エ] that, [ド] daß に相当する語)			
om, hvis	om	om, hvis	ef
(=[エ] if, [ド] ob)			
når	när	når	er, þegar
"のときは,...ので"			
som	som	som	sem, eins og
"...のように"			
da	då	da	er
(=[ド] dann)			
imens, mens	medan	mens	meðan
"...の一方,...であるから"			
siden	sedan	siden	síðan
(=[ド] seitdem)			

以上で，北欧語の品詞とその変化について，ざっと眼をとおしてきたが，[ア]を除けば，いずれも[エ][ド]文法以上に複雑なものはないことを知って頂いたと思うし，[エ][ド]の知識が北欧語

学習上，いかに役立つかということも判ってもらえたと思う。

III 語彙

英独との比較

本来北欧語の単語の大部分が，語源的には[エ][ド]と同じであることは，いままでたびたび述べてきたし，前章までにあげたいろいろな例によっても，それが一層明かになったことと思う。ただ，語源的にはゲルマン語ではあっても，現在では北欧語と[エ][ド]とでは違った意味につかわれている単語もありうるし，北欧語のなかだけでも，[デ]と[ス]とでは同一単語の筈でありながら，現在違った意味に用いられているものもあれば，同一の事物を指すのに，全然別の単語を用いることもあるわけである。こういったことは，かえって日常用語に多いようである。それにも拘らず，全体としては，兄弟分の単語が大多数である。

まず北欧諸国の国名をみてみよう。デンマーク国は [デ] [ス] [ノ] とも Danmark で，[ア] Danmörk であり，[エ] [ド] の Denmark, Dänemark と全く同じといっていい。スウェーデン国は，[デ][ス][ノ] Sverige [ア] Svíþjóð で，[ア] はちょっと変っているし，[エ] [ド] の Swedem, Schweden からも想像できないかも知れない。ノールウェイ国，アイスランド国は [デ][ス][ノ]Norge [ア] Noregur, [デ][ス][ノ] Island, [ア] Ísland で, [エ][ド] Norway, Norwegen, Iceland, Island から容易に見当がつく。“デンマーク語”は[デ][ノ] dansk, [ス] danska, [ア]danska, “スウェーデン語”は, [デ][ノ]svensk, [ス]svenska, [ア] sænska, “ノールウェイ語” は[デ][ノ] norsk [ス] norska, アイスランド語は, [デ][ノ] islansk, [ス] isländska, [ア] íslenzka となる。

次ぎに日常生活に関係の深い語彙若干をあげ，参考に同義語かどうかは別として語源的には対応する[エ][ド]を併記しておく。

(イ) 曜日

日　曜 [デ] søndag
[ス] söndag
[ノ] søndag
[ア] sunnudagur
([エ] Sunday, [ド] Sonntag)

月　曜 [デ] mandag
[ス] måndag
[ノ] mandag
[ア] mánudagur
([エ] Monday, [ド] Montag)

火　曜 [デ] tirsdag
[ス] tisdag
[ノ] tirsdag
[ア] þriðjudagur (第三日)
([エ] Tuesday [ド] Dienstag)

水　曜 [デ] onsdag
[ス] onsdag
[ノ] onsdag
[ア] miðvikudagur (中週日)
([エ] Wednesday [ド] Mittwoch)

木　曜 [デ] torsdag
[ス] torsdag
[ノ] torsdag
[ア] fimmtudagur (第五日)
([エ] Thursday [ド] Donnerstag)

金　曜 [デ] fredag

[ス] fredag
[ノ] fredag
[ア] föstudagur (断食日)
([エ] Friday [ド] Freitag)
土 曜 [デ] lørdag (洗い日)
[ス] lördag
[ノ] lørdag
[ア] laugardagur
([エ] — [ド] —)

日月が太陽と月の日であることは別として，[デ][ス][ノ]の火水木金は，北欧神話の女神 Tyr，“親神” Odin (Wotan)，雷神 Tor， 女神 Freja, Frigg の日の意味であるが，ラテン語曜日名の翻訳借用である。土は “洗い日” の意味である。[ア] で火木が第三日， 第四日となり，水が[ド]と同じく “中週日” になっているのは判るが，金が “断食日” (=[エ] fast day)とは，宗教上の古い習慣で金曜日には，肉類をたち，食物の量をへらすことがあったので，“精進日” ぐらいの意味であろう。

(ロ) 昼夜，四季

日 昼 [デ] dag
[ス] dag
[ノ] dag
[ア] dagur
([エ] day [ド] Tag)
夜 [デ] nat
[ス] natt
[ノ] natt
[ア] nótt

([エ] night [ド] Nacht)
朝 ([エ] morning [ド] Morgen)
[デ] morgen
[ス] morgon
[ノ] morgen
[ア] morgunn
春 [デ] forår (=[ド]Frühling) 雅語 vår(=[ラテン] ver)
[ス] vår
[ノ] vår
[ア] vor
([エ]—[ド]—)
夏 [デ] sommer
[ス] sommar
[ノ] sommer
[ア] sumar
([エ] summer [ド] Sommer)
秋 [デ] efterår (古語 høst)
[ス] höst
[ノ] høst
[ア] haust
([エ] Herbst, [ド] harvest)
冬 [デ] vinter
[ス] vinter
[ノ] vinter
[ア] vetur
([エ] winter [ド] Winter)

(ハ) **自然界，自然現象**

風 土 [デ] landskab
[ス] landskap
[ノ] landskap
[ア] landslag
([エ] landscape [ド] Landschaft)

海 [デ] hav ([古エ] hæf), sø
[ス] hav, sjö
[ノ] hav, sjø
[ア] haf, sjór
([エ] sea [ド] see)

島 [デ] ø
[ス] ö
[ノ] øy
[ア] ey
([エ]—[ド] Aue)

川 [デ] flod, å, elv
[ス] flod, å, älv
[ノ] flod, å, elv
[ア] á, elfur
([エ] flood [ド] Fluss)

山 [デ] bjerg, fjeld
[ス] berg, fjäll
[ノ] berg, fjell
[ア] fjall
([エ] fell, barrow [ド] Berg)

市 町 [デ] by (=[古エ] bý)
[ス] stad
[ノ] by
[ア] borg (=[ド] Burg [エ] borough), bær
([エ] stead [ド] Stadt)

街 [デ] gade
[ス] gata
[ノ] gate
[ア] gata
([エ] gate [ド] Gasse)

道 路 [デ] vej
[ス] väg
[ノ] vei
[ア] vegur
([エ] way [ド] Weg)

教 会 [デ] kirke
[ス] kyrka
[ノ] kirke
[ア] kirkja
([エ] church [ド] Kirche)

天 候 [デ] vejr
[ス] väder
[ノ] vær
[ア] veður
([エ] weather [ド] Wetter)

雨 [デ] regn
[ス] regn

[ノ] regn
[ア] regn
([エ] rain [ド] Regen)
風 [デ] vind
[ス] vind
[ノ] vind
[ア] vindur
([エ] wind [ド] Wind)
空気 [デ] luft
[ス] luft
[ノ] luft
[ア] loft
([エ] —[ド] Luft)
雪 [デ] sne
[ス] snö
[ノ] snø
[ア] snjór
([エ] snow [ド] Schnee)
水 [デ] vand
[ス] vatten
[ノ] vann
[ア] vatn
([エ] water [ド] Wasser)
火 [デ] fyr, ild ([古エ] æled)
[ス] eld
[ノ] fyr, ild
[ア] eldur

([エ] fire [ド] Feuer)
動物 [デ] dyr
[ス] djur
[ノ] dyr
[ア] dýr
([エ] deer [ド] Tier)
魚 [デ] fisk
[ス] fisk
[ノ] fisk
[ア] fiskur
([エ] fish [ド] Fisch)
樹木 [デ] træ
[ス] träd
[ノ] tre
[ア] tré
([エ] tree [ド]—)
花 [デ] blomst
[ス] blomma, blomster
[ノ] blomst
[ア] blóm, blómstur
([エ] bloom [ド] Blume)

(二) 人体

頭 [デ] hoved
[ス] huvud
[ノ] hode
[ア] höfuð
([エ] head [ド] Haupt)

毛 [デ] hår
[ス] hår
[ノ] hår
[ア] hár
([エ] hair [ド] Haar)

骨 [デ] ben
[ス] ben
[ノ] ben, bein
[ア] bein
([エ] bone [ド] Bein)

眼 [デ] øje
[ス] öga
[ノ] øye
[ア] auga
([エ] eye [ド] Auge)

鼻 [デ] næse
[ス] näsa
[ノ] nese
[ア] nef
([エ] nose [ド] Nase)

口 [デ] mund
[ス] mun
[ノ] munn
[ア] munnur
([エ] mouth [ド] Mund)

歯 [デ] tand
[ス] tand

[ノ] tann
[ア] tönn
([エ] tooth [ド] Zahn)

耳 [デ] øre
[ス] öra
[ノ] øre
[ア] eyra
([エ] ear [ド] Ohr)

手 [デ] hånd
[ス] hand
[ノ] hånd
[ア] hönd
([エ] hand [ド] Hand)

腕 [デ] arm
[ス] arm
[ノ] arm
[ア] armur
([エ] arm [ド] Arm)

膝 [デ] knæ
[ス] knä
[ノ] kne
[ア] hné, kné
([エ] knee [ド] Knie)

足 [デ] fod
[ス] fot
[ノ] fot
[ア] fótur

([エ] foot [ド] Fuß)

(ホ) 食物，飲物

肉 [デ] kød

[ス] kött

[ノ] kjøtt

[ア] kjöt

([エ]—[ド]—)

鳥 [デ] fugl

[ス] fågel

[ノ] fugl

[ア] fugl

([エ] fowl [ド] Vogel)

豚 肉 [デ] flæske

[ス] fläsk

[ノ] flesk

[ア] flesk, svinakjöt (=[ド] Schweinefleisch)

([エ] flesh [ド] Fleisch)

ハ ム [デ] skinke

[ス] skinka

[ノ] skinke

[ア] skanki

([エ] shank [ド] Schenkel, Schinke)

ソーセージ [デ] pølse

[ス] korv

[ノ] pølse

[ア] pylsa

([エ]—[ド]—)

([エ] egg [ド] Ei)

玉 子 [デ] æg

[ス] ägg

[ノ] egg

[ア] egg

馬鈴薯 [デ] kartoffel

[ス] potatis

[ノ] potet

[ア] kartafla

([エ] potato [ド] Kartoffel)

野 菜 [デ] (複) grønsager (語義＝青物)

[ス] (複) grönsaker

[ノ] (複) grønnsaker

[ア] grænmeti

ミルク ([エ] milk [ド] Milch)

[デ] mælk

[ス] mjölk

[ノ] melk

[ア] mjólk

([エ]—[ド]—)

ビール [デ] øl

[ス] öl,

[ノ] øl

[ア] öl

([エ] ale [ド]—)

パ ン [デ] brød

[ス] bröd

[ノ] brød
[ア] baruð
([エ] bread [ド] Brot)
バター [デ] smør
[ス] smör
[ノ] smor
[ア] smjör
([エ] smear [ド] Schmer)

わたくしは，読者諸君に《北欧語とはどんなことばか》をあらましながらでも判って頂くつもりで，以上のような概観的な説明をしてきた。それも，ただ書かれたものとしての[エ][ド]と北欧語との対比で，北欧語の読み方というか各単語の発音には全然ふれなかった。それは，いま発音について一々説明していると，際限がないし，カナ書き標音は誤りやすいし，標音記号は多分多くの読者には退屈だろうし，いろいろな理由で，甚だ不親切のようだけれども，いまは眼でみて[エ][ド]との相似や相異，北欧語相互間の相似や差異などを知ってもらえば，本書の目的は大部分達成されたものと思う。

とにかく，既に持っておられる[エ][ド]の知識を縦横に応用されるならば，北欧語——[ア]はしばらくおくとして——の学習も容易であろう。少くとも，北欧語学習にあたって，ある程度心の準備が以上でできあがっている筈である。第一，なにかの入門書について，あるいは教師について，本格的に学習を始めるにしても，もう新奇な字母や変化に驚かされることだけはないと思う。

7. 北欧語の落し穴

北欧語同士は似ているけれど

わたくしは，いままで[ア]は別として，北欧語は互によく似ている，デンマーク人がノールウェイへいっても，スウェーデン人がデンマークへいっても，それぞれ自分のことばで大体用が通じる，高等学校教育を受けた三国のひとなら，他の二ヵ国の新聞や本が楽に読める，といったことを，幾度となくいってきた。読者の多くも，前章のあらましの記述だけからでも，そのことが納得されたと思う。

ところが，不都合なことに，[デ][ス][ノ]の共通性にもとんでもない落し穴がある。その点が，北欧語を学習するものにとって，最も注意を要することなのである。落し穴とは，同じ語でありながら，[デ][ノ]と[ス]とでは違った意味をもつ語があること，同一事物を指すのに[デ]と[ス]と[ノ]でそれぞれ別の語を用いること，しかも日常語にそれが多いことである。例えば，[ス]で rolig はいまでは“面白い，愉快な”意であるが[デ][ノ]では“静かな”である——[ス]でも以前は“静かな”の意に用いられていた。ro は名詞で“静けさ，安静”([ド] Ruhe) で，rolig は形容詞で [ド] ruhig に相当する意味につかわれていた——またスウェーデン人がコペンハーゲンやオスロへいって“ソーセージ”が食べたいときに，korv といっても通じない。[デ] [ノ] では pølse だからである。もうひとつ，例えば[デ]と[ス]とよく似たような単語だから，意味も同じだろうと早合点すると失敗することがある。[デ]の forstørre は“拡大する，引伸す”で，形の上では[ス]の förstöra とよく似ているようにみえるが，これは“破壊する，台なしにする”の意味で，[ス] förstora でないと

forstørre に対応しない。ところでこの förstora と似たような[デ] forstyrre は“邪魔する，妨げる”である。こうした落し穴のゆえに，スウェーデン作家の名作の[デ]訳にさえ，時々とんだ愛嬌の誤訳もあるし，北欧三国人たちが隣国へ旅行していろいろな珍談となることもある。昔，わたくしが住んでいた下宿に，ノールウェイ人の婦人がふたり泊っていたことがある。食後よくサロンで，いろいろと[ス]と[ノ]のことばの違っている話などをしたことがある。オスロでは“市電”は trikk というが [ス] では spårvagn という，婦人の“スカート”は [ス] では kjol だが，[ノ] で kjole というと男の“燕尾服”，婦人の“ドレス”になるといった風なことを，それからそれへと話がはずんで大変面白かった。しかし，そういう話をするのに，相手は終始[ノ]を喋り，スウェーデン人の方は[ス]で喋っていたのだから愉快である。差しづめ，九州から上京したひとを，わが家へとめて九州弁と東京語の差異を語りあうようなものである。

そこで，こうした大小の落し穴を若干あげてみたい。

まず，[デ] [ノ] ではコペンハーゲンやオスロは by “都会，市”であるが，[ス] では by は“村”で，ストックホルムは [ス] stad “都会，市”である ([ノ] では stad を用いることもある)。[ス] tidning “新聞”は，[デ] [ノ] では avis という。但しデンマークやノールウェイの新聞には，何々 -tidende という名の新聞があって，この tidende が [ス] の tidning に当るが，普通に新聞というときは avis である。[デ] で“少年”は dreng というが，[ス] で dräng は今では農家などの“下男”であり，[ス] の“少年”は gosse, pojke で，[ノ] では gutt という。“少女”は [デ] pige, [ノ] pike, [ス] flicka で，[ス] の piga は“下女”である。

[デ] artig は“おとなしい，躾がよい”の意味に用いられるが，[ス] [ノ] では少し違って，“いんぎんな，丁寧な”となる。

[ス] ensam は“孤独の”を第一義として“ひとりぼっちの”，“淋しい”などの意味がでてくるが，これに似た [デ] [ノ] の ensom は逆に“淋しい”，“さびれ果てたる”が第一義である。“美しい女”の“美しい”は[ス]では vacker, [デ] smuk, [ノ] smukk, pen で，[ノ] では vakker もあるが，[デ] で vakker は“はきはきしている”，“しっかりしている”で，意味がずれてきている。[ス] で“あの人は rar だ”といえば，この rar は“やさしくて善良”といった意味であるが，[ノ] で rar は普通には“風変りな”とか“奇妙な”の意味である。

人間が物を“食べる”のは [ス] では äta であるが，[デ] [ノ] では spise で，[ス] でも spisa という語もあるにはあるが，普通には äta である。[デ] で æde, [ノ] で ete はむしろ動物などが食うことをいう。[ス] の“朝食”は frukost だが，[デ] [ノ] で frokost は“中食”にもなる。[デ] で“朝食”は morgenmad とか morgenkaffe とかいう。“ソーセージ”は [ス] korv, [デ] [ノ] pølse で，[デ] の kurv は“かご”になる。コーヒーに入れる“ミルク”は [ス] mjölk, [デ] mælk, [ノ] melk で同じようだが，“クリーム”は [デ] fløde [ノ] fløte, に対し，[ス] grädde で大分違う。“アイスクリーム”は，[デ] [ノ] では is で，[ス] では glass《フランス語 glace) といった具合である。

“洗濯する”は [ス] tvätta で，[デ] [ノ] vaske で，“ランドリー”は [ス] tvättinrättning, [デ] [ノ] vaskeri で，ちょっと同じ商売屋とは思えない。スウェーデンでは，“商店”“店や”のことをaffär というが，[デ] [ノ] ではこの場合 forretning が用いられる。

“病院”は [ス] では sjukhus が普通で，lasarett ともいうが，[デ] [ノ] で普通にいう hospital は [ス] では“精神病院”に限るので，[ス] では間違っても“hospital にはいっていました”とはいわないことだ。

“汽車”は［デ］［ノ］tog,［ス］tåg で問題はないが,“急行列車”となると,［デ］［ノ］hurtigtog［ス］snälltåg となって,若干違ってくる。“自転車”は［ス］cykel,［デ］cykel で［エ］からの外来語用語であることは明瞭であるが,［ノ］の sykkel となると発音上は同じでも, c と s と変っているだけに,見た眼にはちょっと見当がつきかねる。［ノ］では語源を無視して発音通りに綴字するので,例えば［デ］［ス］nation は nasjon となっている。

“アンデルセン童話”の“童話”は［デ］［ノ］eventyr であるが,［ス］では saga, 複 sagor で,［ス］の äventyr は“冒険”である。“鉛筆で書く”その“鉛筆”も［デ］［ノ］では blyant で,［ス］では blyertspenna という。［デ］［ノ］の blyerts は“鉛鉱”の意味になる。

スウェーデン人が［デ］や［ノ］でよく間違えるのに,“黒い”“やわらかい”の二語がある。“黒い”は［ス］では svart,［デ］では sort,［ノ］では普通は svart である。また“やわらかい”は［デ］では blød［ノ］は bløt であって,［ス］mjuk と全然違うから無理もない。もっとも［ノ］mjuk 又は myk は柔軟性のあるという意味で“やわらかい”にも通じるが,［エ］soft の意味では bløt である。

道を歩いていて工事現場などにくると,“注意”の札があったり,落し穴の前であやぶく“危い！気をつけて！”と叫んだりするとき,［ス］では se upp! というが,［デ］では pas på! になる。

8. サスペラント Sasperanto

北欧のエスペラント

北欧三国のひとびとが,お互に自国語で用がたせることは——恐らく南米のスペイン語を国語としている国々のひとびと同士の間でも同じことと思うし,スペインとポルトガルとの間でも,これと同じようなことがいえるかも知れないが——単に旅行者だけのことではない。デンマークの会社でオスロに支店をもっているとか,スウェーデンの商社でコペンハーゲンに店を出しているとかいった,そういう実業人などは,始終三国の間を往ったり来たりしていて,自国語以外の北欧語なんか,外国語とは思っていない。彼らに《どんな外国語が喋れるか》と訊ねても,北欧語は計算にいれない。スウェーデン人が,デンマーク語やノールウェイ語を本格的にやっていても,外国語をやっているとはいわない。彼らは,学問的に北欧語を研究するのでない限り,ことさら,文法から本式に勉強しない。三国の高等学校では,それぞれ他の二つの北欧語を読むことを習うことはあっても,大抵は自国の国語とか文学との関連においてである。三国の実業人などは,実地の経験でひとりでに覚えていく。それに,ノールウェイ人と話すときのスウェーデン人は,最初は［ス］丸出し,相手も［ノ］丸出しであっても,段々にスウェーデン人は,相手の［ノ］を,ノールウェイ人は［ス］を真似てくる。ことに《落し穴》になりそうなときは,意識的に,相手に正しく理解してもらえるように,正しい語を使うようになる。いつもスウェーデン人に接触するデンマーク人は,［ス］を話さないまでも,［デ］を話しながらも常に《落し穴》に注意して,肝心なところはわざと［ス］を挿入したりする。

北欧三国人以外の,つまり外国人で,どれか一つ北欧語が出来

るひとも，結局いままで話してきたような流儀で，他の二つの北欧語をものにすることができるわけである。[デ]からでも，[ス]からでもいい。[デ]から[ノ]への距離は，[ス]へのそれよりも近い。これは，文法と語彙の点からみたことで——既に述べたノールウェイの国語の歴史からみても当然のことである——語音や発音の点からみると，[ス]と[ノ]の間の方が[ス]と[デ]よりも近い——言語史的にみると，実は[ス]と[デ]が東北欧語，[ノ]と[ア]が西北欧語ということになっていて，昔は[ス]と[デ]の関係の方が[ス]と[ノ]の関係よりも近かった。

とにかく，北欧三国人の間では，[ス][デ][ノ]のどの一つでもが《エスペラント》的存在といっていいわけで，これら三国の政治的な公の会議や，商業上の私的会合が，年中どこかで行われていても，別に英独仏語などの通訳はいらない。各国人めいめい自分のことばで話して，結構目的を果している。

こういった三国人が，一番多く日々に接触し，共に仕事をしている大きい職場，国際的な企業に，日本でも有名な SAS [Scandinavian Airlines System) がある。わたくしは，ここで何も SAS の宣伝をするわけではないが，経営面から運営運航面まで，さらに技術面からサーヴィス関係スチュワーデスに至るまで，三国人が入り乱れて働いている。彼らは SAS の人間という意識はあっても，話し相手がデンマーク人とかノールウェイ人とか，そんなことは考えない。自分のことばで喋っている相手が，同国人であるとか,ないとかは,少くともことばの点では考慮しない。デンマーク人のスチュワーデスは，[デ]でスウェーデン人のパーサーに話しかける。パーサーは自国語[ス]で，何のくったくもなく返答する。こうしたことが，一年三百六十五日繰返されている。そのうちに，このデンマーク人のスチュワーデスは，スウェーデン人のパーサー，ノールウェイ人のパイロットと話すとき，本国

人と話すときと若干違った語彙と表現法をもった[デ]を喋るようになる。つまり[ス]や[ノ]の影響をうけてくるからである。そのスウェーデン人のパーサーにしてもノールウェイ人のパイロットにしても，最早純然たる[ス][ノ]をスチュワーデスと喋るのではなく，幾分[デ]の語彙を用いたりしている。事務室でもそうであり，重役室の会議のときもそうである。わたくしは，別にこの眼でみてきたわけではないが，そういうことを幾度となく SAS 関係者から聞いている。

サスペラント

こうした結果はどうなったか。それは，[デ][ス][ノ][ア]の北欧語のほかに《第五の北欧語》が生れたのである。これは大袈裟な言いかたかも知れないが，しかし少くとも SAS 人種自ら称するところのサスペラント Sasperant。の存在は事実である。平たく申せば，ちゃんぽん語かも知れないが，とにかく，そうした一つのグループに通用することばができあがったのである。ある一つのことばが話される社会にも，あるグループに通用する職業語とかいうものはあるが，サスペラントの場合，一応は国際的である点が違う。あえてエスペラントをもじってサスペラントと称する所以であろう。

9. 結　び

とりとめもなく，へたな長談義ではあったが，わたくしは，読者諸君をひとりでも多く，北欧語学習へひっぱりこむため，大いに努めたつもりである。余り本当のことをいい過ぎたので，かえって読者をがっかりさせたり，出足をくじいたりしなかったかをおそれている。しかし，わたくしは，初めから本当のことをいって，事前納得づくで，読者諸君に北欧語をやってもらいたいのである。決して，むつかしいことばではないが，ことに易しいことばでもない。しかし，英独をやったかたなら，学び易いし，ドイツ語をやると同じ努力でドイツ語程度のことは学び得られることを，繰返し強調して筆をおくことにする。

10. 付　録

1. 北欧文学：作家と代表作品

(イ)　デンマークの作家と代表作品

H. C. Andersen (1805–1875)

童話 Eventyrene で知られ過ぎているため，《即興詩人》Improvisatoren のほかにも，すぐれた詩，劇，短編，中編小説があることが忘れられがちである。例えば，詩《心のメロディ》Hjertets Melodier，《死にゆくこども》Det døende Barn，劇《アグネーテと海の精》Agnete og Havmanden，小説《一介の楽師》Kun en Spillemand，紀行《詩人のバザー》En Digters Bazar など。しかし，Andersen の書いているデンマーク語は，今日からみると時代の隔りもあって，必ずしも易しく読めるものばかりではないことを知られたい。

Jens Peter Jacobsen (1847–1885)

歴史物語《マリー・グルッペ》Marie Grubbe，小説《ニルス・リューネ》Niels Lyhne，短編《モー(ゲ)ンス》Mogens

Holger Drachmann (1846–1908)

詩集《詩》Digte，詩集《弱音のメロディ》Dæmpede Melodier，詩集《歌と海》Sange og Havet，小説《聖火》Den hellige Ild.

Karl Gjellerup (1857–1919)

ノベル賞作家　小説《ミンナ》Minna，《粉挽き小屋》Møllen，《巡礼カマニタ》Pilgrimen Kamanita，《金の枝》Den gyldne Gren，詩集《わが愛の書》Min Kærligheds Bog.

Henrik Pontoppidan (1857–1943)

ノベル賞作家　小説《うまし土地》Det forjættede Land,

《幸運児》Lykkeper, 《死者の国》De dødes Rige.

Herman Bang (1857–1912)

小説 《望みなき家族》Haabløse Slægter, 《ミカエル》Mikaël, 《祖国なき者》De uden Fædreland, 《漆喰壁》Stuk, 《チーネ》Tine.

Johannes Jørgensen (1866–1956)

詩集《ざんげ》Bekendelse, 《生命の虚偽と真実》Livsløgn og Livsandhed, 聖人伝 《アッシジのフランシスコ》Frans af Assisi, 《シエナのカタリーナ》Katarina af Siena, 《ヴァードステーナのビルギッタ》Birgitta af Vadstena. 小説《最後の審判の日》Den yderste Dag. 自伝《わが生涯の物語》Mit livs Legende.

Johannes Jensen (1873–1950)

ノベル賞作家 《長い旅》Den lange Rejse, 小説 《アイナ・エルケァ》Ejnar Elkær 《グドルン》, Gudrun, 短編集《ヒンメアランン物語》Himmerlandshistorier, 《神話》Myter.

Martin Andersen Nexø (1869–)

小説《征服者ペレ》Pelle Erobreren, 《人の子エディト》Ditte Menneskebarn.

Jeppe Aakjaer (1866–1930)

小説《怒りの子》Vredens børn, 詩集《裸麦の歌》Rugens Sange.

Hans Christian Branner (1903–)

小説《おもちゃ》Legetøj, 《水辺に遊ぶ子》Barnet leger ved Stranden, 《或る女の夢》Drømmen om en Kvinde, 《騎士》Rytteren.

Jacob Paludan (1896–)

小説《灯台のまわりの鳥》Fugle omkring Fyret, 《土地は

熟す》Markerne modnes, 《ヨルゲン・ステイン》Jørgen Stein, エッセー集《幼時にかえる》Retur til Barndommen.

Tom Kristensen (1893–)

詩集《スキラとカリブディス》Mellem Scylla og Charybdis, 小説《却掠》Hærværk.

Aage Dons (1908–)

小説《ここで道は交叉する》Her mødes alle Veje, 《兵士の泉》Soldaterbrønden, 《窓ガラスの霜》Frosten på ruden, 《消えた時はまだ去っていない》Den svundne tid er ej forbi.

Kjeld Abell (1901–)

戯曲 《出てこないメロディ》Melodien, der blev væk, 《エヴァが果す子の義務》Eva aftjener sin Barnepligt, 《ユーディト》Judith, 《雲の上の日々》Dage paa en sky 《六月のある夜》En juninat.

Martin Hansen (1909–)

小説《幸福なクリストファー》Lykkelige Kristoffer, 《虚偽の男》Løgneren.

Knuth Becker (1893–)

小説《日々の糧》Det daglige Brød, 《世界は待っている》Verden venter, 《不安の春》Uroligt Foraar.

Hans Kirk (1898–)

小説 《漁夫》Fiskerne, 《新しい時代》De nye Tider, 《怒りの子》Vredens søn.

Kaj Munk (1898–1944)

牧師であったが，著述による反ファショ，反ナチ運動のかどで，ドイツ軍の占領中ゲシュタポの手で暗殺された。戯曲《初めにことばありき》Ordet, 《るつぼのそばに》Han sid-

der ved Smeltediglen, 《女ディクテーター》 Diktatorinden, 《ニルス・エベスン》 Niels Ebbesn, 《カンヌ戦役の前》 Fφr Cannae. 詩集 《最後の詩》 Sidste Digte.

Knud Sφnderby (1909-　)

小説 《ジャズ時代に》 Midt i en jazztid, 《女ひとりが余計だ》 En kvinde er overflφdig.

Kelvin Lindemann (1911-　)

小説 《緑の木のある家》 Huset med det grφnne træ, 《自由はそれに堪えられる》 Den kan vel Frihed bære, 《黄金の鎖》 Gyldne kæder, 《夢の橋》 Drφmmenes bro.

Ole Juul (1919-　)

小説 《赤い牧草地》 De rφde Enge, 《狂った楽園》 Det tossede paradis.

(ロ) スウェーデンの作家と代表作品

Viktor Rydberg (1828-1895)

小説 《シンゴアッラ》 Singoalla, 《最後のアテネ人》 Den siste atenaren, 《刀鍛冶》 Vapensmeden.

Ola Hansson (1860-1925)

短編 《感じ易い恋心》 Sensitiva amorosa, 《時の女》 Tidens kvinnor, 小説 《エステル・ブリューセ夫人》 Fru Ester Bruce, 詩集 《詩》。

Gustaf af Geijerstam (1858-1909)

短編集 《貧しい人々》 Fattigt folk, 小説 《メヂューサの頭》 Medusas huvud, 《女の力》 Kvinnomakt.

August Strindberg (1849-1912-)

小説 《赤い部屋》 Röda rummet, 《女中の子》 Tjänstekvisnnans son, 《島の人々》 Hemsöborna, 《結婚すること》 Gifta-

《或る痴人の弁護陳述》 En dåres försvarstal, 戯曲 《父》 Fadren, 《ジュリー嬢》 Fröken Julie, 《死の舞踏》 Dödsdansen, 《夢劇》 Ett drömspel, 《ウーロフ師》 Mäster Olof, 《復活祭》 Påsk, 《タマスカスへ》 Till Damaskus, 《大街道》 Stora landsvägen.

Gustaf Fröding (1860-1911)

詩集 《ギターとアコーデオン》 Gitarr och dragharmonika, 《新しい詩》 Nya dikter, 《聖杯の雫》 Gralstänk.

Selma Lagerlöf (1858-1940)

ノベル受賞作家　小説 《ヨスタ・ベーリング物語》 Gösta Berlings saga, 《イェルーサレム》 Jerusalem, 《アーネの金》 Herr Arnes penningar, 《或る荘園の物語》 En herrgårdssägen, 《モールバッカ》 Mårbacka, 《アンナ・スヴェード》 Anna Svärd, 短編集 《キリスト伝説》 Kristuslegender, 《にせキリストの奇蹟》 Antikrists mirakler, 郷土物語 《ニルス・ホルゲルソンの素晴らしいスウェーデンの旅》 Nils Holgerssons underbara resa genom Sverige.

Erik Axel Karlfeldt (1864-1931)

ノベル賞作家。詩集 《荒野と恋の歌》 Vildmarks- och kärleksvisor, 《フリドリーンの歌》 Fridolins visor, 《フロラとポモナ》 Flora och Pomona, 《秋の角笛》 Hösthorn.

Vener von Heidenstam (1859-1940)

ノベル賞作家。短編集 《カロリーネナ》 (カール十二世とその将兵) Karolinerna, 詩集 《巡礼と遍歴時代》 Vallfart och vandringsår, 小説 《聖女ビルギッタの巡礼》 Heliga Birgittas pilgrimsfärd, 自伝 《マロニエの花咲きし頃》 När kastanjerna blommade.

Dan Andersson (1888-1920)

短編集《炭焼き物語》Kolarhistorier, 詩集《黒いバラード》Svarta ballader, 小説《家なし三人》De tre hemlösa, 《ダーヴィド・ラムの遺産》David Ramms arv.

Sven Lidman (1882-　)

小説《老嬢たちの家》Huset med gamla fröknarna.

Hjalmar Bergman (1883-　)

小説《ある死者のメモアール》En döds memoarer, 《ヴァードチョーピングのマルキュレルー家》Markurells i Wadköping, 《燕尾服をきた娘》Flickan i frack, 《道化師ヤック》Clownen Jac.

Sigfrid Siwertz (1882-　)

小説《メーラル湖の海賊》Mälarpirater, 《ガラスの山》Glasberget.

Karin Boye (1900-1941)

詩集《雲》Moln, 《かくれた土地》Gömda land, 小説《カロカイン》Kallocain, 短編集《故障》Ur funktion.

Frans. G. Bengtsson (1894-1955)

小説《ヴァイキング赤蛇》Röde Orm.

Hjalmar Gullberg (1898-　)

詩集《二十世紀の恋》Kärlek i tjugonde seklet, 《五つのパンと二尾の魚》Fem kornbröd och två fiskar.

Pär Lagerkvist (1891-　)

ノーベル賞作家。小説《刑吏》Bödeln, 《こびと》Dvärgen, 《バラバ》Barabbas.

Olle Hedberg (1899-　)

小説《きれいな白い歯》Vackra vita tänder, 《その前日》Dan före dan, 《花嫁が青くなる》Då bleknar bruden, 《夢判断》Drömtydning, 《写真師フォン・ブロムベルイ》Foto von Blomberg.

Stig Dagerman (1923-1954)

小説《蛇》Ormen, 《囚人の島》De dömdas ö, 《やけどした子供》Bränt barn, 《婚礼のいざこざ》Bröllopsbesvär, 戯曲《死刑囚》Den dödsdömde, 《マルトの影》Skuggan av Mart.

Elin Wägner (1882-1949)

小説《オーサ・ハンナ》Åsa-Hanna, 《対話は続く》Dialogen fortsätter, 《風がページをめくった》Vinden vände bladen, 伝記《セルマ・ラーゲレョーヴ伝》。

Vilhelm Moberg (1898-　)

小説《夜の早馬》Rid i natt!, 《移民》Utvandrarna, 《開拓移民》Invandrarna, 戯曲《暴力》Våld, 《貞操》Kyskhet, 《女中部屋》Jungfrukammare, 《生れない息子》Vår ofödde son, 《神様の夫人》Gudens hustru.

Harry Martinson (1904-　)

紀行《あてなき旅》Resor utan mål, 《別れの岬》Kap Farväl, 小説《いらくさの花咲く》Nässlorna blomma, 《鐘の国への道》Vägen till Klockrike.

Moa Martinson (1890-　)

小説《母の結婚》Mor gifter sig, 《星の下の道》Vägen under stjärnorna, 《生の饗宴》Livets fest.

Ivar Lo-Johansson (1901-　)

小説《モーナの死》Måna är död, 《トラクター》Traktorn, 自伝小説《文盲》Analfabeten, 《行商人》Gårdfarihandlaren, 《ストックホルム者》Stockholmaren.

Eyvind Johnson (1900-　)

小説《ウーロフの話》Romanen om Olof, 《ばらと火の

夢》Drömmar om rosor och eld, 《太陽をどけろ》 Lägg undan solen.

Artur Lundkvist (1906-　)

詩集《黒い町》Svart stad, 《夜の橋》Nattens broar, 《マリンガ》Malinga, 小説《河は海へ流れる》Floderna flyter mot havet, 《ヴィンディングのワルツ》Vindingevals.

Nils Ferlin (1898-　)

詩集《骸骨ダンサーの唄》En döddansares visor, 《はだしの子》Barfotabarn, 《皇帝のオーム》Kejsarens papegoja.

Lars Ahlin (1915-　)

短編《わたしを待っていてくれる眼はない》Inga ögon väntar mig, 小説《緑野の処女》Jungfrun i det gröna, 《にっきの味》Kanelbiten, 《死はわたしのもの》Min död är min.

Ulla Isaksson (1916-　)

小説《この夜に》I denna natt, 《海の彼方》Ytterst i havet, 《女人館》Kvinnohuset, 《欲せざるところへ》Dit du icke vill.

Sven Salje (1914-　)

小説《この肩に》På dessa skuldror, 《夜の羽ばたき》Vingslag i natten.

Sara Lidman (1923-　)

小説《タール採取小屋》Tjärdalen

Bengt Anderberg (1920-　)

小説《カイン》Kain.

Waldemar Hammenhög (1902-　)

小説《エステルとアルベルト》Esther och Albert, 《ペッテルソンとベンデル》Pettersson och Bendel.

(ハ) ノールウェイの作家と代表作品

ノールウェイ作家の作品の場合, すでに本文で述べたように, (イ) dansk-norsk, (ロ) bokmål, (ハ) nynorsk の三つのうちのどれかで書かれている。

Ibsen, Bjørnson, Kielland, Lie, Hamsun などの作品などをみても, Ibsen あたりは dansk-norsk, Bjørnson 以下になると大分 riksmål——後の, bokmål——が強い。

Undset になると, 綴字法は古いが bokmål で, 方言がかなり取入れられている。

現代作家の場合, ノールウェイでも, nynorsk 作家である場合は, はっきりとそう呼ばれている。そうでない作家は, 全部 bokmål 作家ということになる。

文学に直接関係あることだから, 附け加えておくが, ノールウェイには nynorsk の劇場があって, 出し物は全部 nynorsk で演じられる。オスロにもこのような劇場がある。

Henrik Ibsen (1828-1906)

戯曲《人形の家》Et dukkehjem, 《民衆の敵》En folkefiende, 《野鴨》Vildanden, 《ロスメルスホルム》Rosmersholm, 《海の夫人》Fruen fra havet, 《ヘッダ・ガーブレル》Hedda Gabler.

Bjørnstjerne Bjørnson (1832-1910)

ノベル賞作家。戯曲《スコットランドのマリア・スチュアルト》Maria Stuart i Skotland 《新婚》, De nygifte, 小説《日向が丘のシニョーヴェ》Synnöve Solbakken, 《アルネ》Arne, 《漁夫の娘》Fiskerjenten, 《神の道》Paa Guds veje.

Alexander Kielland (1849-1906)

小説《労働者》Arbeidsfolk, 《運命の女神》Fortuna, 《仲夏祭》Sankt Hans Fest, 《ガルマンとウォルセ》Garman og Worse, 短篇集 Novelletter.

Jonas Lie (1833-1908)

小説《水先案内と妻》Lodsen og hans hustru,《ジルイエの家族》Familjen paa Gilje,《三本マスト船未来号》Tremasteren 》Fremtiden《.

Knut Hamsun (1859-1952)

ノベル賞作家。小説《飢え》Sult,《新しい土》Ny Jord,《流浪者》Landstrykere,《大地の収穫》Markens Grφde.

Olov Duun (1876-1939)

landsmål の作家。小説《ユーヴィクの人々》Juvikfolke,《ラグンヒルド》Ragnhild,《晩年》Siste leveåre,《人間と力》Menneske og maktene.

Sigrid Undset (1882-1949)

ノベル賞作家。小説《ジェニイ》Jenny,《クリスチン・ラヴランスダテル》Kristin Lavransdatter,《イーダ・エリサベツ》Ida Elisabeth,《貞淑なる妻》Den trofaste hustu,《ドロテア夫人》Madame Dorthea.

Johan Bojer (1872-)

小説《大いなる飢饉》Den store hunger,《最後の海賊》Den siste viking,《海辺の住民》Folk ved sjφen.

Johan Falkberget (1879-)

小説《ヤーン山のリスベト》Lisbet paa Jarnfjell,《クリスチァーヌス・セクスツス》Christianus Sextus,《夜のパン》Nattens brφd.

Herman Wildenvey (1886-)

詩集《愛撫》Kjærtegn,《焔のオーケストラ》Ildorkestret,《詩の泉のほとりにて》Ved sangens kilder.

Arnulf Øverland (1889-)

詩集《パンとぶどう酒》Brφd og vin,《赤い戦線》Den

rφde front,《漁夫と魂》Fiskeren og hans sjel, 短編集《うるわし地上》Deilig er jorden, 戯曲《友人》Venner.

Arthur Omre (1887-)

小説《密輸入者》Smuglere,《クリスチヌス・ベルクマン》Kristinus Bergmann, 戯曲《綱渡りダンサー》Linedansere.

Helge Krog (1889-)

戯曲《偉大な我々》Det store vi,《陽のあたるところで》På solsiden,《生ける者と死せる者》Levende og dφde.

Sigurd Christiansen (1891-1947)

小説《ガソリン・スタンドの男》Mannen fra bensinstasjonen, 戯曲《夜の旅》En reise i natten.

Ronald Fangen (1895-1946)

小説《或る女の道》En kvinnes vei,《光の天使》En lysets engel, 戯曲《敵》Fienden.

Sigurd Hoel (1890-)

小説《夏の太陽のなかの罪びと》Syndere i sommersol,《里標での邂逅》Mφte ved milepelen,《ほかにすきな人がある》Jeg er blitt glad i en annen.

Aksel Sandemose (1899-)

小説《ある船員の下船》En sjφmann går i land,《過去は夢》Det svundne er en drφm,《アリス・アトキンソンと愛人》Alice Atkinson og hennes elskere.

Nordahl Grieg (1902-1943)

小説《船は航海を続ける》Skibet gaar videre, 戯曲《或る青年の恋愛》En ung mands kjærlighet,《われらの名誉と力》Vår ære og vår makt,《だが，あすには．．．》Men i morgen,《敗北》Nederlaget.

Tarjei Vesaas (1899-)

landsmål (現在の nynorsk) 作家。小説《黒馬》Dei svarte hestane, 《闇のなかの家》Huset i mørkret, 《塔》Tårnet, 短編《風》Vindane, 戯曲《朝風》Morgonvinden, 《神の住居》Guds bustader.

Tore Ørjasæter (1886-)

landsmål 作家。詩集《谷間にて》I dalom, 《影》Skuggen, 戯曲《クリストフォロス》Christophoros, 《長い新婚旅行》Den lange bryllupsreisa.

Johan Borgen (1902-)

戯曲《リー課長》Kontorchef Lie, 《待つ間に》Mens vi venter 小説《暗黒に向いて》Mot mørket, 《子供心》Barnesinn, 《愛の小径》Kjærlighetsstien, 《愛の短編》Noveller om kjærlighet, 《夏はない》Ingen sommer.

Alex. Brinchmann (1888-)

戯曲《おまもり》Amulett, 《偽りと幸運》Løgnen og lykken, 《父を愛するもの》Den som elsker sin far.

Ernst Orvil (1898-)

小説《白い不安》Hvit uro, 《遊びは続く》Leken går videre, 詩集《わたしのもとへ》Kommer du til mig, 戯曲《赤い灯》Rødt lys.

Øivind Bolstad (1905-)

小説《黄金の鎖》De gyllne lenker, 《赤いベゴニヤ》Den røde begonia, 《ヴィンケル老人の遺言》Gamle Winckels testament, 戯曲《愛国者》Patrioten.

Waldemar Brøgger (1911-)

小説《見えない戦線》Den osynliga fronten (スウェーデン亡名中に出版), 《三たびの女王》Tre ganger dronning, 《七つの生命をもつ男》Mannen med syv liv.

Sigurd Evensmo (1912-)

小説《イギリス旅行者》Englandsfarere, 《深夜の出発》Oppbrudd etter midnatt, 《国境地帯》Grenseland, 《こうもり》Flaggermusene, 《故里へ》Hjemover.

Finn Carling (1925-)

戯曲《ガラス玉》Glasskulen, 短編《少女と小鳥》Piken og fuglen.

(二) アイスランドの作家と代表作品

Halldór Laxness (1902-)

ノベル賞作家。小説《サルカ・ヴァルカ》Salka Valka, 《独立の民》Sjálfstætt fólk, 《原爆基地》Atómstöðin, 《カシミアの大織工》Vefarinn mikli frá Kasmir, 三部作《アイスランドの鐘》Islandsklukkan (第一部《アイスランドの鐘, 第二部《ブロンドの乙女》Hið ljósa man, 第三部《コペンハーゲンの火災》Eldur i Kaupinhafn), 四部作《オーロフル・カラソン》Olofur Karason (第一部《世の光》Ljós heimsins, 第二部《夏の宮殿》Höll sumarlandsins, 第三部《詩人の館》Hús skáldsins, 第四部《天の美》Fegurð himinsins).

Gunnar Gunnarsson (1889-)

作品は, すべてデンマーク語で書かれている。小説《山の上の教会》Kirken paa Bjerget, 《城の一族の物語》Borgslægtens Historie, 《愚かなる者は幸なり》Salige er de enfoldige.

Kristmann Guðmundsson (1902-)

初期作品にはノールウェイ語で書かれているものもある。小説《花嫁衣裳》Brúðarkjóllin, 《人生の朝》Morgunn lífsins.

Guðmundur Kamban (1888-1945)

デンマーク語で書いた作品が多い。小説《スカールホル

ト》Skálholt,《眠る家》Det sovende hus, 戯曲《ハッダ・パッダ》Hadda Padda.

2. 北欧語入門書と学習参考書

本文にもふれておいたとおり，ある外国語を学習しようとするとき，適当な入門書や参考書が，しかも日本語で書かれたものが豊富にあるか，ないかが，学習意欲に大きい影響を与えるものである。この点からいうと，北欧語は実に割が悪い。日本語で書かれたものが極めて少いからである。英語やドイツ語で書かれた本は，入手がやっかいであるし，辞書となると，北欧語⇄日本語は絶無だから，どうしても英又は独又は仏⇄北欧語を使用しなければならない不便がある。しかし，こうした困難な条件は特殊語学——わが国では英独仏以外の外国語は特殊だそうである——の学習にはいつも付きものであるから，致しかたない。ただそれを克服するのみである。

英語や独語，仏語で書かれた入門書といっても，随分たくさんあって，その全部をわたくしがあとからあとから買って一々眼を通しているわけではない。それで，わたくしがある程度責任をもって，これなら入門書としてお勧めしてもいいと思うものだけ挙げておく。わたくしが今まで経験したところでは日本の学習者のなかには，やたらいろいろな入門書を数ばかり買いあさって満足しているひとが多いが，そういうひとにかぎって，そのうちのどの一冊も満足に仕上げていないか，いつまでたっても入門段階でうろうろしているかたが多い。どうせ一つの外国語を勉強するのであるから，《これ一冊で万事 O.K.》といった本はあり得ないことは判りきってはいるが，いつまでも入門書マニヤでは不経済だと思う。辞書にしても，あれもある，これもあると迷い，一冊買ったあとで，ほかにも少し部厚いよさそうなのがあると，えらく損をしたように思うひとがある。辞書は，英語やドイツ語の場

合のように，日本人学習者を目標につくられたものは始めからないのである。例えば[デ]⇄英又は独にしても，デンマークで出版されている[デ]⇄英・独は，デンマーク人の英独語学習のためのものであるから［デ］の発音が示されていないのが普通である。英・独→[デ]はデンマーク人が英独を読むときのためにつくられているのであって，英・独の発音はつけてあるが，いずれも英・独を母語とするひとが[デ]を学習するためには，どうしても不十分なところがあるのはやむを得ない。その点，例えば英米で出版された[デ]→英，ドイツで出版された[デ]→独の方が，薄くて小型でも都合のいいことがある。[ス][ノ]についても同じことがいえる。辞書は，結局初めから大きいのを買っておく方が得のようだ。ただ，入門程度のときに，大きい辞書をひくのは仲々手数がかかり，手がつかれる。その点，小型の方は引くのに楽である。理想は，まず小辞典で始め，大辞典に移ればいいわけだが，それは経済力との相談事であろう。ところで，大辞典といったが，これは実は問題で，英独仏のような大辞典はなかなか見当らない。あれば，うんと部厚の二巻物になる——例えばノールウェイ，スウェーデンで出ている新しい[ノ]→英，[ス]→英のように——。これもつまりは本来北欧語を母語するひとが英独を書くときに引く，われわれでいえば和→英，和→独なのであって，外国人の[ノ][ス]学習者はただそれを逆用し得るに過ぎないわけである。だから，辞書のことも，あまり気にしていると際限がない。道具にばかり気を使わないで，実際の勉強の方に力をいれる方が賢明ではなかろうか。

I. 入門書

(1) デンマーク語

（イ）日本語で書かれたもの：

森田貞雄著　**デンマーク語文法入門**　(語学文庫) 大学書林発行　近刊

近くこの入門書が刊行されるから，日本の学習者には大いに便利である。同じ大学書林の《四週間双書》より以上に入門者向きに編さんされる筈である。

(ロ)　英語で書かれたもの：

Paul Fenneberg: **Speak Danish, a practical guide to colloquial Danish.** (G.E.C. Gad, Copenhagen—Oxford University Press, London—New York)

最も手軽な入門書で，話しことばの[デ]を教えながら文法全般にわたって一応説明している。

Ingeborg Stemann: **Danish, a practical reader** (H. Hagerup publishers, Copenhagen)

これは，デンマークで随時行われている外国人のための[デ]講座に使用される教科書で，非常によく出来た本であるが，独学には全然不向きである。教師について，これ一冊完全に仕上げたならば，あとは別項参考書にあげた読章に進んでいける。

Danish Conversation-Grammar (Method Gaspey-Otto-Sauer, Julius Groos, Heidelberg)

有名な外国語双書であるが，わたしの手元にあるのは古い1911年版。独学用として申し分ないと思う。恐らく新しい版があると思うが未見。

(ハ)　ドイツ語で書かれたもの：

Henning Henningsen: **30 Stunden Dänisch für Anfänger** (Langenscheidts Kurz-lehrbücher)

上掲 Paul Fenneberg の Speak Danish と同じような，日常語からはいっていく入門書で，文法の説明は Speak Danisch よりは若干詳しい。これ一冊完全にマスターすれば入門としては十分だと思う。

H.C. Einersen: **Grund-dänisch** (Det Danske Selskab, Kϕbenhavn)

上掲 Stemann の Danish に当るドイツ語による入門書であるが，独学向きでなく，教師についてやる必要がある。

(ニ)　その他：

Berlitz: Dansk bog

これは世界的に有名な外国語学校 Berlitz school で使用する教科書であって，これ一冊仕上げると相当なものである。よく日本人は Berlitz の本をばかにするが，全然外国語を仲介としてつかわないで，いきなり[デ]でこの教科書で，やさしい問答をくり返していきながら進む。せっかちな日本人には《程度が低い》，《じれったい》と思うひとがあるようだが，実はそうではない。最初からデンマーク人について習い，英独語による説明を絶対にしないことを条件としているので，日本ではちょっとむりかも知れない。

(2)　スウェーデン語

(イ)　日本語で書かれたもの：

松下正二著　**スウェーデン語文法入門**（語学文庫）大学書林発行　近刊

これは上掲デンマーク語文法入門の姉妹編で，極めて平易にスウェーデン語への手引きをするものである。

尾崎義著　**スウェーデン語四週間**　大学書林 ¥500

《四週間双書》としては程度が少し高過ぎたという批評は当っている。これ一冊を丹念に勉強すれば相当高い読書力が得られる筈である。

(ロ)　英語で書かれたもの：

R. J. McClean: **Swedish** (Teach Yourself Books, English Universities Press Ltd., London)

英語で書かれた独学用入門書としては，わたくしは，この一冊をお勧めする。ほかの入門書は不用。これなら東京の丸

善，教文館，紀の国屋でなど手軽に買える。

(ハ) ドイツ語で書かれたもの：

Wolf: **Kleine schwedische Sprachlehre** (Lehrbücher Method Gaspey-Otto-Sauer, Julius Groos, Heidelberg)

戦後版で，なかなかスマートにできている。名は kleine でも入門書としては十分である。

(ニ) その他：

Berlitz: **Svensk bok**

Dansk bog と同じシステムの教科書。

(3) ノールウェイ語

(イ) 日本語で書かれたもの：

佐藤俊彦著 **ノールウェイ語文法入門** 大学書林発行 近刊

上掲のデンマーク語，スウェーデン語の姉妹編で，大体同じようなシステムの入門書。

(ロ) 英語で書かれたもの：

Sommerfelt & Marm: **Norwegian** (Teach Yourself Books)

上掲 McClean の Swedish の姉妹編で同一の双書から出ている。ノールウェイ語 bokmål の独習書としては，最もすぐれた本である。著者のひとり，Sommerfelt は，ノールウェイの世界的言語学者である。これを一冊やれば，ほかの入門書はいらない。最も新しい正字法によっている。

(ハ) ドイツ語で書かれたもの：

わたくしが持っているものは，1900年初期のもので，今日では使用にたえない。新しい正字法による bokmål を教える独学用の入門書は，あるかもしらないが未見。なるべく上掲 Teach Yourself Books の Norwegian を用いてもらいたい。

(4) アイスランド語

(イ) 日本語で書かれたもの：

全くない。

(ロ) 英語で書かれたもの：

Stefán Einarsson: **Icelandic** (The Johns Hopkins Press, Baltimore, U.S.A.)

入門書というべくあまりにも部厚いが，全巻の三分の一以上は[ア]→[エ]小辞典で，ほかに二，三あるものに比べると，一番 up-to-date である。もともと，戦時中アイスランドへ進駐するアメリカ軍の将校のための教科書で，必らずしも独学に適当とはいえないかも知れない。システムが少しヨーロッパの語学書と違っているが，終りの方は程度が高く，これ一冊で入門から上級まで O.K. というところであろう。お勧めできる唯一のもの。

(ハ) ドイツ語で書かれたもの：

未見。

(ニ) その他：

Sigfús Blöndal & I. Stemann: **Praktisk lærebog i islandsk nutidssprog** (Munksgaards Forlag, København)

上掲 Icelandic には及ばないが，デンマーク語からはいるに適当な入門書で，これも上級程度ぐらいの読章がある。

注意：アイスランド語の入門書や文法を買うときには，古代アイスランド語のそれと間違えないようにしてもらいたい。古代アイスランド語のものは英独でかなりたくさん出ているから。辞書についても同様の注意を要する。

II. 学習参考書

(イ) デンマーク語

文法 外国語で書かれた本格的なデンマーク文法はないから，入門程度の文法を終ったひとは，まず読む力をつけてから，デンマーク語で書かれた学校教科書をやった方がいいと思う。アメリカで出版されているデンマーク文法教科

書は概ね入門書の文法程度である。日本の学習者は，すぐに高級の文法書を求める傾向があるが，それよりまず読書力をつけてから，デンマーク語でデンマーク文法をおやりになることをお勧めする。学校用の文法は中学校用，高等学校用といろいろあるから，一々挙げない。うんと高級になれば

Paul Diderichsen: *Elementær dansk grammatik* (Gyldendal, Kφbenhavn)

Erik Rehling: *Det danske sprog* (J.H. Schultz Forlag, Kφbenhavn)

があるが，ともに大学の参考書で，普通にいう《学校文法》ではない。

読章——Ingeborg Stemann: *Dansk for udlændinge* (Gyldendal, Kφbenhavn) 同じ著者の入門書 reader をやってから進む読本であるが，他の入門書を終ったひとでも，これへ進んで差支えない。近代文学の選集も含まれていて，これを一冊あげてしまえば[デ]は十分である。

辞書——(1) [デ]⇄[エ] *Dansk-engelsk ordbog, Engelsk-dansk ordbog* (Berlingske Forlag, Kφbenhavn)

(2) [デ]⇄[ド] *Dansk-tysk ordbog, Tysk-dansk ordbog* (Berlingske Forlag, Kφbenhavn)

この二つはまず手頃なところ。普通これで十分。熟語は少ないが，それほど不自由を感じない。

(3) [デ]→[デ] *Nudansk ordbog* (Politikens Forlag)

上掲とともに，この二巻ものの[デ]→[デ]辞書——といっても小型で取扱便利なもの——があれば十分。特殊な表現例がでている。各見出語に語源もついている。

(4) *Hvad hedder det?* (Politikens Forlag)

図解[デ]—[エ]—[ド]—[仏]辞書で，是非お勧めしたい。品

物が判っていて語が判らないのを絵で引き，語が判っていて物が何だか判らないのを語で引く，というドイツの Duden 図解辞書と同じもの。

(ロ) スウェーデン語

文法——デンマーク語について述べたと同じことも，ここで当てはまる。学校用文法教科書では，

Sundén: *Svensk språklära*.

Beckman: *Svensk språklära* (större editionen).

を挙げておく。ほかにもいくらもある。

読章——入門書のかたわら

Gunnar Rosén: *Svenska för utlänningar* (Folkuniversitetets förlag, Stockholm)

を読むと，日常生活に親しみながら，読む力がついていく。それから

Nils-Herman Lindberg: *Lehrbuch der schwedischen Sprache* (Riksföreningen för svenskhetens bevarande i utlandet, Göteborg)

で，詳しい註釈（ドイツ語）付きの読章と，かなり詳しい文法をやれば入門以上である。英語からやるひとは，入門書が終る前からでも，

Björkhagen: *Modern Swedish Grammar*

Björkhagen: *First Swedish Book*

の二冊を併用するといい。この二冊はむしろ教師について，じっくりと学習するひとのためで，せっかちのひとには不向きかも知れない。

辞書——(1) [ス]⇆[エ] *Svensk-engelsk ordbok, engelsk-svensk ordbok*

[ス]⇄[ド] *Svensk-tysk ordbok, tysk-svensk ordbok*

[ス]⇄[仏] *Svensk-fransk ordbok, fransk-svensk ordbok*

以上 Norstedt & Söner, Stockholm から出ているが，Skol-
upplaga という中型のほかに，大型のもある（ただし [ス]→[エ] の大型新版は二巻物でまだ下巻は完成していない。大型の [ス]→[ド] は一番いいようだ)。ポケット辞書 fickordböcker と称する小型もあるが，中型以上がいい。

(2) [ス]⇄[エ]　*Svensk-engelskt lexikon, engelsk-svenskt lexikon*

[ス]⇄[ド]　*Svensk-tyskt lexikon, tysk-svenskt lexikon*

[ス]⇄[仏]　*Svensk-franskt lexikon, franskt-svenskt lexikon*

以上，Natur och kultur, Stockholm 刊行の学校用辞書もある。

(3) [ス]→[ス]　*Illustrerad svensk ordbok* (Natur och Kultur, Stockholm)

現在ある[ス]→[ス]辞書で一巻物として最良である。お勧めする。

(4) *Bildordboken* (När-Var-Hur-Serien) (Forum, Stockholm)

上掲図解デンマーク語辞典の姉妹書で，[ス]—[エ]—[ド]—[仏]になっている。是非お勧めしたい。

(5) 尾崎義編　**スウェーデン語 1500 語**　大学書林発行 ¥150

これは辞書ではないが，頻用度にもとづいて選ばれた基本単語その他重要単語など結局合計 2500 語を収録している。

(ハ)　ノールウェイ語

文法——デンマーク語について述べたと同じことがいえる。bokmål の文法書では，

Western: *Norsk riksmåls-grammatikk*

Næs: *Norsk grammatikk*

が優秀であるが，大学程度のもので，普通初学者が使う文法ではない。

読章——Haugen: Beginning Norwegian は読章としていいものであるが。

辞書——(1) [ノ]→[エ] *Norsk-engelsk ordbok*, (Gyldendal Norsk Forlag)

[エ]→[ノ] *Engelsk-norsk ordbod*, (Gyldendal Norsk Forlag)

まず手頃なところである。

(2) [ノ]→[ノ] Krogsrud & Seip: *Norsk Riksmåls-ordbok*

(3) Ivar Alnæs: *Norsk uttale-ordbok* (Aschehoug, Oslo)

bokmål の発音辞典で，是非お勧めする。発音に関する詳細な記述がある。

(4) Ivar Aasen: *Norsk ordbog*

これは landsmål の辞書で説明は dansk-norsk を用いているが，bokmål 作家の小説などに方言が出てくると，この辞書がないと都合が悪いことがある。普通の入門程度には不必要である。

(ニ)　アイスランド語

文法——デンマーク語で書かれた文法としては

V. Guðmundsson: *Islandsk grammatik* (H. Hagerup, Kϕbenhavn)

が適当である。

読章——前にあげた入門書の読章で十分である。あとは読本式のものでは

S. Nordal: *Íslenzk lestrarbók* 1750–1930 (Bókaverzlun Sigfúsar Eymundssonar, Reykjavík)

文学選集で註釈（スウェーデン語）付きのいいものとして

Jansson, Le ijström, Þorarinsson: *Íslenzkir leskaflar* (Svenska Bokförlaget, Norstedts, Stockholm)

がある。

辞書——(1) [ア]→[エ] G.T. Zoëga: *Íslenzk-ensk orðabók*

手頃でいい。

(2) [ア]→[ス] Leijström, Magnússon: *Isländsk-svensk ordbok*

スウェーデン語からはいるひとには一番いい。

(3) [ア]→[デ] S. Blöndal: *Íslensk-dönsk orðabók*

部厚な辞書で，デンマーク人向きの発音記号がつけてある。

恐らく[ア]→外国語では最大であるが，普通はこんな大きなものはいらない。

注意: アイスランドで刊行されている本は，甚だ高価で，ちょっとした文学書でも日本金では 4000 円から 5000 円する。Blöndal の [ア]→[デ] 辞書は向でう買って仮綴の紙表紙で約 14,000 円であった。

III. その他

そのほか，一つの北欧語から，他の北欧語を学ぶための学習書，文法書ならいくらでもあるが，ここでは必要がないからあげない。

わたくしは，アメリカで出ている多くのすぐれた北欧語学習書，辞書は見たことがあっても，手許にもっていないから，一々あげることはやめたが，日本ではそういうアメリカの本の方が入手し易いと思うから，それによられてもいいわけである。なお，もし，どうしても手軽にこれ以上本の名前を知る必要があったら，教文館か，丸善か，紀の国屋あたりの洋書語学部門の図書カタログを取り寄せてみて頂きたい。



目録進呈／落丁本・乱丁本はお取替えいたします

昭和 47 年 1 月 20 日　第 1 版 印 刷
昭和 47 年 1 月 25 日 © 第 1 版 発 行
昭和 60 年 5 月 30 日　第 5 版 発 行

北欧語のはなし

著者　尾崎　義
発行者　佐藤義人

発行所
株式会社 大学書林
東京都文京区小石川 4 丁目 7 の 4
振替口座東京 2－43740番
電話東京 (812) 6281～3番
郵便番号 112

印刷・研究社印刷　製本・榎本製本